

村山浅間神社調査報告書

－遺跡範囲確認調査編－

2005

富士宮市教育委員会

村山浅間神社調査報告書

－遺跡範囲確認調査編－

2005

富士宮市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、静岡県富士宮市村山字水神1151番地他に所在する、村山浅間神社の調査報告書－遺跡範囲確認調査編－である。
- 2 本書は、平成13年度から平成15年度にかけて富士宮市教育委員会が行なった、村山浅間神社遺跡範囲確認調査事業の、平成15年度実施分についての報告書である。この調査は、平成15年度までで3次の発掘調査が行なわれているが、平成14～15年度の第2次・第3次調査は、政府が行なった緊急雇用対策事業の一環として実施したものである。なお、平成13年度、14年度調査の成果については、富士宮市文化財調査報告書第29集『村山浅間神社遺跡』（富士宮市教育委員会 2002年）に報告している。
- 3 本書における発掘調査及び整理作業は、平成15年度市町村緊急地域雇用創出特別対策事業基金を得て富士宮市教育委員会が、株式会社東日に委託して実施したもので、調査体制は以下のとおりである。

調査主体者	富士宮市教育委員会 教育長	大森 衛
調査担当者	富士宮市教育委員会文化課 学芸員 渡井 英智	
	富士宮市教育委員会文化課 瞽託員 佐野 恵里	
	株式会社東日 文化財調査室長 小金澤 保雄	
	株式会社東日 文化財調査室調査員 武田 英俊	
調査補助員	村野 立巳、古郡 善明、堤 健一、渡辺 剛、渡辺 敏雄、石川 雅紹	
	大平 美奈子、山崎 芙美子、佐藤 節子（平成15年6月9日～10月8日）	
整理作業員	大平 美奈子、山崎 芙美子、佐藤 節子（平成15年10月9日～12月25日）	

- 4 調査期間は、発掘調査を平成15年6月9日～10月8日まで行い、整理作業を平成15年10月9日～12月25日まで行なっている。
- 5 写真撮影は、発掘調査の写真撮影を武田が主に行ない、遺物の撮影を佐野が行なった。
- 6 本書の執筆は、第I章～第V章を渡井、佐野、武田が分担して行ない、文責は末尾に示した。編集は、佐野が行なった。
- 7 出土資料のうち、陶磁器について、藤澤良祐氏（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）、堀内秀樹（東京大学文化財調査室）に、また建築部材については、建部恭宜氏（日本建築学校）石材鑑定は、北垣俊明氏（財団法人石の博物館奇石博物館）に鑑定していただいた。
- 8 本書を刊行するあたり、次に記す各氏より、指導や助言をいただいた。（敬称略、五十音順）
池谷 信之、池谷 初恵、木ノ内 義昭、栗木 崇、坂本 美夫、末木 健、鈴木 敏則、
篠原 武、志村 博、高野 徳多果、辻 真人、贊 元洋、平川 南、布施 光敏、保坂 康夫、
堀内 真、前田 勝己、山田 康雄、山本 義孝、沼津市文化財センター、富士吉田市歴史民俗博物館、山梨県立埋蔵文化財センター
- 9 本書に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会文化課で保管している。
- 10 本書の刊行に関する事務は、富士宮市教育委員会文化課で行なった。

凡 例

1. 地形図、遺構実測図中の標高は、全て海拔高度をもって示し、単位はメートル(m)とする。
2. 村山浅間神社遺跡の調査区は、平成14年度に、日本測地系国土座標第VIII系に基づく国土座標軸を使用してグリッドを使用して設定し、続く平成15年度調査にも継続して使用した。方位は、国土座標によっている。
3. 挿図中の縮尺は、挿図ごとにスケールで示している。
4. 挿図中のトーンは、以下のとおりである。



.....擾乱



.....煤

5. 土層注記及び土器・陶磁器観察表に記載した色調は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会事務局)で補って判断している。
6. 土器・陶磁器観察表に記載した色調は、破片面積の最も占有する割合である。
7. 挿表中の数値は、すべてセンチメートル(cm)で表している。()内で示す数値は、推定値または残存値である。
8. 本調査報告書で使用した地形図は、昭和62年及び、平成8年に建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図(1/2,500、1/10,000)を使用した。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の経過と経緯	5
第Ⅲ章 発掘調査	
1 遺構	9
2 遺物	45
第Ⅳ章 分布調査	59
第Ⅴ章 村山浅間神社関連遺跡及び初出資料	69
第VI章 富士地域の関連遺跡	75
第VII章 まとめ	111
報告書抄録	114

挿 図

図 1 関連遺跡分布図	2
図 2 周辺遺跡分布図	3
図 3 村山浅間神社遺跡の縄文土器	4
図 4 調査区位置図	7
図 5 I 区周辺地形図	10
図 6 I 区遺構分布図	11
図 7 I 区断面図	12
図 8 I 区礎石建物 1 実測図	13
図 9 I 区礎石建物 1 平面図	14
図 10 I 区集石土坑 1 実測図	15
図 11 I 区集石土坑 2 実測図 1	16
図 12 I 区集石土坑 2 実測図 2	17
図 13 I 区遺物分布図	18
図 14 I 区 Tr 1 実測図	19
図 15 I 区 Tr 1 遺物分布図	19
図 16 I 区造成概念図	21
図 17 II 区周辺地形図	23
図 18 II 区遺構分布図	24
図 19 II 区 A 地区実測図	25
図 20 II 区 Tr 1 実測図	26
図 21 II 区 Tr 2 実測図	26
図 22 II 区 Tr 3 実測図	27
図 23 II 区 Tr 6 実測図	27
図 24 II 区 B 地区実測図	28
図 25 II 区 Tr 4 実測図	29
図 26 II 区 Tr 5 実測図	29
図 27 II 区遺物分布図	30
図 28 II 区区画概念図	30
図 29 II 区造成概念図	31
図 30 III 区遺構分布図	33
図 31 III 区堅穴住居 1 実測図	31
図 32 III 区堅穴住居 1 爐・炉実測図	35
図 33 III 区溝 1 実測図	36
図 34 III 区土坑 1・土坑 2 実測図	37
図 35 III 区遺物分布図	38
図 36 IV 区遺構分布図	40
図 37 VII 区周辺地形図	41
図 38 VII 区遺構分布図	42
図 39 VII 区礎石建物 1 実測図	43
図 40 VII 区 Tr 1 実測図	44
図 41 I 区出土遺物 1	45
図 42 I 区出土遺物 2	46

図 43	I 区出土遺物 3	47	図 66	岩倉 B 遺跡出土土器実測図 2	83
図 44	I 区出土遺物 4	48	図 67	宇東川遺跡出土土器実測図	84
図 45	I 区出土遺物 5	49	図 68	赫夜姫古墳出土土器実測図	84
図 46	II 区出土遺物 1	51	図 69	丸ヶ谷戸遺跡遺構全体図 (中世・近世)	87
図 47	III 区出土遺物 1	52	図 70	丸ヶ谷戸遺跡出土遺物実測図	88
図 48	III 区出土遺物 2	53	図 71	上石敷遺跡出土遺物	89
図 49	IV 区・V 区出土遺物	53	図 72	上石敷遺跡出土銭貨拓影図	90
図 50	IV 区周辺・VII 区出土遺物	54	図 73	石敷遺跡中世遺構分布図	91
図 51	「山内屋敷分配井略縦図」(一部) 天保 3 年(1832)	59	図 74	石敷遺跡出土遺物実測図	91
図 52	分布調査周辺地形図	60	図 75	月の輪上遺跡遺跡建物跡実測図	92
図 53	分布調査地点位置図	61	図 76	月の輪上遺跡平地式建物出土実測図	93
図 54	分布調査表採陶磁器 1	63	図 77	市内遺跡出土かわらけ実測図	93
図 55	分布調査表採陶磁器 2	64	図 78	泉遺跡出土遺物実測図	94
図 56	分布調査表採陶磁器 3	65	図 79	王藤内の塚現況平面図と 出土遺物実測図	98
図 57	分布調査表採陶磁器 4	66	図 80	王藤内の塚実測図	99
図 58	中宮八幡堂跡位置図	69	図 81	王藤内の塚近世墓構造概念図	100
図 59	中宮八幡堂現況概略図	70	図 82	東平遺跡出土かわらけ実測図	102
図 60	中宮八幡堂出土遺物	72	図 83	出口遺跡出土遺物実測図	103
図 61	村山浅間神社所蔵の須恵器実測図	74	図 84	沢東 A 遺跡第 1 号土坑 出土遺物実測図	104
図 62	市内遺跡出土土器実測図	76	図 85	医王寺経塚出土遺物	106
図 63	泉遺跡出土遺物実測図	77	図 86	古代・中世の本拠地想定図	108
図 64	富士市岩倉 B 遺跡全体図	81			
図 65	岩倉 B 遺跡出土土器実測図 1	82			

挿 表

表 1	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 1	—土器・陶磁器—	56
表 2	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 2	—石製品—	57
表 3	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 3	—金属製品(釘)—	57
表 4	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 4	—金属製品(煙管)—	57
表 5	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 5	—金属製品(銭貨)—	57
表 6	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 6	—写経石—	58
表 7	村山浅間神社遺跡出土遺物観察表 7	—その他—	58
表 8	分布調査表採遺物観察表		68
表 9	中宮八幡堂出土遺物観察表 1	—陶磁器—	73
表 10	中宮八幡堂出土遺物観察表 2	—銭貨—	73

写 真 図 版

- 図版 1 A. I 区 磯石建物 1 全景 / B. I 区西壁
- 図版 2 A. I 区 Tr 1 /
B. I 区 集石土坑 1 檢出状況
- 図版 3 A. I 区 集石土坑 2 檢出状況 /
B. I 区 集石土坑 2
- 図版 4 A. II 区 A 地区全景 /
B. II 区 A 地区西壁 (南側)
- 図版 5 A. II 区 Tr 1 / B. II 区 Tr 3
- 図版 6 A. II 区 Tr 2 西壁 (北側) /
B. II 区 Tr 2 西壁 (南側)
- 図版 7 A. II 区 Tr 6 北壁 / B. II 区 B 地区全景
- 図版 8 A. II 区 Tr 5 西壁 / B. III 区 全景
- 図版 9 A. III 区 堅穴住居 1 /
B. III 区 堅穴住居 1 完掘
- 図版 10 A. III 区 堅穴住居 1 竪 /
B. III 区 堅穴住居 1 竪完掘
- 図版 11 A. III 区 溝 1 / B. III 区 土坑 2
- 図版 12 A. VI 区 北壁 / B. VII 区 磯石建物 1
- 図版 13 A. I 区 灯明皿上皿 (図 41-2) /
B. I 区 灯明皿上皿 (図 41-3) /
C. I 区 香炉 (図 41-6) /
D. I 区 花瓶 (図 41-7)
- 図版 14 A. I 区 写経石 (図 45) /
B. II 区 かわらけ (図 46-7) /
C. IV 区 かわらけ (図 49-9)
- 図版 15 A. III 区 緑釉陶器素地稜碗 (図 47-18) /
B. III 区 灰釉陶器碗・皿 (図 47-19・20) /
C. III 区 灰釉陶器壺 (図 47-23・24)
- 図版 16 A. III 区 甲斐型土器壺 (墨書「朝」) (図 47-4)
B. III 区 甲斐型土器壺 (図 47-6)
C. VII 区 灯明皿上皿 (図 50-1)
- 図版 17 A. 中宮八幡堂跡 太白手碗 (図 60-6)
B. 中宮八幡堂跡 端反碗 (図 60-12)
C. 中宮八幡堂跡 筒型碗 (図 60-13)
D. 中宮八幡堂跡 土瓶蓋 (図 60-18)

第 I 章 位置と環境

1. 地理的環境

富士宮市は、富士山頂上の剣ヶ峰から南西麓一帯を占有している。富士山は、周知のように日本最高峰 3,776m の成層火山であり、山体は、約 11,000～2,200 年前までの新富士火山の噴火活動による噴出物や、それ以前の 9・10 万年前～1 万年前の古富士火山の噴火活動による噴出物により幾層にも覆われて、山麓は緩やかで広大な斜面地を形成している。山体の南側は静岡県、北側が山梨県となる。

富士山麓は、西側を標高 1,946m の毛無山を最高峰とする天守山脈に、西南にかけて標高 300～200m の羽鮈丘陵と星山丘陵とにとり囲まれており、富士山との間には、富士山麓に源流を持つ潤井川が流れで沖積平野が形成されている。潤井川は、流長約 28km で、富士西南麓の湧水を集めてやがて駿河湾奥に注ぎ込む河川である。潤井川の河口の約 6km 西には、八ヶ岳を源流として駿河湾奥に注ぎ込む富士川の河口がある。富士山縁辺には多くの湧水が点在するが、古富士火山泥流が不透水層であるため、富士山麓の雨水や雪解け水が透水層である新富士火山溶岩流にしみこんで、溶岩流末端で地表に湧出したものと考えられている。富士宮市域においては、湧水地は、主な場所として猪之頭養鱒場周辺、白糸の滝、淀師、浅間大社境内の湧玉池、よしま池周辺の 5 箇所が挙げられるが、これら以外にも山麓に小規模な湧水地は確認されている。富士宮市の遺跡分布をみると、富士山麓の高所を除き、湧水の豊富なところや、水の流れる河川の集中するところに密集する傾向が認められ、富士山の恵みを享受して営まれているといえる。

2. 歴史的環境（図 1）

富士宮市には、富士山信仰に関連する遺跡として、村山浅間神社遺跡（1）、山宮浅間神社遺跡（4）、人穴富士講遺跡（5）、浅間大社遺跡（10）、三島ヶ嶽經塚（36）が挙げられ、富士山西南麓に点在している。村山浅間神社遺跡は、富士修験の中核として、山宮浅間神社遺跡は浅間大社遺跡と共に、「山宮」と「里宮」として、人穴富士講遺跡は、近世以降に爆発的広まりを見せる富士講の聖地として考えられている。

浅間大社は、『浅間神社社伝』に記載される、大同元年（806）に山宮から大宮へ社殿を移すとの記事から、9 世紀初頭が紀源とされている。村山浅間神社は、『本朝世紀』に記載される、久安年中（1145～1150）に末代上人が頂上に大日堂を構えたとの記事から、12 世紀中頃には富士修験が誕生したと考えられている。これまでに行なわれた発掘調査では、村山浅間神社遺跡では、9 世紀後半～10 世紀前半に遡る竪穴住居跡と溝、浅間大社では、9 世紀後半まで遡る土師器壺を出土しているものの遺構を伴うものではなく、12 世紀以降の竪穴状遺構、掘立柱建物などが検出されている。

富士山西南麓の奈良・平安時代遺跡は、7 世紀末～9 世紀初頭の 129 棟の竪穴住居や 53 棟の掘立柱建物が検出され、富士郡衙関連遺跡と考えられる富士市東平遺跡（22）を中心とする、富士川・

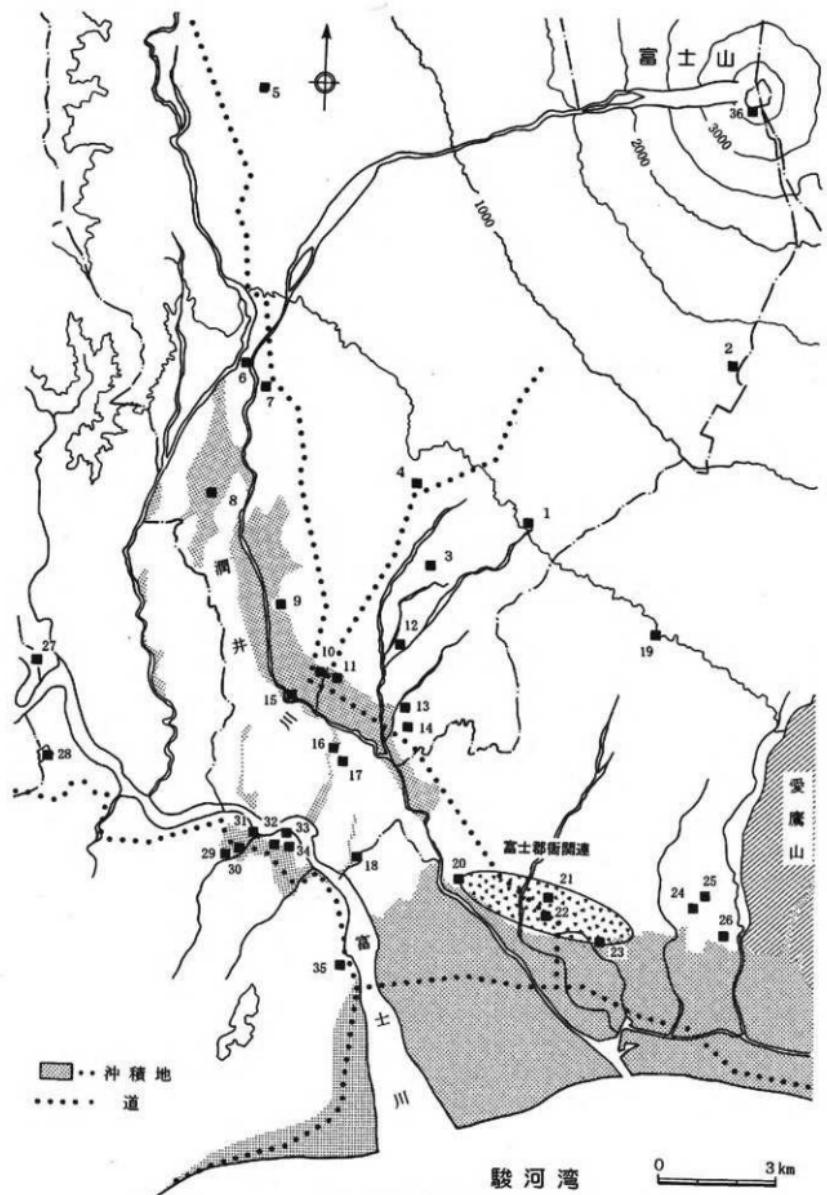
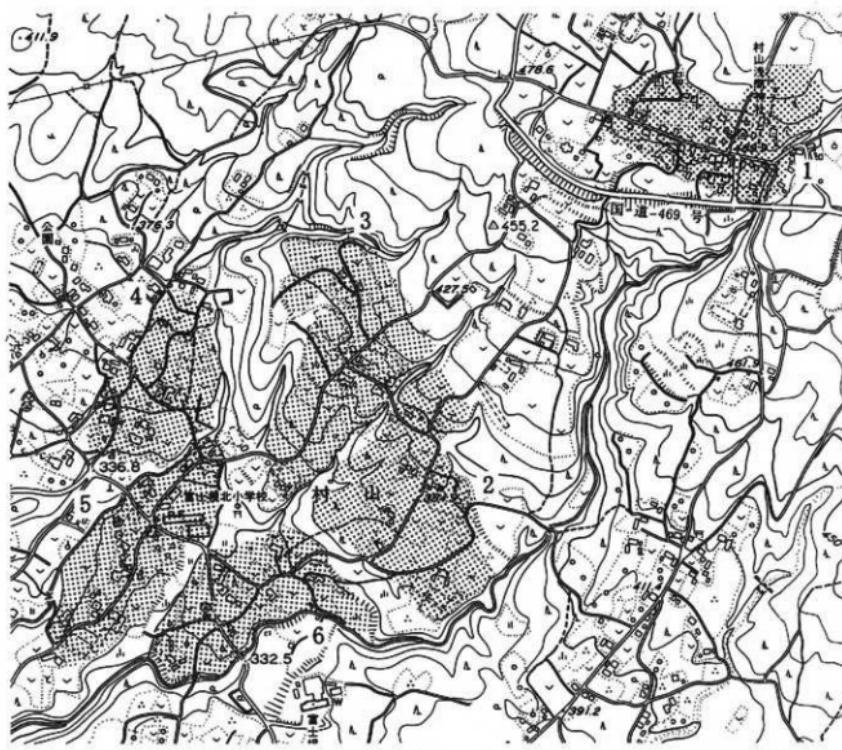


図 1 関連遺跡分布図

平安～江戸時代主要遺跡

1. 村山浅間神社遺跡
2. 中宮八幡堂跡
3. 二股村石經塚
4. 山宮浅間神社遺跡
5. 人穴
6. 井出館
7. 辻遺跡
8. 南条館
9. 渋沢遺跡
10. 浅間大社遺跡
11. 大宮城跡
12. 丸ヶ谷戸遺跡
13. 上石敷遺跡
14. 石敷遺跡
15. 泉遺跡
16. 王藤内の塚
17. 月の輪上遺跡
18. 初田遺跡
19. 岩倉B遺跡
20. 沢東A遺跡
21. 出口遺跡
22. 東平遺跡
23. 善徳寺城跡
24. 赫夜姫古墳
25. 大坂上古墳
26. 医王寺經塚
27. 葛谷城跡
28. 白鳥山城跡
29. 松野城跡
30. 萩館
31. 半在家遺跡
32. 浅間林遺跡
33. 中野遺跡
34. 中野沖田遺跡
35. 破魔射場遺跡
36. 三島ヶ嶽經塚



1 村山浅間神社遺跡 2 中宮八幡堂跡 3 二股村石經塚 4 山宮浅間神社遺跡 5 人穴
6 丸ヶ谷戸遺跡 6 ワラビ平遺跡

図 2 周辺遺跡分布図 (1 / 10,000)

潤井川氾濫原を望む丘陵上一帯に遺跡が集中する。それに対し、富士宮市域では、奈良・平安時代遺跡は、不活発な時期を迎える、8世紀前半に峯石遺跡、石敷遺跡(14)、権現遺跡、木ノ行寺遺跡が終焉を迎えてからは、極めて希薄となる。その後は、9世紀後半～10世紀前半に、辻遺跡(7)、浅間大社遺跡(10)、泉遺跡(15)、初田遺跡(18)が見られるが継続性はなく、11世紀後半まで、また空白期を迎える。

平安時代末期から中世にかけては、浅間大社遺跡と浅間大社遺跡の東隣に位置する大宮城跡(11)とが、遺構を伴って遺跡の占有が明確化していく時期となり、大宮城跡は、中世以降、富士山西南麓の政治経済の中心地となつたと考えられ、豊富な舶載陶磁器の出土が知られる。また、月の輪上遺跡では、13世紀頃の可能性がある総柱建物2棟や平地式建物1棟、掘立柱建物2棟が検出されている。その他には、丸ヶ谷戸遺跡(12)、石敷遺跡(14)で中世の墓域と道路跡が検出されている。

3. 村山浅間神社遺跡について(図1～3)

村山浅間神社は、富士宮の市街地から離れた、富士山南西麓の標高500m付近にある。周囲の遺跡は、直線距離にして600m南で、標高400mを中心とする範囲に、社領東遺跡、社領西遺跡、中村谷戸遺跡、社領遺跡、ワラビ平遺跡といった縄文遺跡が確認されている(図2)。村山浅間神社遺跡範囲確認調査の一環で、村山の集落を中心とする範囲の分布調査を行っているが、その際に、縄文土器を採取しており(図3)、縄文遺跡は富士山南麓標高500mまで及んでいる。

村山浅間神社遺跡の地理的環境は、地質的に富士山の溶岩流である元村山溶岩流上に位置し、一帯は東西約600mの範囲で台状に高くなっている。村山浅間神社遺跡は、この平坦面上を遺跡範囲としている。この平坦面上には、村山浅間神社と村山の集落が展開しており、この集落は現在でも富士山麓の集落としては最北限である。

村山浅間神社は、かつては富士山登山道の村山口の出発点として登山者を集めた場所であり、富士修験の中核であった場所と考えられている。富士修験は、聖徳太子や役小角の登拝の伝承を持つが、富士修験の成立に深く関わったと考えられるのは、12世紀半ばの人物である末代上人である。『本朝世纪』によると、久安年中(1145-1150)に末代上人は、数百度の富士山登頂の後、山頂に大日寺を建てたとされる。村山浅間神社は、正嘉3年(1259)の墨書を胎内銘に持つ胎藏界大日如来坐像や、文明10年(1478)の墨書のある金剛界大日如来坐像を蔵している。また、富士修験の成立に深く関わっている末代上人と同一人物と考えられる、「末代聖人」の名があり、承久年間(1219-1222)に埋納された可能性のある富士山頂の三島ヶ嶽經塚(図1-36)や、浅間大社が蔵する絹本著色富士曼荼羅図(狩野元信(1476-1559)筆 国指定重要文化財)中世における村山修験のありかたを窺い知ることができる。

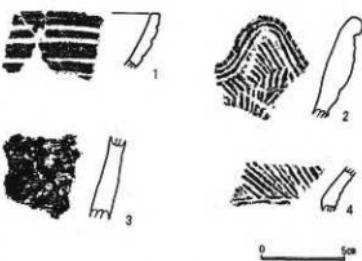


図3 村山浅間神社遺跡の縄文土器

第Ⅱ章 調査の経過と総論

1. 調査の経緯

村山浅間神社は、浅間大社（富士宮市宮町1番1号に所在）と共に、富士山信仰の拠点の一つとして考えられてきた（富士宮市1971『富士宮市史』他）。考古学的調査による富士山信仰に関わる遺跡の調査は、浅間大社境内の調査を行なった浅間大社遺跡（富士宮市教育委員会1996、2002）や、境内の東に隣接し、富士浅間宮の大官司館跡と考えられる大宮城跡の調査（富士宮市教育委員会2000）があり、近年調査事例は増加しているが、富士修験の中核を担ったと考えられる「富士山興法寺」の有力な推定地である村山浅間神社遺跡については、市街地から離れて開発の手が及ぶことのなかったこともあり、考古学的調査は行われたことがなかった。

近年、村山地区の南端を走る富士山南麓道路（国道469号）の改良工事が行なわれて、交通の利便化が図られている。そのため、村山浅間神社を観光資源にとの地元の動きを受けて、富士宮市教育委員会では、村山浅間神社に伝わる仏像や絵画、中世文書、『大鏡坊文書』等の文書から窺い知ることのできる文化的価値の重要性を鑑みて、平成13年度より、村山浅間神社を含む富士山登山道の保存活用を検討するため、村山浅間神社学術調査事業として文化的視点から調査を実施した。平成14年度には、地元の方々と、有識者からなる村山浅間神社調査会を発足させ、文書や仏像、建築物、自然環境などの調査を行っており（村山浅間神社調査会2005）、それに合わせて考古学的調査を実施した。平成13年度を合わせると、平成14年度、平成15年度までの、3次の調査を実施したことになる。

平成13年度・14年度調査については、概報的に調査報告書を刊行しているため（富士宮市教育委員会2002）、本報告書では、平成15年度調査の成果を中心にまとめている（富士宮市教育委員会2002）が、平成15年度調査はこれまでの発掘調査の総括的な調査となったため、それまでの調査成果も含んだ報告になっている。発掘調査期間は、以下のとおりである。

第1次調査 村山浅間神社遺跡基礎範囲確認調査 平成13年7月3日～8月17日

第2次調査 村山浅間神社遺跡範囲確認調査 平成14年6月10日～10月4日

第3次調査 村山浅間神社遺跡範囲確認調査 平成15年6月9日～10月8日

なお、第1次調査終了後、平成14年3月に、村山浅間神社氏子で、高根總鎮守社の建替え工事の連絡を受け、緊急に礎石跡などの調査を行い、本報告書にその結果を報告している（VII区）。

（佐野）

2. 調査の経過

第3次村山浅間神社遺跡の発掘調査は平成13年度と平成14年度に実施した遺跡範囲確認調査の結果を基に調査区を選定し調査を行った。調査区は平成13年度の調査で礎石跡が確認された平坦面をI区、平成14年度の試掘調査で中・近世の遺物が出土した平坦面をII区、平安時代中頃（9世紀

後半～10紀前半）の遺物が出土した平坦面をⅢ区とした。各調査区の調査範囲は遺構、遺物の検出状況に応じてその範囲を拡張して調査を行うこととした。

調査はⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区の順で平成15年6月9日より開始した。Ⅰ区の表土剥ぎ作業の後、精査作業を行い平成13年度の試掘調査で確認された礎石跡・石組遺構を含めた遺構の検出を行うと共に平坦面の範囲および造成面の構築状態の確認に主眼をおいて調査を行った。6月18日には遺跡全域に10m四方のグリッドを設定し基準の杭打ちを行った。精査作業がすすむにしたがい写経石・陶磁器・錢貨・和釘等の遺物が出土し、これ等の遺物はトータルステーションシステムを用いて遺物の取り上げを行った。遺構精査の後、検出された各遺構は順次記録作業を行い7月17日にはⅠ区の地形測量を行った。

またⅠ区の調査と併行して7月25よりⅡ区の調査も開始した。Ⅱ区では調査区内に植林されている杉の関係で調査区をⅡA区、ⅡB区の二つに分けて調査を行った。いずれも笹が繁っていたためまず笹を刈り取った後表土剥ぎ作業を行った。作業はⅠ区同様遺構確認面まで掘り下げて遺構の検出および遺物の取り上げを行った。ⅡA区では精査の結果、調査区の北側部分では斜面を削り取り平坦面を構築した跡が検出され、南側部分ではその削り取った土砂を盛土した造成面が検出されたが礎石跡等の遺構は検出されず、また調査区西側部分は道路により削平をうけており平坦面の東西方への規模は不明である。ⅡB区はⅡA区の東側に位置しⅡA区と同様に平坦面が構築されており、調査区北側の斜面の一部を東西・南北方向に削り取り方形の平坦面を構築した跡が検出され、南側部分は盛土して造成された平坦面が検出された。同区でも写経石・陶磁器・錢貨・鉄製品等の遺物が出土しており、ⅡA区では遺物の出土が調査区の西側にまとまっていることから平坦面の中心部は道路により削平された部分であったと考えられる。

Ⅲ区はⅠ区の北側に位置し、8月28日より調査を開始した。表土剥ぎの後精査作業を行い調査区中央付近にて住居跡が1基(SB1)、調査区北側で北東から西南方向に延びる溝状遺構(SD1)と調査区東側で北西から東南方向に延びる溝状遺構(SD2)が検出された。検出された2条の溝状遺構はいずれも調査区の外へ延びていることから当初の調査区の西側部分と東側部分を拡張して溝状遺構の全容を検出した。SD1、SD2、SB1の順で遺構の掘り下げを行い掘り下げの終了した遺構から順次記録作業を行った。またⅢ区にて住居跡、溝状遺構が検出されたことからⅢ区東側に所在する平坦面に2本のトレチを設定して掘り下げ遺構、遺物の確認作業を行い9月30日にはⅡA区、ⅡB区、Ⅲ区の地形測量、遺構、遺物の入力作業を行った。10月2日より調査の終了したⅡA区、ⅡB区の埋め戻し作業を開始し、10月8日よりⅠ区、10月23日よりⅢ区の順で埋め戻し作業を開始した。調査区の埋め戻しに際しては造成面上に砂を入れ遺構を保護した後土による埋め戻しを行い10月27日すべての調査を終了した。

(武田)

3. 調査区の設定(図4)

村山浅間神社蔵の『大鏡坊文書』には、数々の文書が所収されている。中には、「富士山興法寺」の具体的な景観が窺い知ることのできる絵図も含まれている。主として近世の絵図だが、中には、中世の様子も含まれる資料もある。それらには、概して、村山浅間神社境内には、西から東へ、「浅

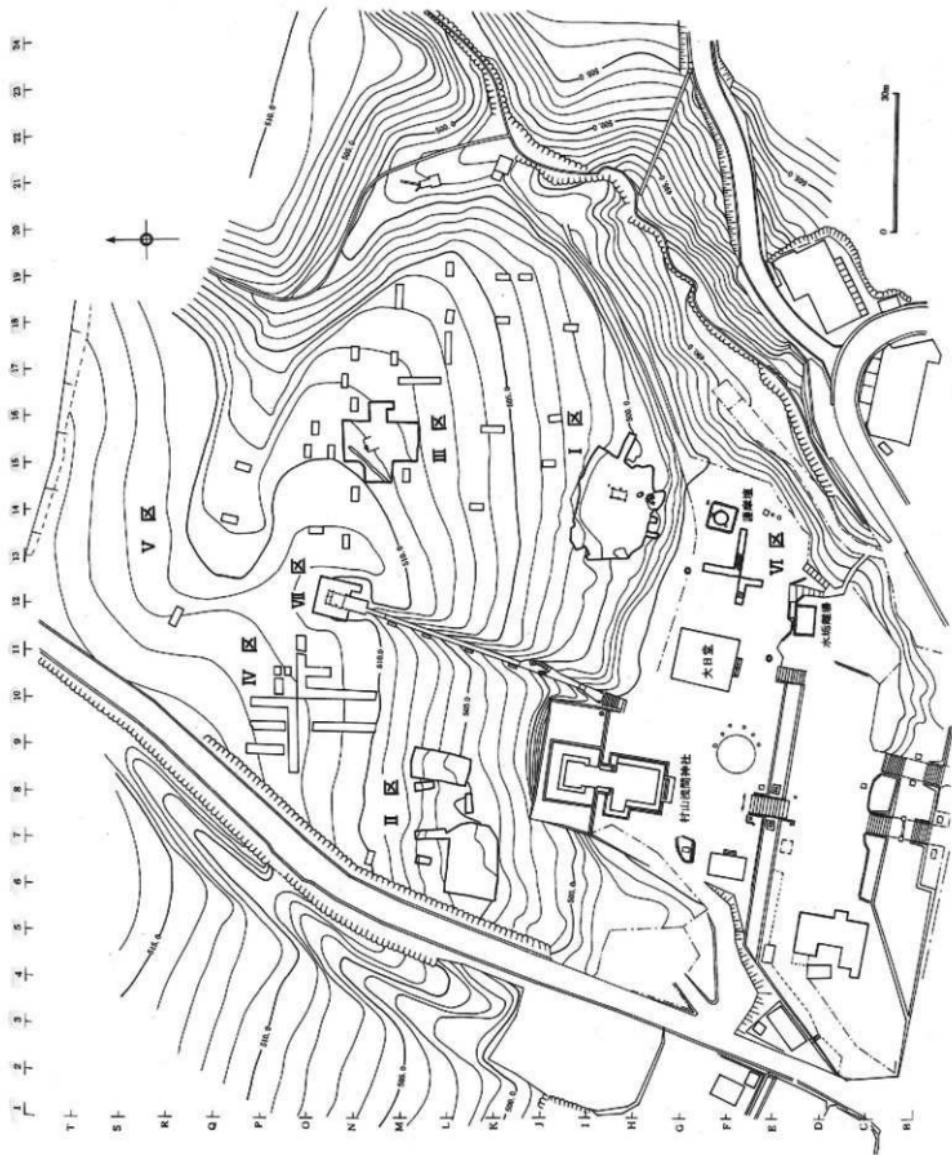


図 4 調査区位置図

間社」、「大日堂」、「大棟梁権現」の建物が並べて描かれている。また、各所には小祠や石段かと考えられるものが描かれたり、浅間社の上には、「行者堂」、「東照大権現」などの堂社、また、大棟梁権現の下には、「堀離場」が描かれている。現在、境内には、村山浅間神社社殿、大日堂、護摩壇、高根總鎮守社殿、堀離場がある。絵図に描かれているが、現在推定ができないもの、逆に描かれていないが、現在みられるものがあり、時代による変遷の様子が窺い知れる。また、護摩壇の東には、宝曆二年（1752）に写経石を埋納した旨が記された宝篋印塔が建てられていたり、境内の南に築かれた石垣には、天保三年（1832）や、大正二年（1913）などの具体的な年号を刻んだ部分がみられたりするなど、変遷の手がかりとなり得る箇所もある。

境内には、小規模ながら平坦面がいくつか確認されたため、絵図等に描かれた様な様々な施設が周辺に点在していた可能性を考え、それら平坦面を中心に、境内の各所に調査区を設定し、発掘調査を行った。調査区はⅠ～Ⅶ区である。

第1次調査は、富士宮市教育委員会で行い、調査区も任意で設定した。調査地点は、現在の大日堂の東側である、Ⅰ区とⅣ区の平坦面である（調査時は、それぞれ「上段」「下段」としていた）。事前踏査の際に、上下2面の平坦面を確認したため、その2ヶ所に1.5m幅のトレーナーを任意に十字方向に設定し、遺構・遺物の状態を確認した。

平成14年度の第2次調査、続く平成15年度の3次調査からは、緊急雇用対策事業として株式会社東日に委託して行った。境内地に対して国土座標第VII系を基準とする10mグリッドを設定し、第2次調査は、遺跡範囲確認のために境内地の5ヶ所にトレーナー調査を行った。高根總鎮守東側平坦地（Ⅲ区）では、遺構は確認されなかったものの、平安時代の土師器、綠釉陶器、灰釉陶器を得た。第3次調査では、第2次調査と同じグリッドを使用し、それまでの調査区をまとめて、第1次調査で礎石建物跡ほかが確認されたⅠ区、村山浅間神社北側の平坦面をⅡ区、平安時代遺物が出土した丘陵部平坦面をⅢ区として、発掘調査を行った。本報告書では、第3次調査の調査区名を使用して、高根總鎮守西側の平坦面をⅣ区、その北側の谷部をⅤ区、第1次調査で下段とした護摩壇脇の平坦面をⅥ区、高根總鎮守跡調査区をⅦ区として、報告している。

4. 層序

村山浅間神社遺跡は、新富士火山の旧期溶岩流である元村山溶岩流の末端にあたる。富士山南西麓では、通常、表土下に富士山の降下火山灰層である大沢ラビリ層、その下に黒褐色土層（通称黒ボク）、栗色土層、極暗褐色土層（富士黒土層）、橙色土層（ローム層）の堆積が見られ、それぞれ、弥生時代以降の遺構確認面、縄文時代後期～晩期の包含層、縄文時代前期～中期、縄文時代草創期～早期、旧石器時代の包含層として、標準土層としている。今回の調査では全城において、火山灰層である黄褐色土層が、凡そ100cmの厚さで確認されたが、この黄褐色土層を地山として、平坦面や遺構は確認された。今回の調査は、学術調査のための調査であり、遺跡保護の観点からより下部の調査は行っていない。また、大沢ラビリ層、黒ボク、栗色土層等の相当層も明確に判別できなかったが、これは、調査区が丘陵部にあたるため、土の流出入が著しかったためかと考えられる。各調査区の土層堆積状況の観察は、各調査区の壁面にて行なった。色調は、『新版 標準土色帖（農林水産省農林水産技術会事務局）』を用いている。

第三章 発掘調査

1. 遺構

(1) I区(図5~16 図版1~3)

平成13年度調査(第1次調査)の事前踏査の際、平坦面が確認された場所である。境内の東端で、現在、村山浅間神社社殿、大日堂、護摩壇が並立する平坦面よりも上段の平坦面にあたる。この平坦面は、下段の平坦面とあわせて、末代上人を祀る「大棟梁権現社」社殿が描かれている箇所にあたると考えられた。調査前には、建物などの施設は何もなかった。下段平坦面には、現在護摩壇が構築されているが、いつ構築されたかについては不明となっている。

I区は、北東方向にある水源地(竜頭池)から流れる水に侵食されて谷が刻まれており、東縁辺は急峻な崖地となっている。現在の水量は、谷底に水流が認められる程度になっている。

I区平坦面の標高は、499.0~499.7m付近であり、東西約17m×南北約17mの面積約289m²の範囲に、礎石建物跡1基、集石土坑2基、集石1基を検出している(図5・6)。VI区の標高は、495.0~494.0m付近であり、I区とVI区の比高差は4~5mであることになる。

第1次調査のトレンチ調査では、地山を削平して構築された平坦面に、礎石建物跡の礎石跡が調査区外に及ぶ北東隅のもの1本分を除き、5柱分確認されていた。また、集石土坑2の一部も検出されていた。第3次調査では、第1次調査の調査箇所を含む平坦面上の遺構と、地山削平面を検出するため、全面発掘を行なった。すべての遺構は、表土除去後に検出され、遺物は、盛土中での出土以外は、すべて表土中からの出土と考えざるを得ない。

a. 造成面(図7・14)

平坦面は、自然地形を削平してつくられていると考えられる。北側の斜面をコの字形に斜めに削り、南側に盛土をして構築しており、平坦面中央付近、標高499.2m付近が地山層と盛土層との境である(図7-14)。削平部分の比高差は、前平面西側で最大1.8mあり、削平面東側は、自然地形の傾斜に沿って削平面は終結している。削平面での土層の観察では、固くしまった黄褐色ローム質土の厚い堆積の下に褐色土の堆積が観察された。

盛土層は、地表面の風化と流水により土質の違いから平面的にもある程度観察可能であったため、下部構造確認のためのトレンチ(Tr1、Tr2)を設定し、盛土層の堆積状況を調査した。また、調査区中央西端付近で現代のゴミ穴を利用して、その周辺の盛土層を掘り下げ断面観察したところ、盛土層は、調査区外にも広がると考えられた。

削平面と平坦面の境は、あまり明瞭ではなく、また、平坦面の比高差は、削平面と平坦面の境から南端まで約70cmほどある。地山層がある程度固くしまった土質であるため、地山部分に関しては、流失によるものの影響もあるが、雨水の排水のために、当初から傾斜を有していた可能性もある。調査区南端では、傾斜が急となるが、ある程度盛土層が崩落していると考えられる。

平坦面南端では、土留め施設などは確認されなかった。後世の削平によるものか、自然の土の流出によるものか、当初から構築されていなかったのかは調査範囲では不明である。

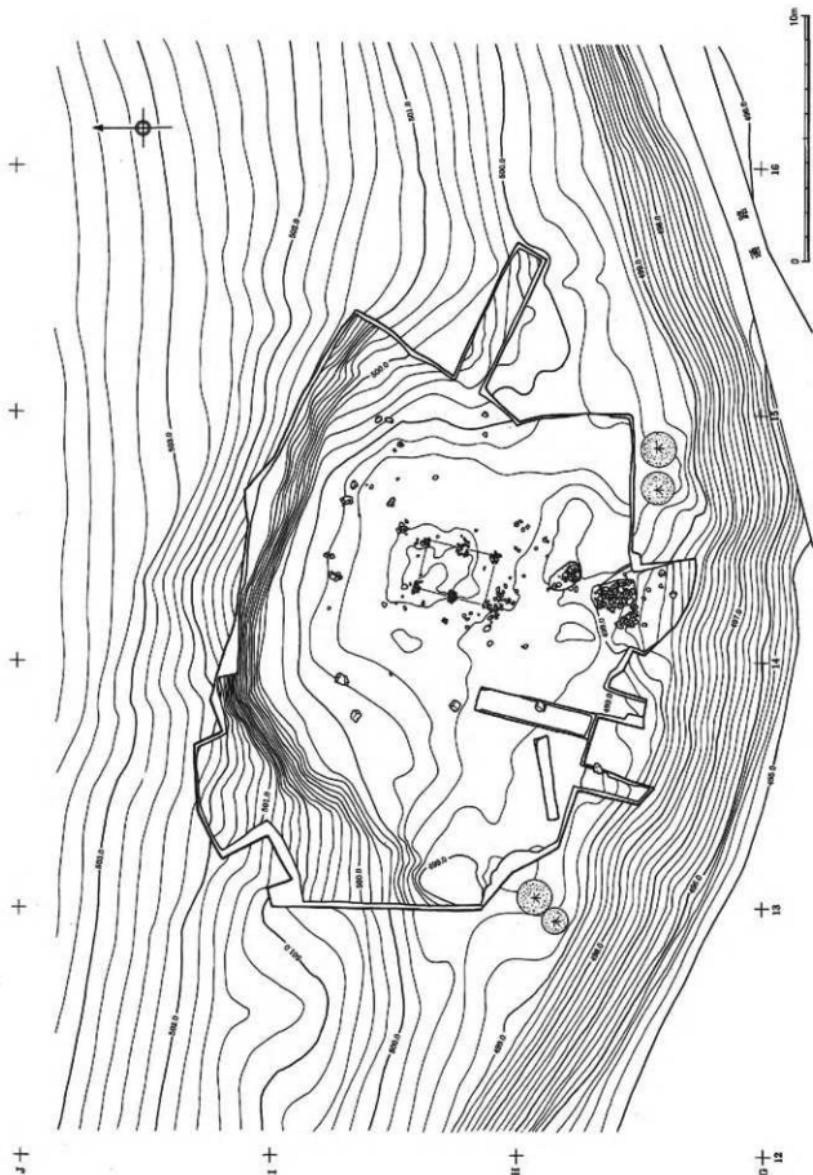


図 5 I 区周辺地形図

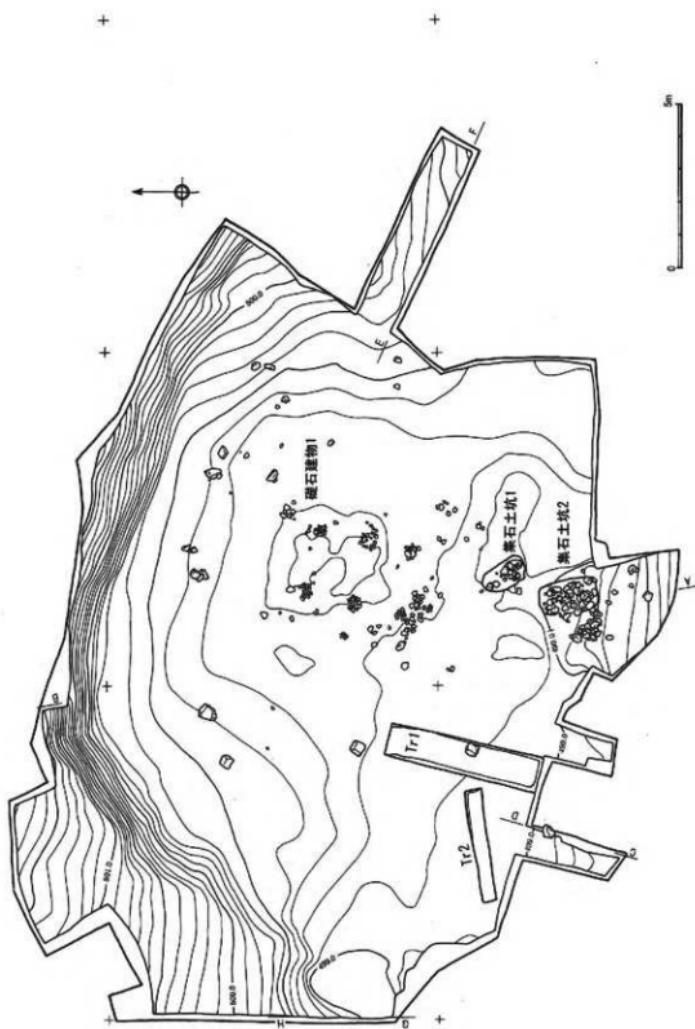


図 6 I 区遺構分布図

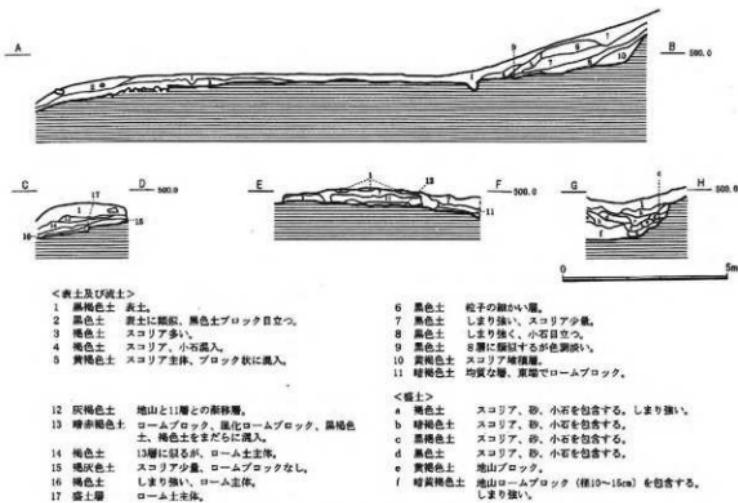


図 7 I区断面図

村山浅間神社社殿、大日堂、護摩壇と並ぶ下段平坦面との比高差は約5mあるが、この斜面は、自然の土の流失に加え、戦中の貯蔵穴などに利用されて土が掻き出されており、地形の改変が認められる。Tr 1内では、ほぼ水平に削平された地山層の上に、盛土層が、1.08mの厚さで堆積しており、この盛土層はトレンチ外にも及ぶと考えられるので、斜面地もまた、一部地山を削平して構築されている可能性がある。

b. 磐石建物1 (図8、9、図版1)

調査区中央付近のH14グリッドの南西部にて磐石建物1基と、磐石建物1(S1~S6)の北東方向約1mの地点に、集石1基(S7)が検出された。これらは、遺構保存のため、下部構造の調査は行っていない。

磐石建物1は、地山の直上に構築されている。主軸方向はN-15°-Eを指向し、その面積は3.081 m²をなす。各磐石跡の間隔は、磐石跡の心々で、南北方向のS1~S3が2.99m、S4~S6が2.90m、S1-S2間が1.58m、S2-S3間が1.41m、S4-S5間が1.58m、S5-S6間が1.32m、東西方向でS1-S4・S2-S5・S3-S6間が1.95mである。前面南側1間が北側1間より20cm程度短かい。これを、1尺=0.303mとして計算すると、S1-S2が約5.22尺、S2-S3が4.65尺、S4-S5が5.22尺、S5-S6が4.36尺となる。梁ゆきは、6.44尺と計算される。

磐石はすぐではなく、根石として拳大10~15cmの溶岩礫を10~30個程度と、10~20cm四方の扁平な礫を部材としている。S1は、長軸56cm×短軸34cmの範囲に、拳大の礫を比較的密に敷き並べられている。残存状態は良い。S2は、長軸54cm×短軸38cmの範囲に、拳大の礫を比較的

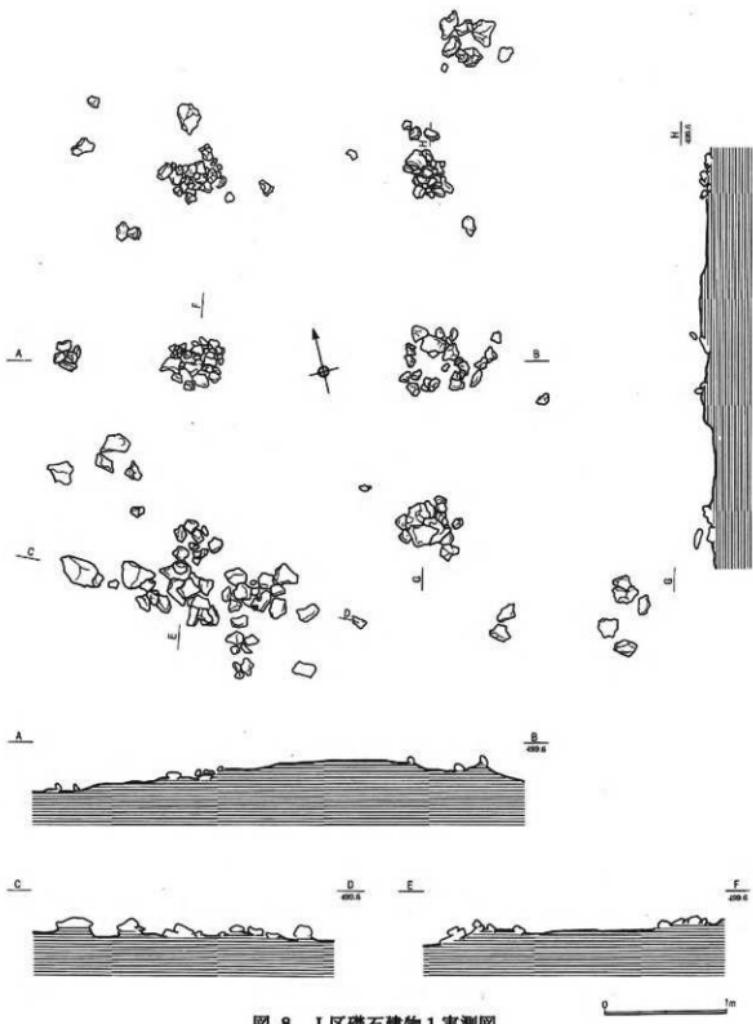


図 8 I 区礎石建物 1 実測図

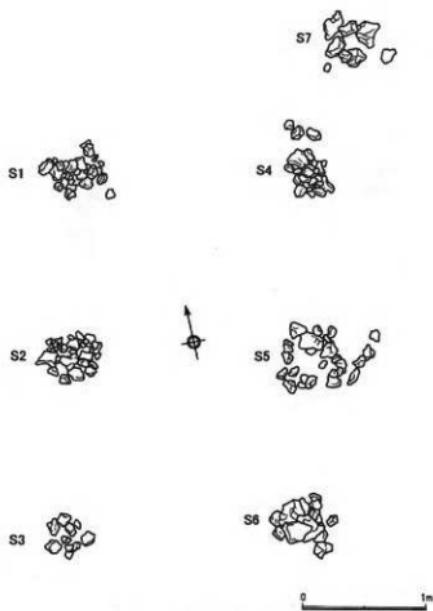


図 9 I 区 碓石建物 1 平面図

に確認された。第1次調査時には検出されなかったが、第3次調査の礎石建物 1 精査時に検出された。長軸 45cm × 短軸 38cm に範囲に、20~40cm 四方の扁平な礎を 6 枚敷き並べられている様子が確認された。規模的には S 1 ~ S 6 と大差はない。平面調査のみで終了したため、その下部の拳大の石の有無は不明である。

(佐野)

c. 集石土坑 1 (図 10、図版 2)

調査区南側の G14 グリッドにて検出された。盛土中に構築されている。平面形態はほぼ橿円形を呈し、主軸方向は N・36°・W を指向しその規模は長軸 83 cm、短軸 58 cm を測る。造構は大小の角礎を組み合わせて構築されており集石の南側は礎の一部が抜き取られている。集石下部は土坑状の掘り込みがみられる。掘り込みの覆土内には礎は含まれていない。掘り込みの平面形態は不整長楕円形を呈し長軸 136 cm、短軸 78 cm、深さ 32 cm を測り、その覆土は黒色土の 1 層である。土のしまり、粘性は共にやや強く層中に粒径 1~2 mm の赤褐色スコリア粒・粒径 2~3 mm の小石・砂を含む。

遺物の出土はみられず、性格、時期ともに不明である。

d. 集石土坑 2 (図 11・12、図版 3)

調査区南側の G14 グリッドにて検出された。盛土層を掘り込んで構築されている。土坑の平面

密に敷き並べられている。やや扁平な礎は、ややか浮いた状態で積み重ねられている。S 3 は、礎石建物 1 南面に検出された石列に接して検出されている。この石列は、主に扁平な礎で構成されている。浮いた状態で検出され、現位置はとどめていない。この石列と同じく S 3 の残存状態はあまり良くなく、拳大の石 10 個程度が残存しているのみで、検出時すでに礎はぐらぐらと崩れかかっていた。S 4 は、長軸 44cm × 短軸 29cm の範囲に拳大の礎が敷き並べられており、扁平な礎がその上に積み重ねられた状態で検出された。S 5 は、長軸 57cm × 短軸 54cm の範囲であるが、中心部分には石は検出されず、周囲に広がっている状態であった。崩れかかっていると考えられる。

S 6 は、比較的の残存状況がよく、長軸 50cm × 短軸 40cm の範囲に、拳大の礎を根石として敷き並べ、扁平な礎をその上部に積み重ねている。S 7 は、礎石建物 1 (S 1 ~ S 6) の北東隅から約 80 cm 程離れた位置

に確認された。第1次調査時には検出されなかったが、第3次調査の礎石建物 1 精査時に検出された。長軸 45cm × 短軸 38cm に範囲に、20~40cm 四方の扁平な礎を 6 枚敷き並べられている様子が確認された。規模的には S 1 ~ S 6 と大差はない。平面調査のみで終了したため、その下部の拳大の石の有無は不明である。

(佐野)

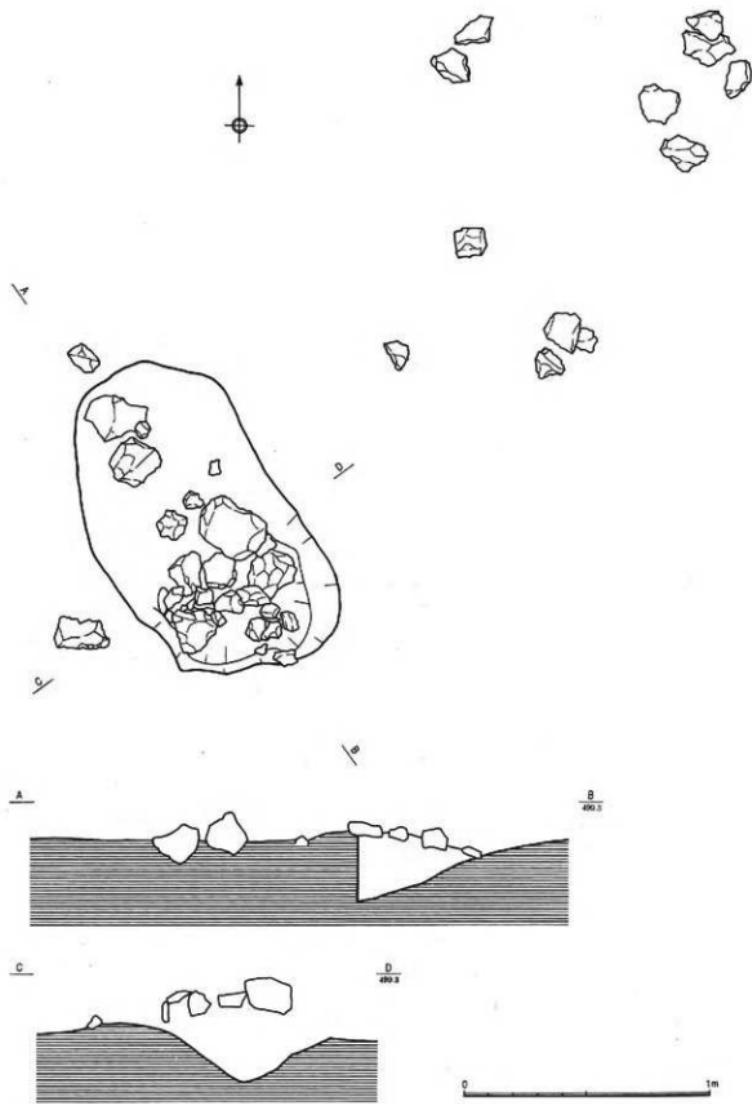


図 10 I 区集石土坑 1 実測図

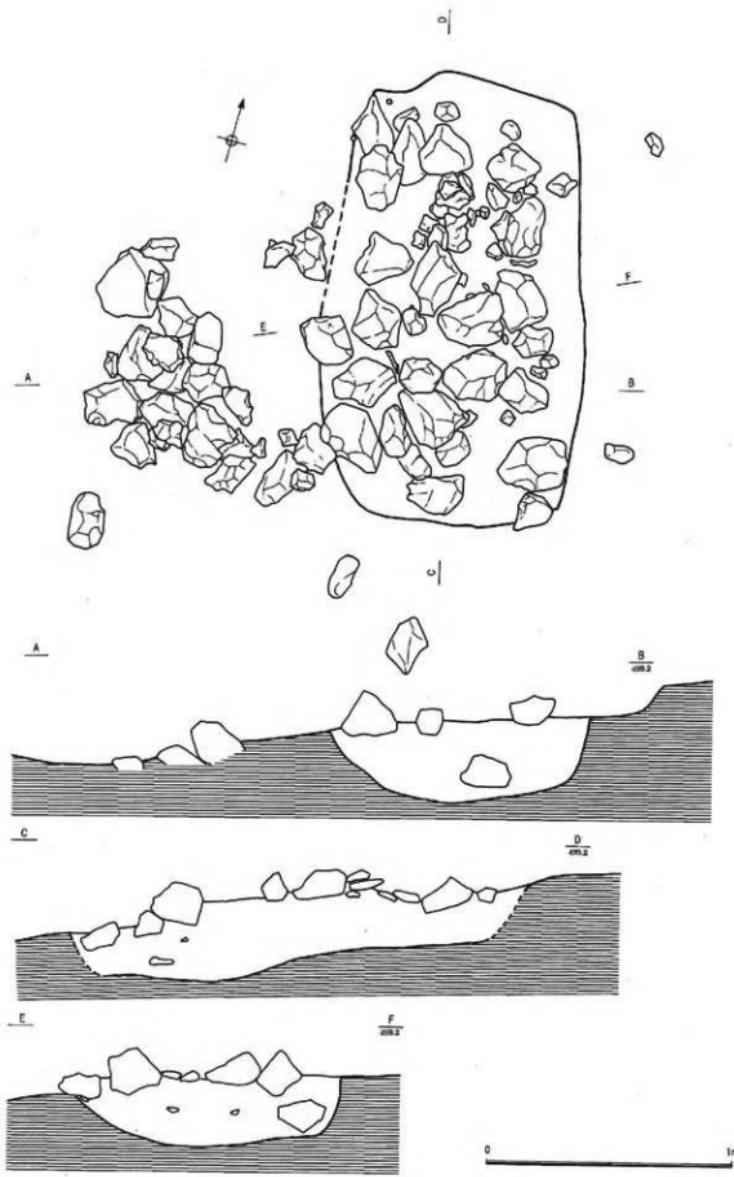


図 11 I 区集石土坑 2 実測図 1

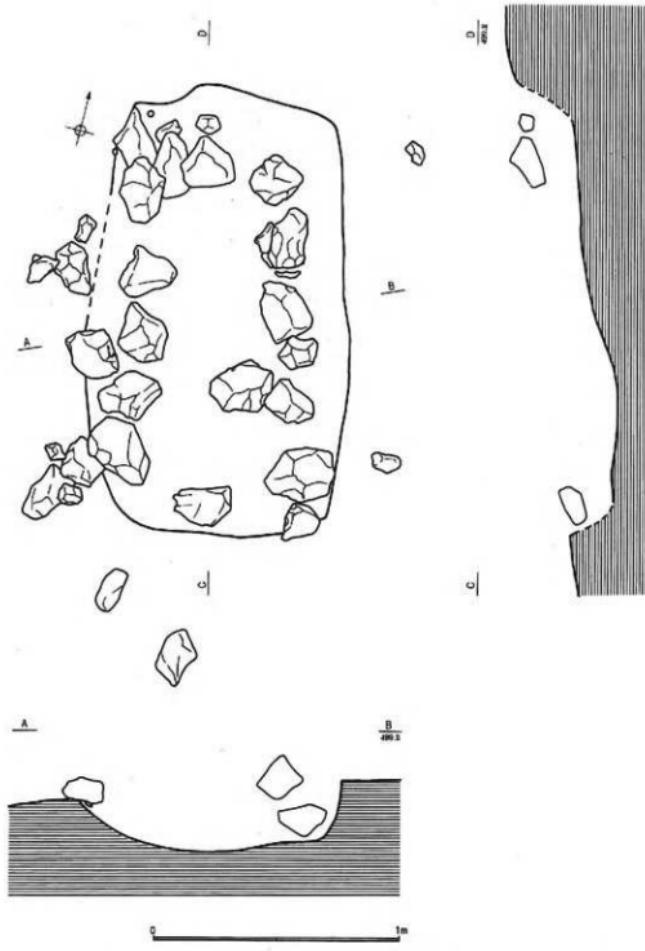


図 12 I 区集石土坑 2 実測図 2

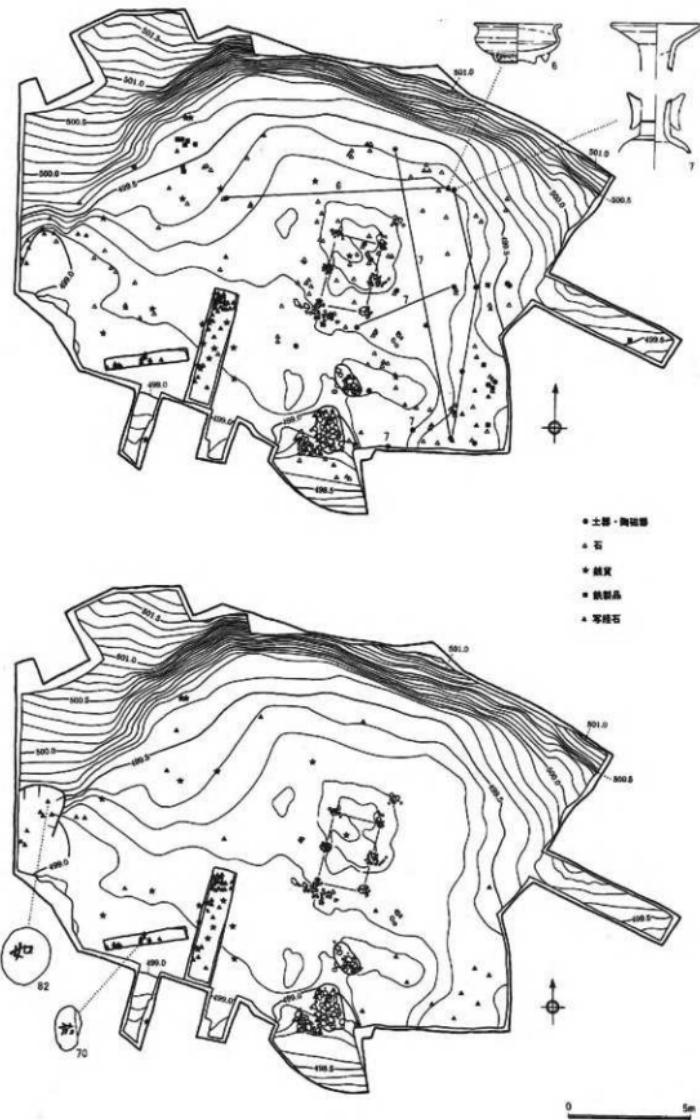


図 13 I 区遺物分布図

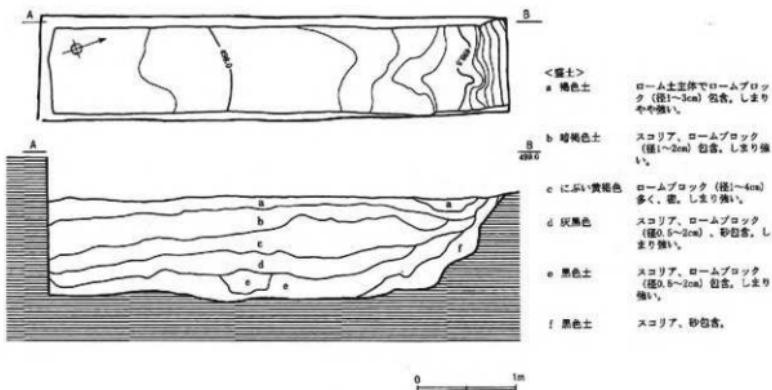


図 14 I 区 T r 1 実測図

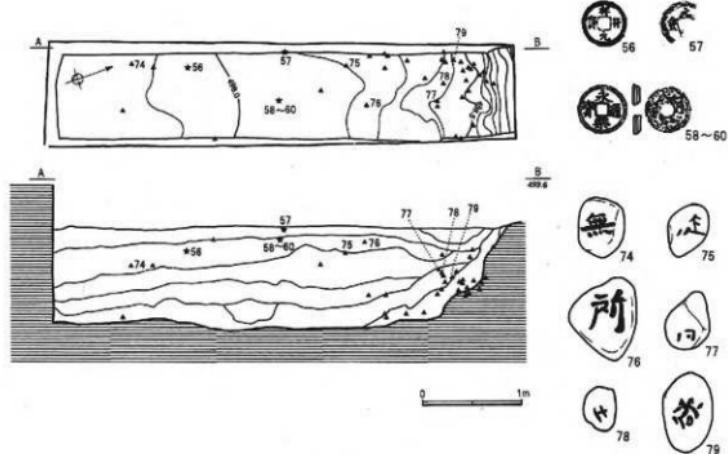


図 15 I 区 T r 1 遺物分布図

形態は南北方向を長軸とする不整な隅丸長方形を呈し遺構の西側の一部は木根により崩れている。土坑の上部には上場線に沿って大形の角礫が置かれておりその中に小形の礫が点在している。また南側部分では礫の抜き取られている箇所もみとめられる。これらの礫は土坑上部にのみ存在しており土坑覆土中では土坑底部東壁付近にて大形の礫がみとめられる。

規模は上場で長軸が 1.83 cm、短軸が 1.09 cm、深さ 27.5 cm を測りその主軸方向は N-14° - W を指向する。その覆土は黒褐色土の 1 層で、土のしまりはやや強く粘性は強い。層中に粒径 2~3 mm の小石、砂をやや多く含む。

土坑の短軸方向の断面は平底を呈し、土坑東壁は急峻に立ち上るが西壁は緩やかに立ち上る。また土坑の北・南壁部分は遺構の現況保存の為に掘り下げを行わなかったことから確認することが出来なかつた。また土坑の長軸方向の底面は北から中央付近にかけて平場があり、中央付近で一段下がつて中央から南側にかけ平場がみとめられる。

出土遺物は写経石が土坑の北側の礫付近から出土しているが、盛土の影響を受けている可能性もあり、時期、性格ともに不明である。(武田)

e. 遺物分布状況（図 13~15）

遺物は、陶磁器類、建築部材と考えられる釘、錢貨、写経石が出土している（図 41~45）。陶磁器類は、肥前系の青磁花瓶（図 41-7）、香炉（同図-6）といった仏教具から、灯明皿（同図-1 ~ 4）、徳利（同図5）、表探資料であるが、かわらけ（同図-9, 10）が出土している。これらの遺物は、すべて表土中出土のものであり、17世紀後半～明治時代までの幅を持つものである。

盛土中からは、陶磁器類や建築部材は全く出土せず、錢貨と写経石のみ出土した（図 14、15）。盛土は、黄褐色ローム土のブロックと黒色土となる荒い土で、水平に各層は、ロームブロックの含有率の多少以外目立った差異はなく、同時期に構築されたと考えられる。Tr 1 から出土したのは、錢貨 3 点（6 枚）、写経石 85 点であり、上層に錢貨、下層に写経石が多い傾向がある。Tr 2 は、第 1 次調査時のトレチであるが、Tr 2 では、同じく盛土層が厚さ約 1 m で確認され、地山直上に写経石 17 点を出土している（富士宮市教育委員会 2002）。各トレチ内での遺物分布状況は、1 箇所にまとまつた分布状況ではなく、ばら撒かれたように点在している。また、Tr 1 出土の錢貨は、祥符元寶（初鋤 1008 年）、永楽通寶（同 1408 年）、元祐通寶（同 1086 年）、紹聖通寶（同 1094 年）であり、すべて渡来錢のみである。遺構確認面上では寛永通寶が出土しており、盛土と遺構面の間に、ある程度の時期差の想定が可能かと考えられる。

f. 遺構分布状況（図 16）

礎石建物 1、集石土坑 1・2 は、それぞれ主軸を異なる。また、礎石建物 1 は、地山の上に構築されているが、集石土坑 1・2 共に、盛土を掘り込んで構築されているといった違いがある。また、厳密には、礎石建物 1 と、北側斜面の削平面との主軸も一致しない。しかし、両削平ラインの延長線上、平坦面の開放部分の隅には、現在樹齢数百年と考えられているスギがある。同じ東よりに傾いた南北方向に主軸を持つ点で、礎石建物 1 及び、削平面の主軸方向と、両端のスギとに関連性を持たせることも可能かと考えられる。下段にむかって開放した礎石建物 1 の南面には、何らか

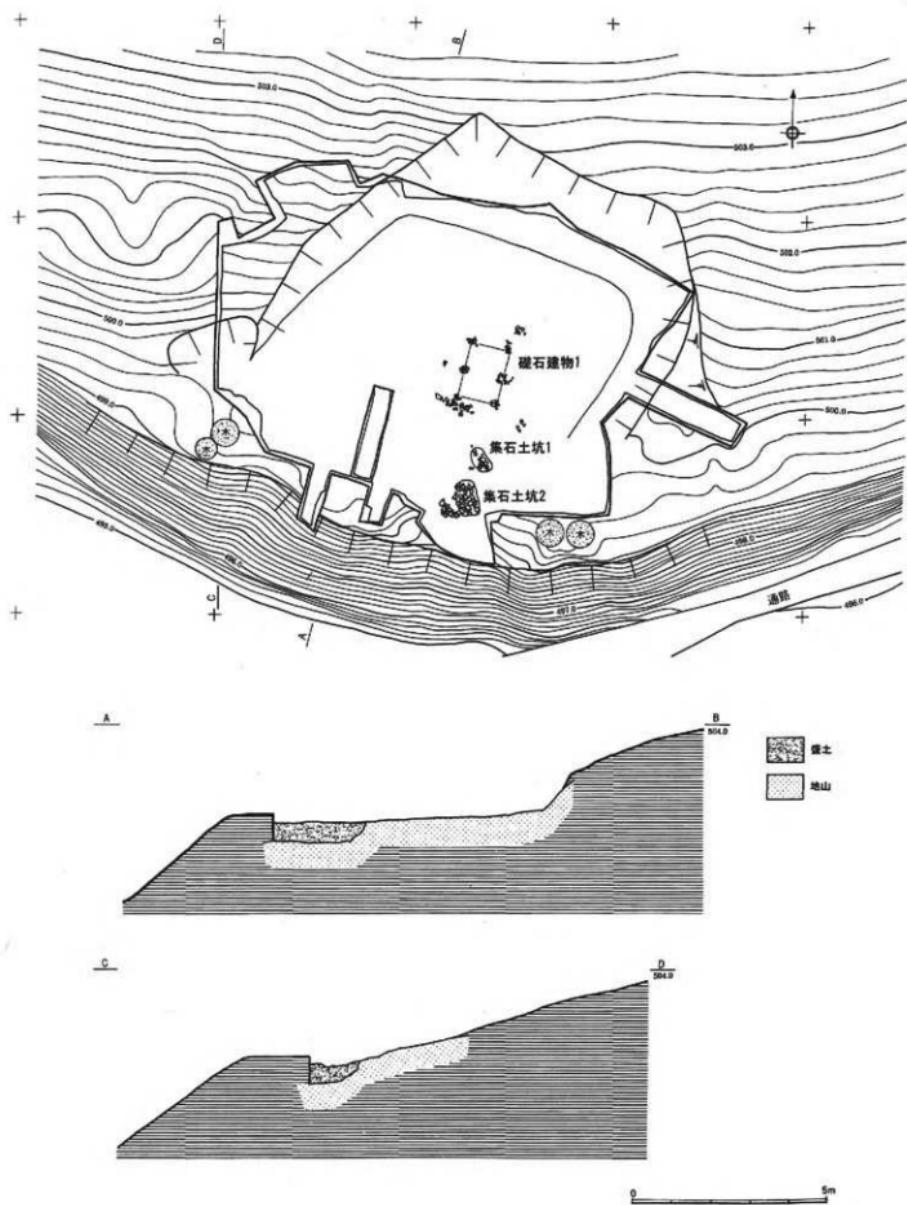


図 16 I 区造成概念図

の意味があり、I 区と VI 区とが絵図に描かれた「大棟梁権現」社の本殿と拝殿との関連を想定できる。

g. 年代観

それぞれの遺構に明確に関連する遺物の出土は無い為、礎石建物 I 、集石土坑 I 、 2 は、表土中の遺物の年代観で 17 世紀後半～明治時代の年代が与えられる。しかし、 I 区の造成自体は、盛土中の銭貨に寛永通宝を含まない点からすると、17 世紀初頭以前の年代が考えられる。永楽通寶（初鑄 1408 年）からすると、15 世紀後半には、造成が行なわれた可能性がある。

（2） II 区（図 17~29 、図版 4 ~ 8 ）

村山浅間神社社殿北側（山側）の平坦面である。南端は、村山浅間神社社殿建設時に削平されたと考えられ、社殿構築面からの比高差が約 10m ある。西側は、戦後掘削された富士山登山道によつて失われている。調査区全体に杉が植林されているため、調査区は杉を避けて設定した。

第 2 次調査では、丘陵頂部にあたる高根總鎮守西側の平坦面との関連を調査するため、トレーニング調査を行っている（IV 区）。 IV 区では、表土直下に黄褐色ローム土の地山を確認し、明確な遺構は確認されなかったのに対し、下段にあたる II 区では地山の削平面と平坦面整地層、土壘状の盛土層及び、これに覆われる溝跡が確認された（Tr 1 ）。そのため、各遺構の時期差が想定された。また、年代についても、この Tr 1 の土壘状の盛土層最下層、黄褐色ローム土直上では、常滑の甕（図 46-4 ）が出土したり、 IV 区では、表土中より、中世の陶器や、かわらけなどを採取したため（図 49 ）、中世の遺構の存在が考えられた。村山浅間神社社殿北側の丘陵部には第 3 次調査では、溝や造成面の確認された、 II 区の範囲を拡大して調査した。

II 区調査区の中央には、樹齢数百年と推定される大スギがあり、樹木保護のため調査区を分けた。西侧を A 地区、東側を B 地区とした。

a. A 地区造成面（図 19~21-23 、図版 4 ~ 6 ）

削平面は、地山を削り出してつくられていた。 Tr 1 内の土層状況では、削平面の立ち上がりは急峻な状況を呈しており、 I 区の削平面と同様な状況をなしている。

平坦面は、黄褐色ローム質土に類似する土及び、黒色土を使用して整地土としている。 A 地区西端の断面では、傾斜変換点あたりから下は黒色土の盛土がなされ、上では、黄褐色ローム質土に類似する土を盛土して整地している様子が観察された。また、西端断面での盛土の堆積状況からは、平坦面は調査区外にも及ぶ様子が看取され、現在村山口登山道の基点として利用される道路の掘削によって、平坦面は削平されていると考えられる。

Tr 2 では、黄褐色ローム質土の削平面の上端と下端が検出された。削平面は、標高 507.4 ~ 505.5m で、比高差 1.9m であり、 I 区の比高差 1.8m とほぼ同じ規模で削平されている。この削平面は、木根による搅乱や風化によって、表面は乱れている。 Tr 2 内の傾斜変換点から南側の平坦面では、 Tr 1 で検出された溝 1 につながる遺構は確認されなかった。 Tr 2 内で確認された平坦面は、黄褐色ローム土に類似する土を平坦に整地して構築されていた。土層は、 A 地区西端で確認された土質と同

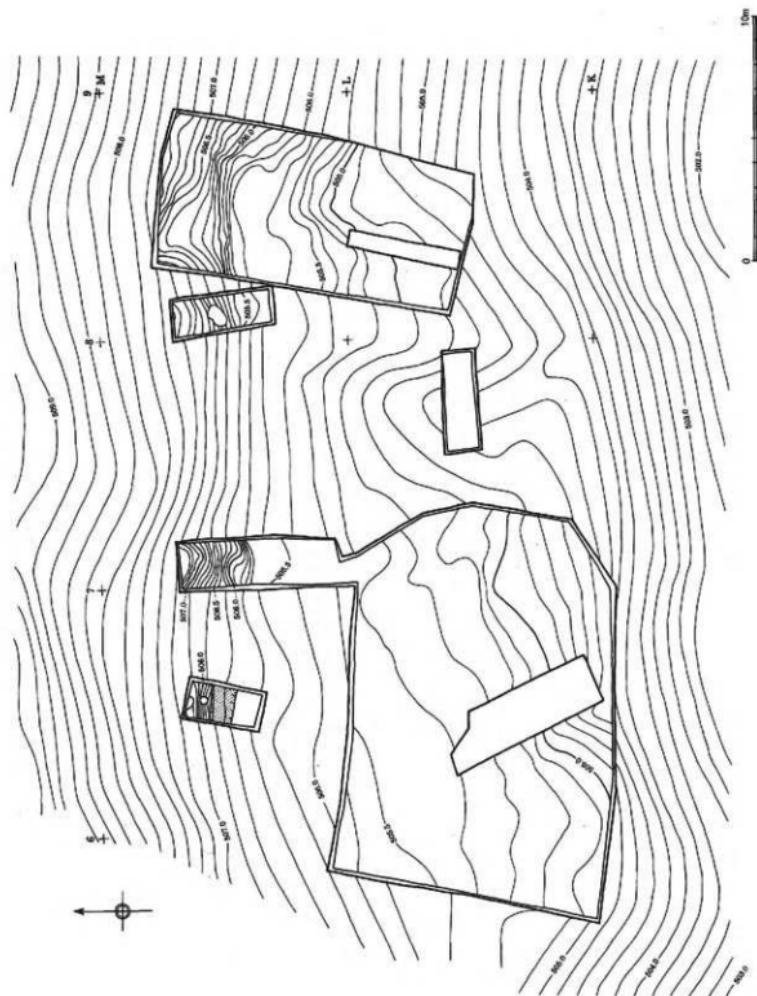


図 17 II 区周辺地形図

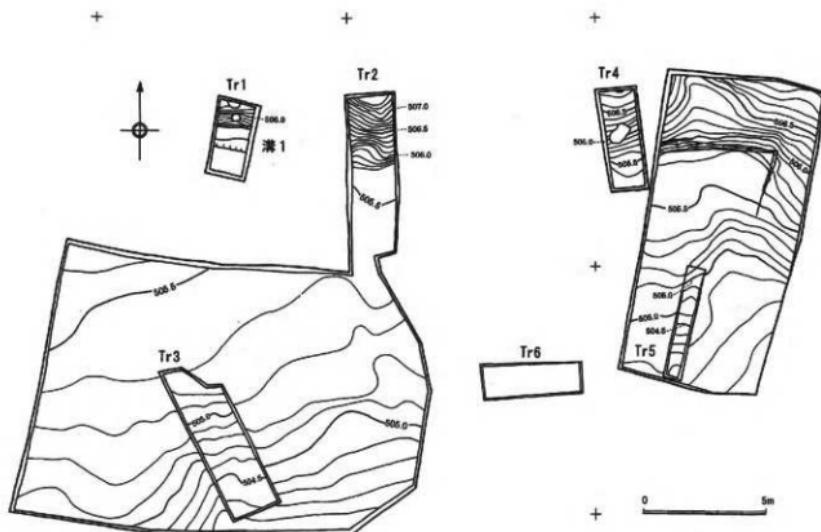


図 18 II 区遺構分布図

じであり、整地面は Tr 2 内まで広がると考えられる。

Tr 3 は、平坦面と盛土層確認のため、南東方向の傾斜に対して設定した。その結果、Tr 3 内でも、黄褐色ローム土に類似する整地層が確認され、調査区の南側から南東側にかけては整地層の一部が崩落している可能性が考えられた。そのため、平坦面は、構築当時は調査区の南側から南東部分にかけては現況の範囲よりも広かったと考えられる。また、A 地区平坦面の東端を調査するため、平坦面東側のくぼ地を調査したところ (Tr 6)、盛土などの整地層は確認されず、土の堆積は、有機質腐食土の自然堆積に伴うものと考えられた。また Tr 6 内では、土留め施設なども確認されなかつた。植林された杉林を避けて調査区を設定したため、限られた範囲の調査となり、平坦面から連続した調査区を設けることができなかつたため、平坦面の東端は未確認である。

b. 溝 1 (図 18~20、図版 5)

Tr 1 内の地山削平面傾斜変換点に沿って検出された。溝 1 は、黄褐色ローム土を掘り込んで構築されており、幅 80~94cm、深さは 20cm を測る。溝の断面形態は、ややいびつな逆台形で、北から南に向かって傾斜している。溝覆土は、褐色土および暗褐色土であり、堆積状況が上部盛土層と相違ないので、土壘状の盛土によって埋められていると考えられる。Tr 2 内では、溝 1 に対応する遺構は確認されなかつた。

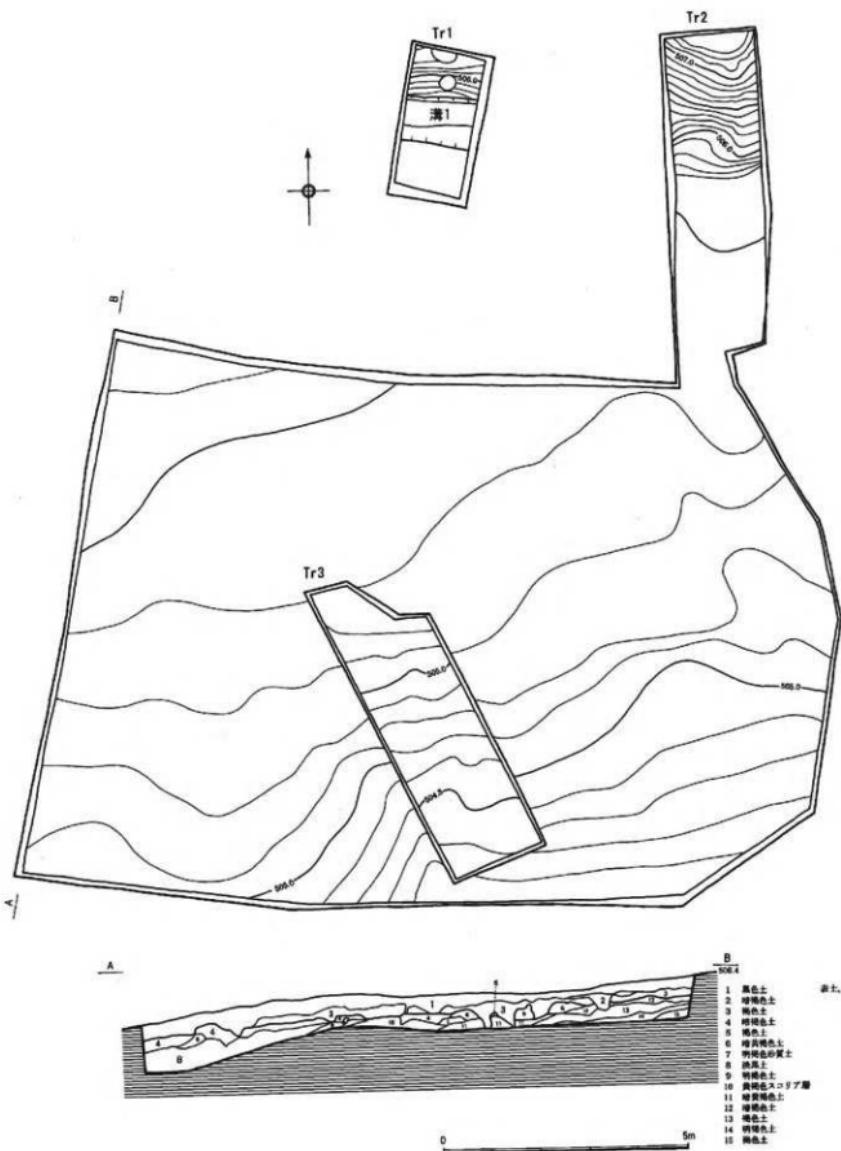


図 19 II区A地区実測図

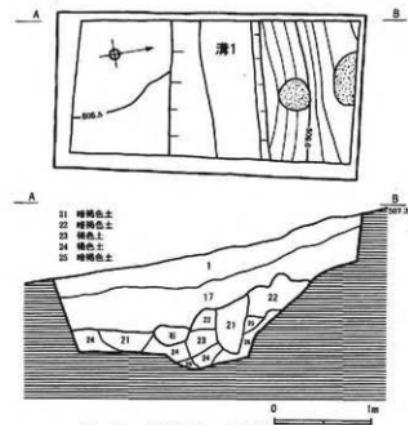


図 20 II区Tr 1実測図

c. 土壘状の盛土 (図 20、図版 5)

溝 1 を覆う形で土壘状の盛土が確認されたが、土層調査時に発見された。Tr 2 内では、検出されていない。盛土は、暗褐色土及び褐色土である。土壘状の盛土の傾斜変換点には、人頭大の石が検出されているが、第 3 次調査でも周囲に関連する遺構は検出されず、性格は不明である。

溝から南は、平坦面の整地層となる。この整地層は、調査区西端や、Tr 2 で確認された平坦面と同様と考えられた。盛土層の最下層では常滑の甕 (図 46-4) が出土しており、溝 1 構築と土壘状の盛土および平坦面の整地層には、時期差が想定できる。

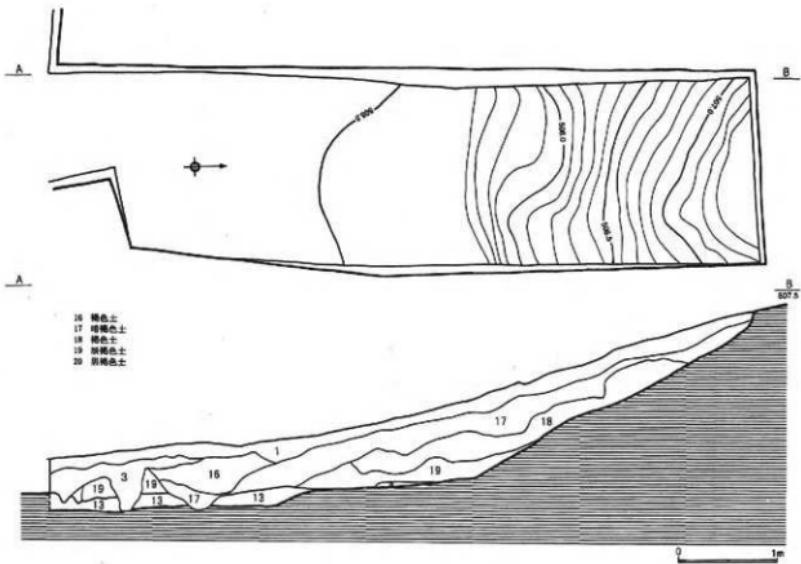


図 21 II区Tr 2実測図

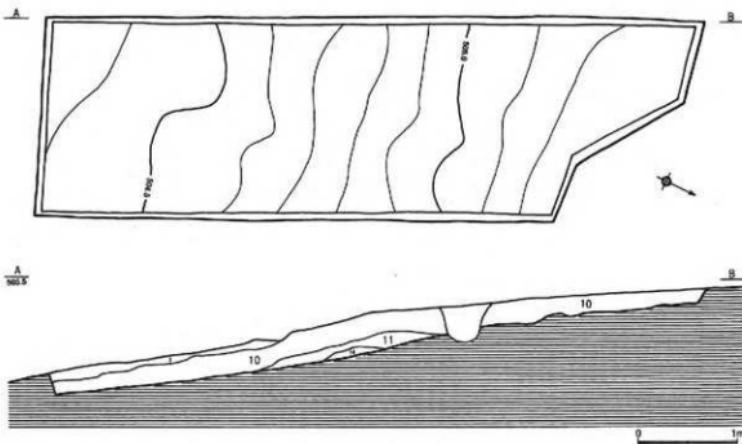


図 22 II区Tr3実測図

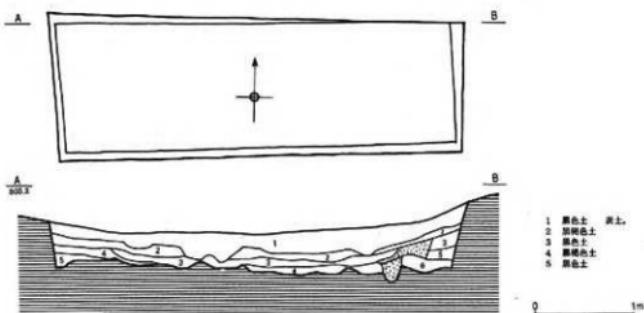


図 23 II区Tr6実測図

d. A地区遺物分布状況（図27）

本調査区においても陶器・瓦器・写経石・銭貨・かわらけ、釘等の遺物（図46）が出土している。その出土は調査区中央西側に集中している。このことからA地区的中心は調査区西側から現在は道路建設により消滅した付近であったと推測される。また道路を挟んで調査区の西側には幅約10mの堀状の切り通しが南北方向に延びておりこの堀の範囲までが造成面の範囲であったと推測される。

e. B 地区造成面（図 24～26、図版 7・8）

B 地区中央付近は、第 2 次調査時、土坑状の黒色土帯が確認され、その上部からかわらけ（図 46-6）が出土した。そのため、第 3 次調査時にその周辺を範囲拡大調査したところ、土坑状の黒色土帯は、削平面の堆積土であることが判明し、自然流土を除去したところ、I 区や II 区 A 地区平坦面と同様な造成面が確認された。

削平面は、斜面北側を削平し、南側に盛土をして平坦面を造りだしている。その規模は現状で、平坦面の標高が 505.4～505.7m、広さは、東西が 6.3m、南北が 12.78m を測る。削平面は、東西方向から南北方向へ L 字形に折れ曲って検出された。検出された区画部分は東西方向 4.7m、南北方向 2.7m、角度は 80° でやや歪な方形を呈している。特に北側斜面で検出された削平部分の壁は調査区東側で東西方向から南北方向に立ち上がる。削平面の比高差は、標高 506.4～505.6m の 0.8m と、比較的低い。
(武田)

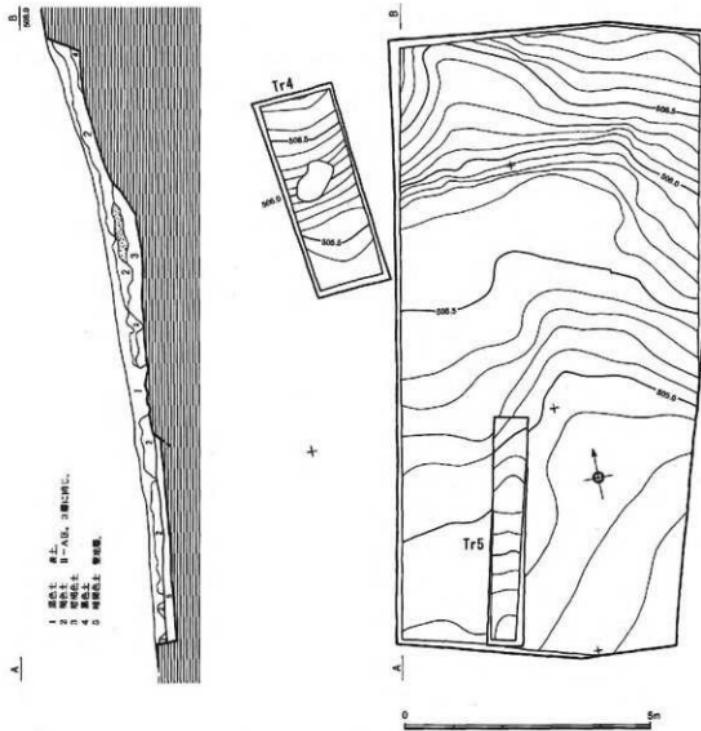


図 24 II 区 B 地区実測図

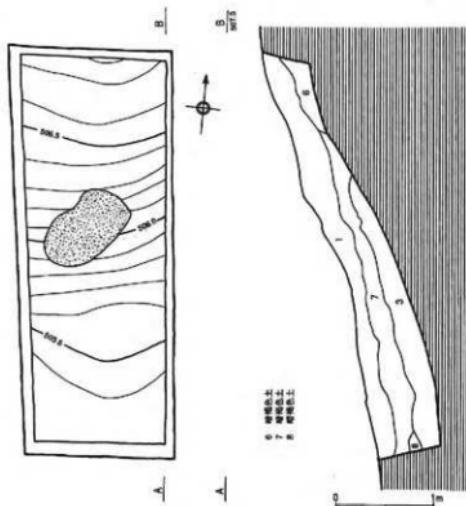


図 25 II 区 Tr 4 実測図

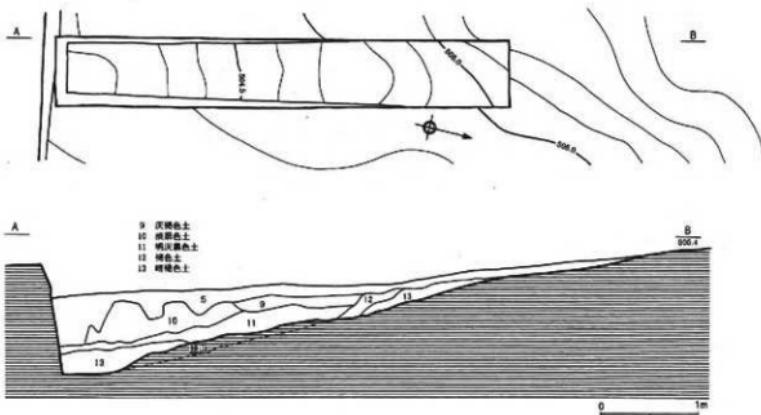


図 26 II 区 Tr 5 実測図

Tr 4 は、第 2 次調査時に、トレーニング調査を行ったところで、地山黄褐色ローム質土の上部に、自然流土の自然堆積土がみられるのみで、削平面とは遺構との関連は薄いと考えられた。しかし、第 3 次調査で確認された造成面との関連の中で、削平面の連続部分と捉えることができた。削平面上部の、等高線が乱れている部分は、広い範囲で黒色土の堆積がみられたが、プランがはっきりせず、黒色土を掘り下げたところ、底面の凹凸が著しく、柱根などによる擾乱土とした部分である。

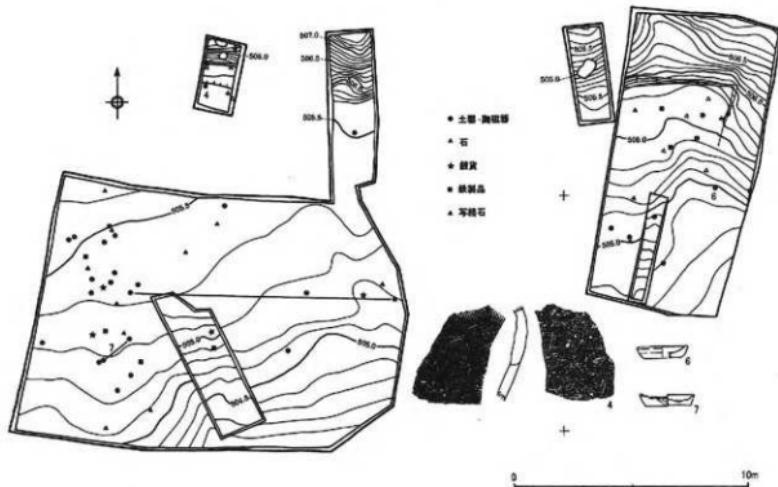


図 27 II区遺物分布図

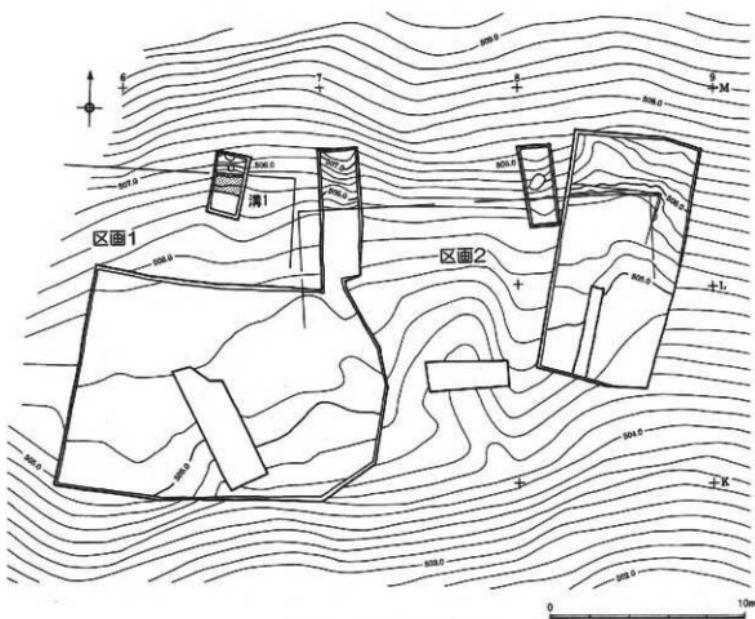


図 28 II区区画概念図

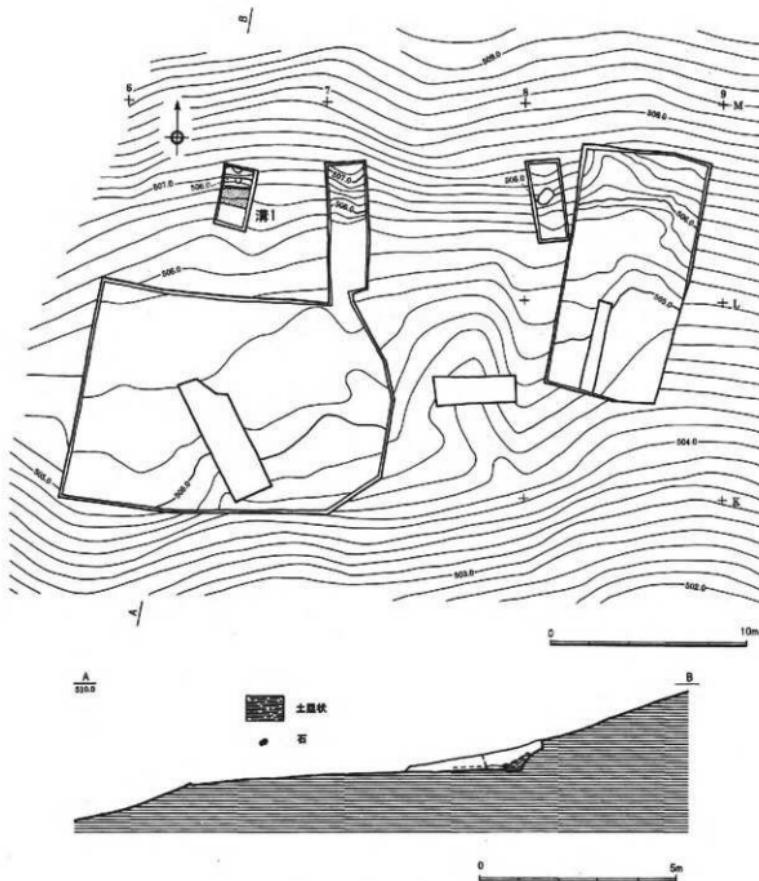


図 29 II 区造成概念図

B 地区西端の土層断面では、平坦面北側は、地山を平坦面として利用し、南斜面には黒色土の盛土をして構築した様子が看取された。I 区と同様の構築方法と考えられる。しかし、B 地区の平坦面は、盛土の自然流水が著しく、また風化も著しいのか、土質が荒く、もろくなっていた。特に、調査区南東部は、樹木などによる搅乱もあり、土の流失が著しいと考えられた。そのため、盛土調査は、盛土範囲中央に設定した Tr 5 内で行った。Tr 5 内では、地山黄褐色ローム質土は、緩やかに傾斜する様子であり、ある程度、自然地形を利用している可能性も考えられる。また、盛土は、Tr 5 より南側にも広がることが確認され、造成範囲は、調査区外にも及ぶと考えられる。

f. 遺物分布状況（図 27）

遺物はすべて、削平面と平坦面上で出土した。A 地区と同様、陶器・鉄製品・写経石・錢貨・かわらけが出土している。写経石は、文字が判読できたものはないが、I 区で出土した写経石と、扁平な川原石という点でよく似ているので、写経石として取り扱っている。

g. 区画（図 28・29）

A 地区、B 地区で確認された造成面、および平坦面は、それぞれ一部の発掘であった。また、それぞれ平坦面は確認できたものの、それに伴う遺構は、A 地区で溝 1、土壘状の盛土が確認できたのみで、建物跡などの遺構は確認されなかった。

A 地区では、溝 1 と土壘状の盛土とに時期差が想定されたが、Tr 1 で確認された削平面と、Tr 2 で確認された削平面との方向性とを比べると、その方向性に違いがみられた。

削平面の方向性および平坦面の範囲からみると、A 地区と、B 地区の図 28 のような区画の存在を想定することが可能かと考えられる。

（3）Ⅲ区（図 30～35、図版 8～11）

本区は標高約 509m の丘陵頂上部に設定した調査区で、表土直下に黄褐色ローム土が検出され、調査区の北西側から南東側に緩やかに傾斜している。第二次調査時には、平坦面に対してトレント調査を行ったところ、平安時代の縁軸陶器素地や、灰釉陶器、土師器が出土したが、遺構との関係は不明であった。また、ほかの地点には、平安時代遺物の出土は見られなかったため、村山浅間神社遺跡のはじまりを探る上で、重要と考えられた。そのため、第 3 次調査で、平安時代遺物の出土が見られた付近を中心に調査区を拡大して調査を行った。

調査区中央付近には調査区を横切るかたちで斜面に平行に北東から南西方向に段差がみられる。この段差が何に起因するのかは不明である。また調査区の北西側で溝状遺構が検出されたため調査区西側部分を拡張して調査を行い、また調査区の東側にも東西・南北の 2 方向にトレントを設定し掘り下げを行い遺構・遺物の確認を行った。

遺構は、堅穴住居 1 基、溝状遺構 1 基、土坑 2 基が確認された。

a. 堅穴住居 1（図 31～32、図版 9・10）

堅穴住居 1 基が、調査区中央の M15 グリッドにて検出された。この周辺は、第 2 次調査時に、平安時代遺物を確認した箇所にあたる。遺構は、南東方向に傾斜する斜面地に沿って構築されており、北壁は残存し、南壁は、植林のためもあり、喪失している。北壁のやや西よりに竈跡、住居の床面中央付近に、炉跡と考えられる焼土範囲が確認された。柱穴らしき柱穴は検出されなかった。

残存規模は、北壁長約 2.9m、東壁長約 1.9m、西壁長 2.8m と、比較的小規模な住居である。遺構覆土は、自然堆積による埋没を示している。現存の深さは、最大で 15 cm を測る。床面は、貼り床らしき堀り方は確認されず、地山である黄褐色ローム質土の削平面を床面としているようであった。竈は、住居西隅から約 0.8m の付近において検出された。竈構築土は、遺構覆土に類似するようなく、硬化した黒色土が使用されていたため、調査時に袖部西側の一部を削平してしまい、失われ

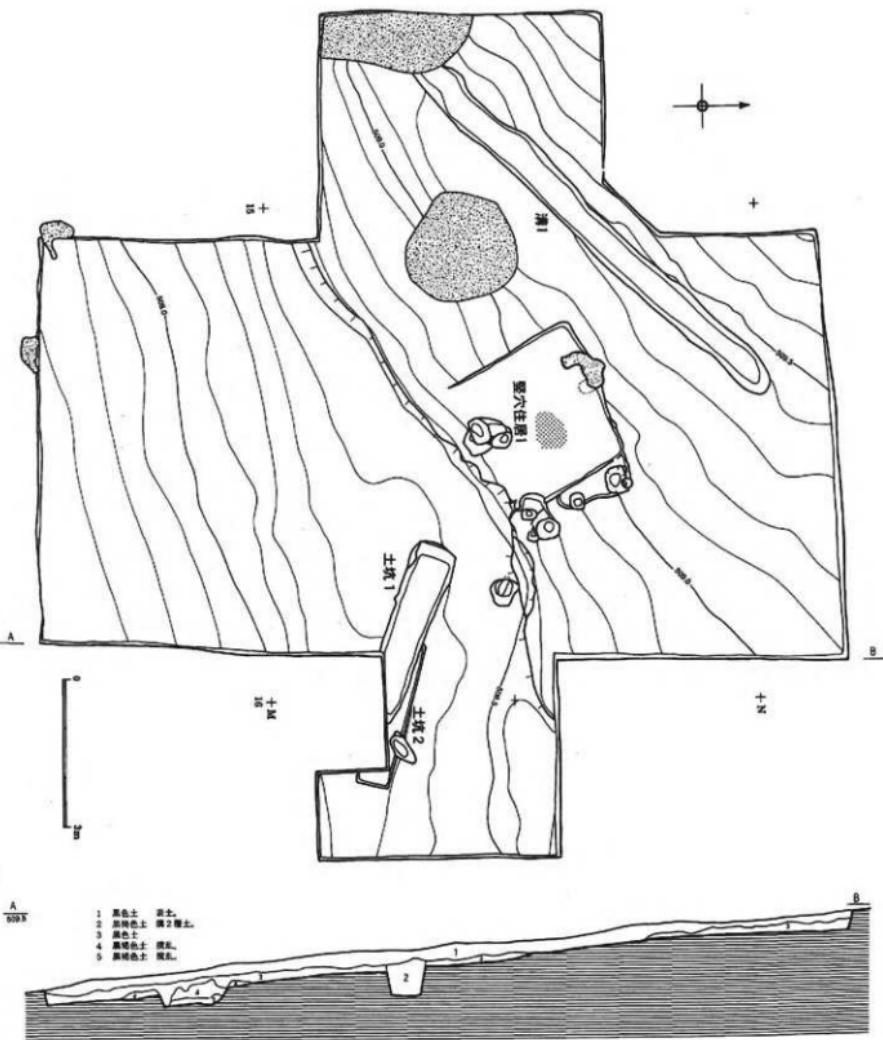


図 30 III区遺構分布図

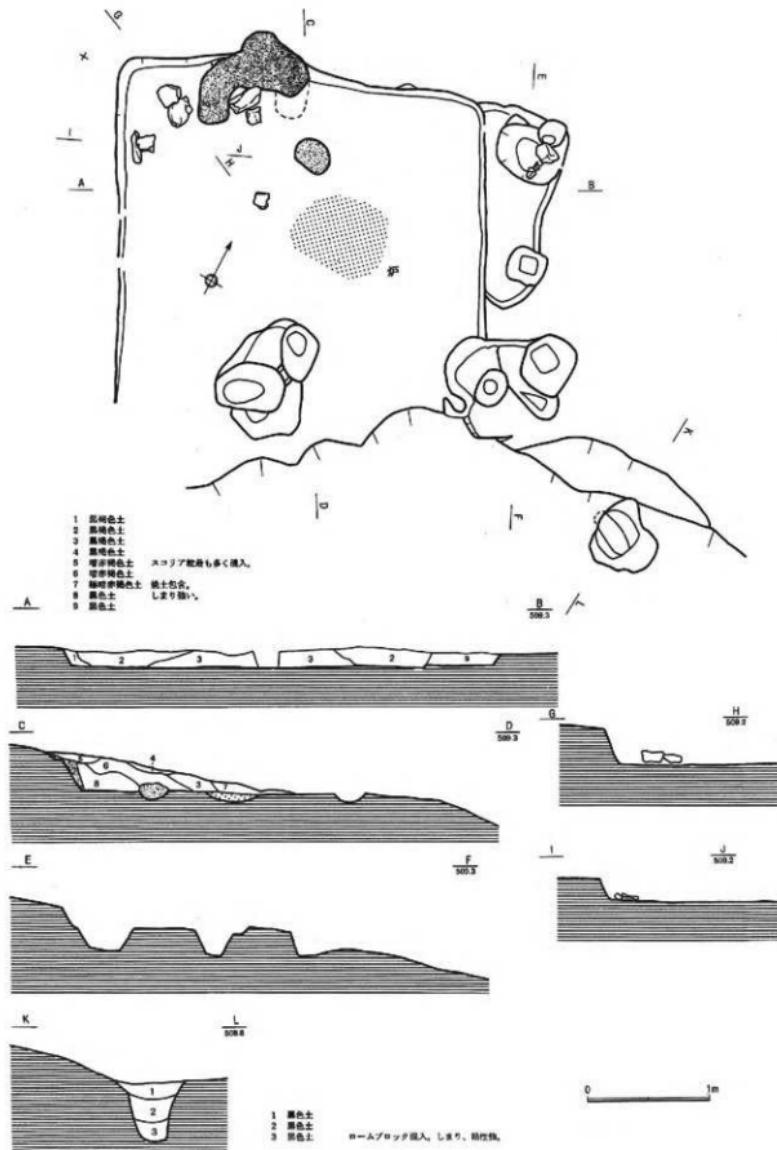


図 31 III区整穴住居 1 実測図

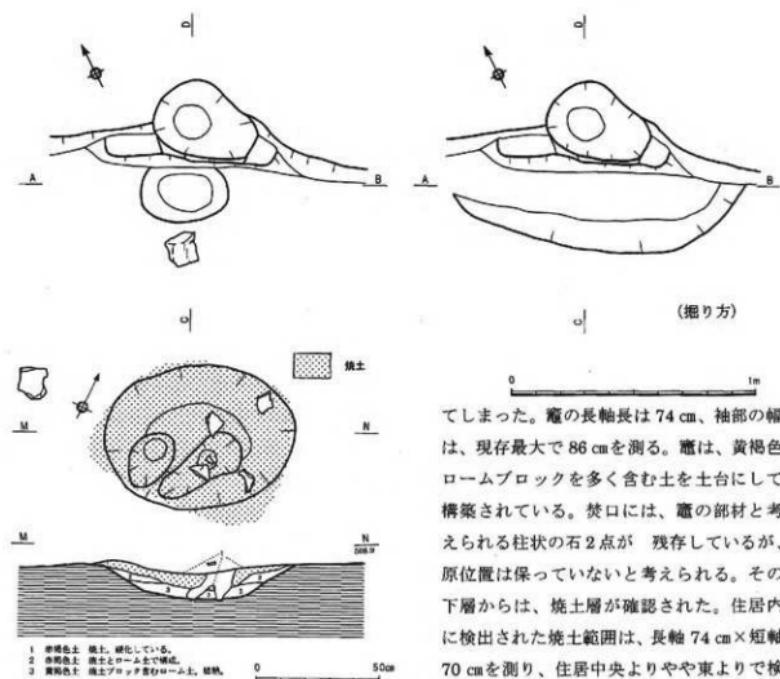
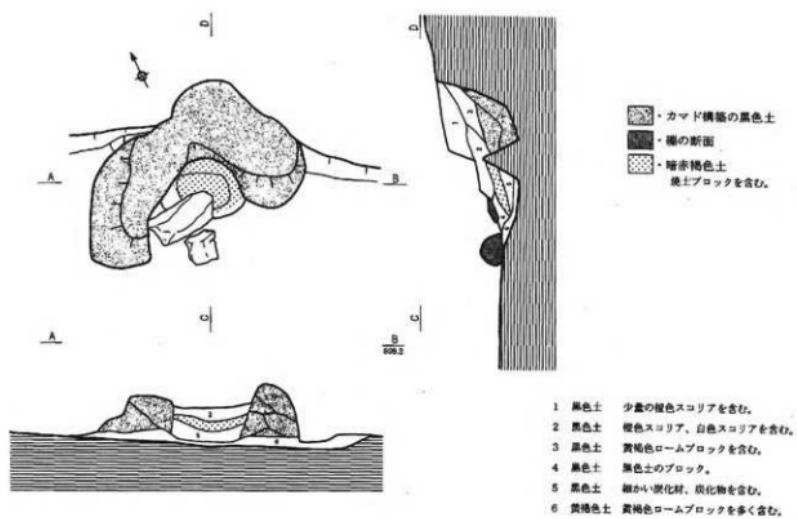


図 32 III区堅穴住居 1竈・炉実測図

てしまった。竈の長軸長は 74 cm、袖部の幅は、現存最大で 86 cm を測る。竈は、黄褐色ロームブロックを多く含む土を土台にして構築されている。焚口には、竈の部材と考えられる柱状の石 2 点が 残存しているが、原位置は保っていないと考えられる。その下層からは、焼土層が確認された。住居内に検出された焼土範囲は、長軸 74 cm × 短軸 70 cm を測り、住居中央よりや東よりで検出された。地山である黄褐色ローム質土を

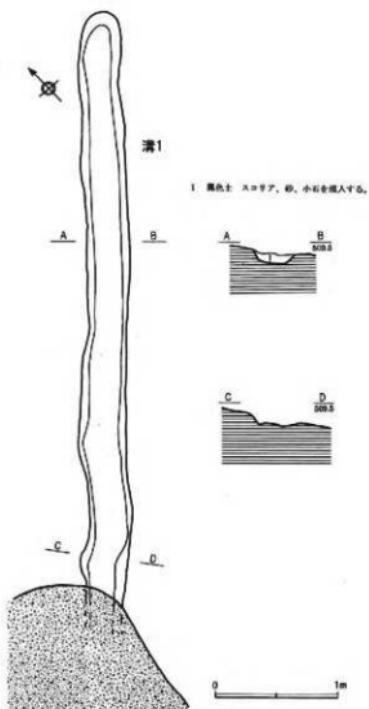


図 33 III区溝1実測図

浅く掘りくぼめて構築されている。焼土の深さは最大で6cmを測る。遺物は、遺構覆土中から出土している。灰釉陶器壺、灰釉陶器碗・皿、土師器壺、土師器甕が出土した。灰釉陶器は、9世紀後半～10世紀初頭、甲斐型土器壺、甕は、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、堅穴住居1の東壁の南端で検出されたピット周辺では、土師器甕の破片が集中して出土した（図47-6）。第2次調査分とを合わせた出土遺物分布状況からは、遺物が、堅穴住居1から低地の南において出土する様子が見て取れる。堅穴住居1より以南には遺構は検出されず、出土遺物もおおむね9世紀後半～10世紀前半に比定されており、これらの遺物は、堅穴住居1に伴うものと考えてもよいものである。

堅穴住居1の土師器は、すべて甲斐型土器で占められることに特徴がある。また、第2次調査のトレーニング調査で出土した緑釉陶器素地の稜碗（図47-18）は、堅穴住居1から約6m離れた地点であるが、周辺の土師器が堅穴住居1内のものと接合関係を結ぶ点から、堅穴住居1に伴う可能性が高いと考えられる。

また、堅穴住居東隅で、土坑状の落ち込みが確認された。この落ち込みは、堅穴住居1調査時に発見されたが、その覆土は堅穴住居1覆土と類似し、切りあい関係の判別は困難であった。現存の深さは、10cmを測り、堅穴住居1よりやや浅い。遺物は甲斐型土器杯、甕が出土している。（佐野）

b. 溝1（図33、図版11）

調査区東側のM14・M15グリッドにて検出された。溝状遺構は北東から南西方向に流下しており、溝の北東側は調査区北側壁付近にて立ち上る。溝の南西侧は調査区西側外に延びていると考えられる。溝の南西侧部分の北側の立ち上がりは自然崩落により崩れている。その平面形態は直線状を、断面形態は浅い逆台形状を呈し溝底は平坦となる。溝の規模は長さ11.3m、溝幅は上場で69cm、下場で45cm、深さ15cmを測り、主軸方向はN43.5°・Eを指向する。覆土は黒色土の1層で土のしまりはやや弱いが粘性はやや強い。層中に粒径1~2mmの赤褐色スコリア粒、砂、粒径1~3mmの小石をやや多く含む（武田）。遺物は、土師器杯の1点のみである。この土師器は、甲斐型土器に

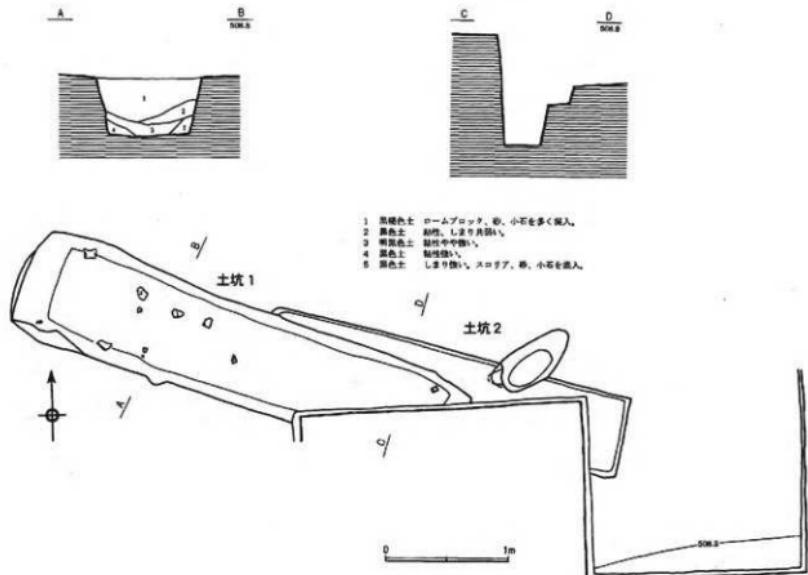


図 34 III区土坑 1・土坑 2 実測図

分類されるもので9世紀後半～10世紀前半に比定される。外面に墨書がみられ、文字は「朝」と読まれた（註1）。

註1 平川南氏教示による。（佐野）

c. 土坑（図34、図版11）

c - 1. 土坑1

調査区東側のM15グリッドにて検出された。遺構は西北西から東南東方向に流下しており溝の南東側の一部は調査区の外へと延びている。検出された溝の平面形態は長方形、断面形態は鍋底状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上る。検出された溝の規模は検出範囲で長さが（3.73m）、溝幅は上場で84cm、下場で66cm、深さ46cmを測り主軸方向はN°68.5°・Wを指向する。覆土は5層に分層される。

（武田）

遺構内からは多くの遺物が出土しており、遺構中央付近から西側にかけて特に遺物の出土が多くみられた。平安時代の灰釉陶器、土師器のほか、昭和14年に鋳造されたアルミ錢貨が出土したため、本遺構は、昭和14年以降の遺構と考えられる。遺構の性格については不明であるが、覆土は、ロームブロックを多く含む1層は、埋土として考えることもできる。

c - 2. 土坑2

土坑1の東側に位置し、北西隅から全体の1/3程を土坑1に切られている。土坑1よりやや南

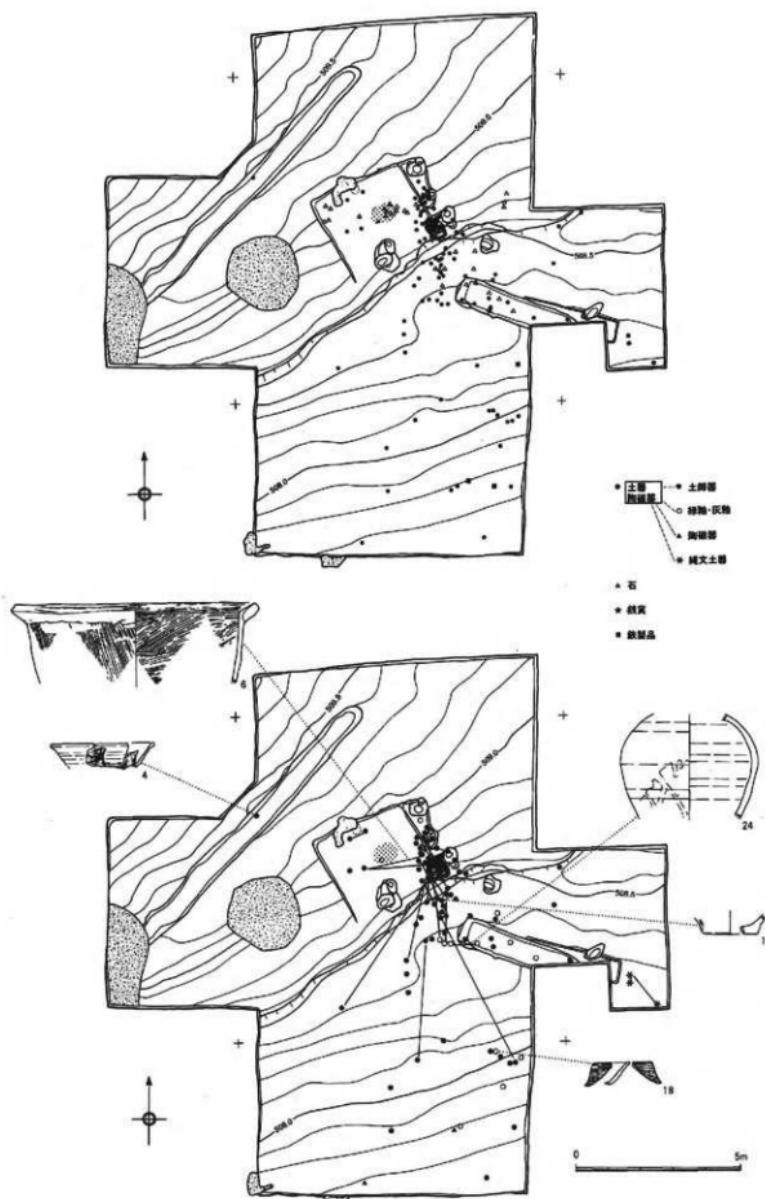


図 35 III区遺物分布図

に傾いているが、ほぼ同じ北西方向を指向する。西北西から東南東方向に流下している。傾斜にほぼ平行に沿っている。現存長 2.98m、幅は 0.65m、深さは 0.16m である。断面形態は方形を呈する。出土遺物はなく、遺構の時期、性格は不明である。

d. 遺物分布状況（図 35）

Ⅲ区は、丘陵頂部であるため、土の流失が著しいと考えられる。遺物は、平安時代の土器・陶器がほとんどであり、堅穴住居 1 周辺に多く出土している。堅穴住居 1 から南に離れた地点でも、接合関係を示す土器があり、また時期的にも 9 世紀後半～10 世紀前半の年代に収まるもので、これらの平安時代土器類は、堅穴住居 1 に伴う可能性が高い。

e. 平安時代の遺構について

Ⅲ区で検出された平安時代の遺構は、堅穴住居 1、溝 1 と考えられる。溝 1 は、斜面地の等高線に沿って構築され、堅穴住居 1 もまた、等高線に沿って構築されている。遺物の年代観は、溝 1 出土の甲斐型土器杯は 1 点のみであるものの、堅穴住居 1 で出土した甲斐型土器と、また灰釉陶器とも大きな時期差は考えられず、同時期併存する遺構としてとらえておく。

（4） VI区（図 36、図版 12）

大日堂東側の平坦面で、護摩壇との間に位置する。第 1 次調査の際、上段にあたる I 区の調査と平行して行った。当時は、下段と称されていた。

この平坦面は、「大棟領権現」社の拝殿推定地で、上段の I 区との関連が想定された。また、拝殿だけではなく、拝殿の後方を通り、丘陵奥の竜頭池と呼ばれる水源地から、さらに下の平坦面にある水垢離場へと水を引くための、水路が構築されていた可能性も考えられた。

調査は、平坦面に対して任意の十字トレーニングを設定して行ったところ、表土下に何層もの細かな整地層が検出され、調査区西端では、溝跡が検出された。また、整地層の中には、炭化物層を挟んでいる。この溝は、調査区に直交する方向で検出された。溝の幅は 1m、深さは掘り込み層から 36cm を測る。十字に設定されたトレーニングの北端では、幅 1.55m、深さ 40 cm を測る溝が確認されているが、これは、搅乱とも考えられ、両者の関係は不明である。また、調査区中央では、炭化物の広がりが確認された。この細かな整地層は、現代のものと考えられるビニール管の埋設溝に切られている。

この整地層は、地山を削平し、その上部に整地されている。地山は、黄褐色土ローム土層に類似すると考えられる。土層の観察からは、近現代の整地層と考えられた。

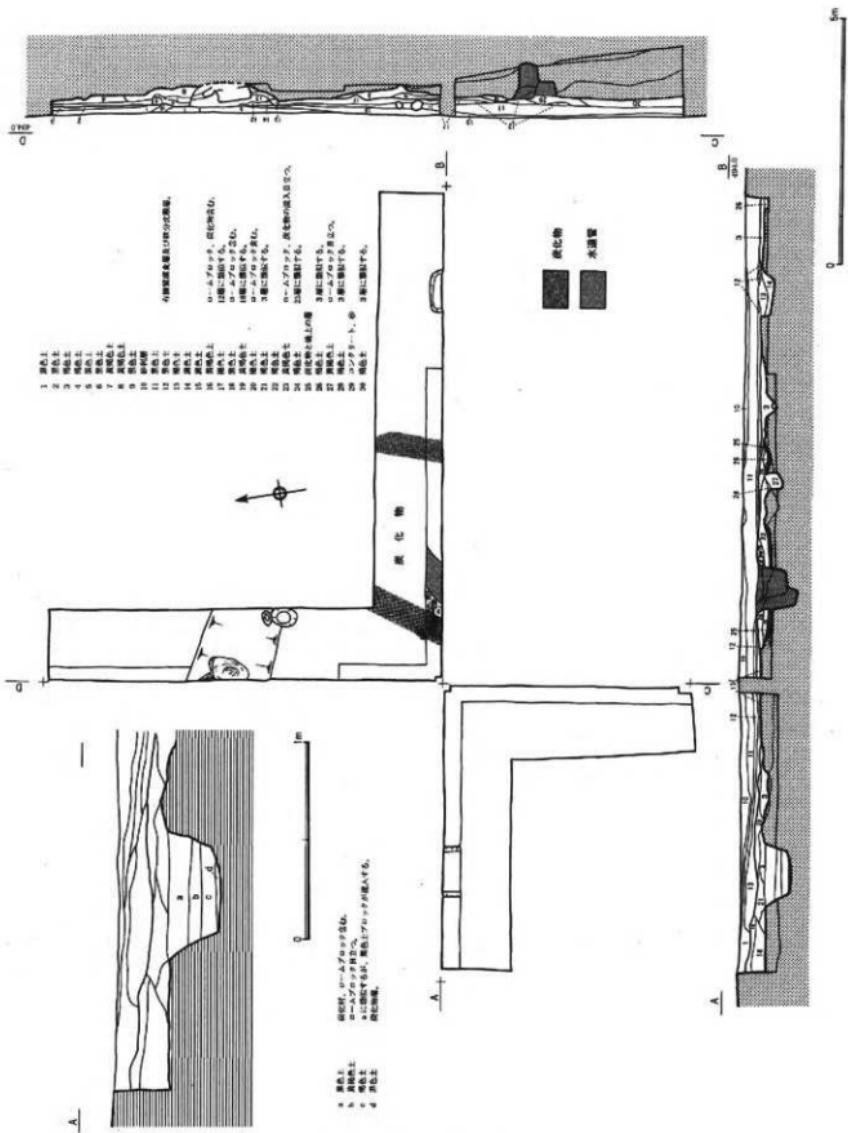


図 36 VI区遺構分布図

(5) VII区(図37~40、図版12)

VII区は、村山浅間神社境内の最高所にある平坦面である。標高は、510m付近である。現在村山の氏神を祭る堂宇が建立されており、高根總鎮守と呼称されている。堂宇の構築面は、周囲より1mほど低く、現況では断面逆台形状にほり窪められている。

VII区の調査は、高根總鎮守社建替えの連絡を、氏子の方から受けて緊急に行なわれた。調査時すでに堂宇は取り払われており、また周囲にも土堤が積み上げられていたなど、当時の景観は失われていた。調査時は、堂宇の下に構築されていたと考えられる建物の礎石跡を検出したため、この建物跡の調査を行なうこととした。なお、周辺地形図は、改変後のものである。

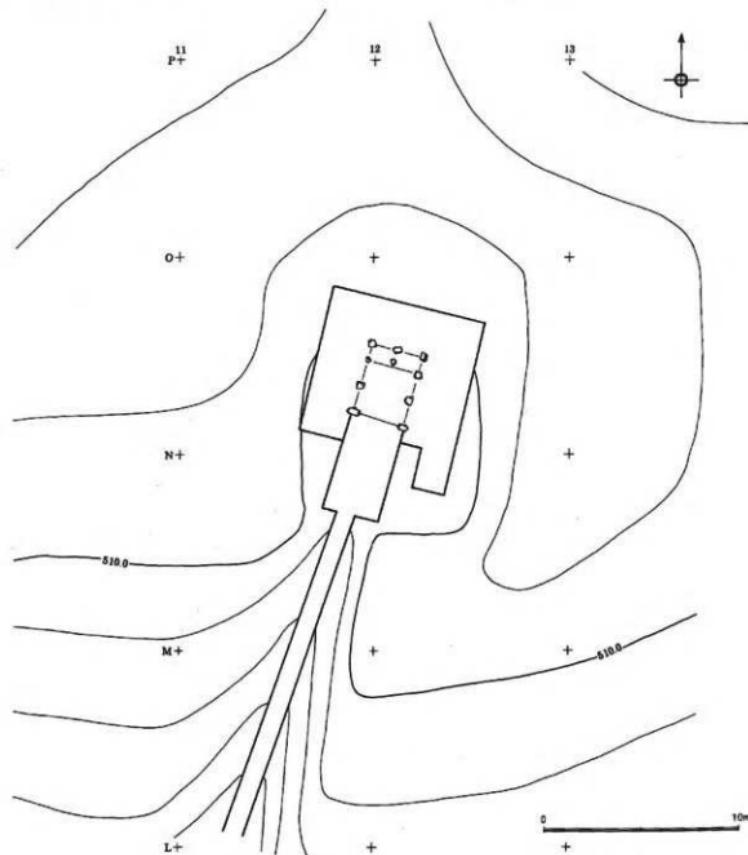


図37 VII区周辺地形図

調査時の平坦面の面積は、東西約9m×南北約12mの約108 m²である。この平坦面に確認されたのは、礎石建物跡1基（S 1～S 9）のみであった。この平坦面には、村山浅間神社社殿と大日堂の間から丘陵を削平して直線的に登る参道が取り付けられている。

礎石建物跡1は、東西2.6m、南北2.2mの2間×2間の規模であるが、正面の南面の梁間（S 3～S 9）は1間となっている。礎石には、人頭大以上の角礎が使用されている。桁行2間は、それぞれ、S 1～S 2は0.9mでS 7～S 8は1.0m、S 2～S 3は1.3mでS 8～S 9は1.4mと大差はないが、S 4～S 5は0.6mと短い。これを、1尺=0.303mとすると、S 1～S 2は3.0尺、S 2～S 3は4.3尺、S 4～S 5は2.0尺と計算される。

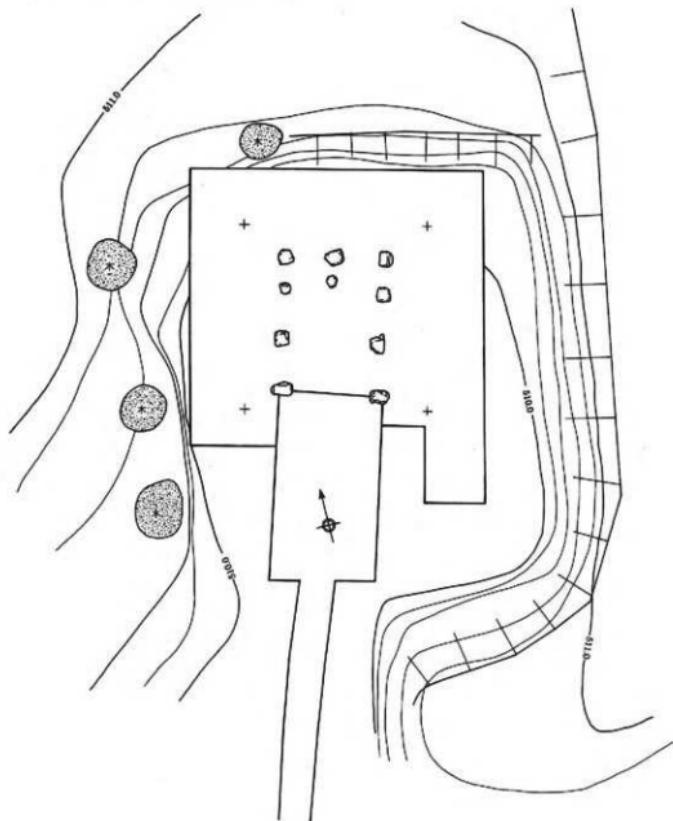


図38 VII区遺構分布図

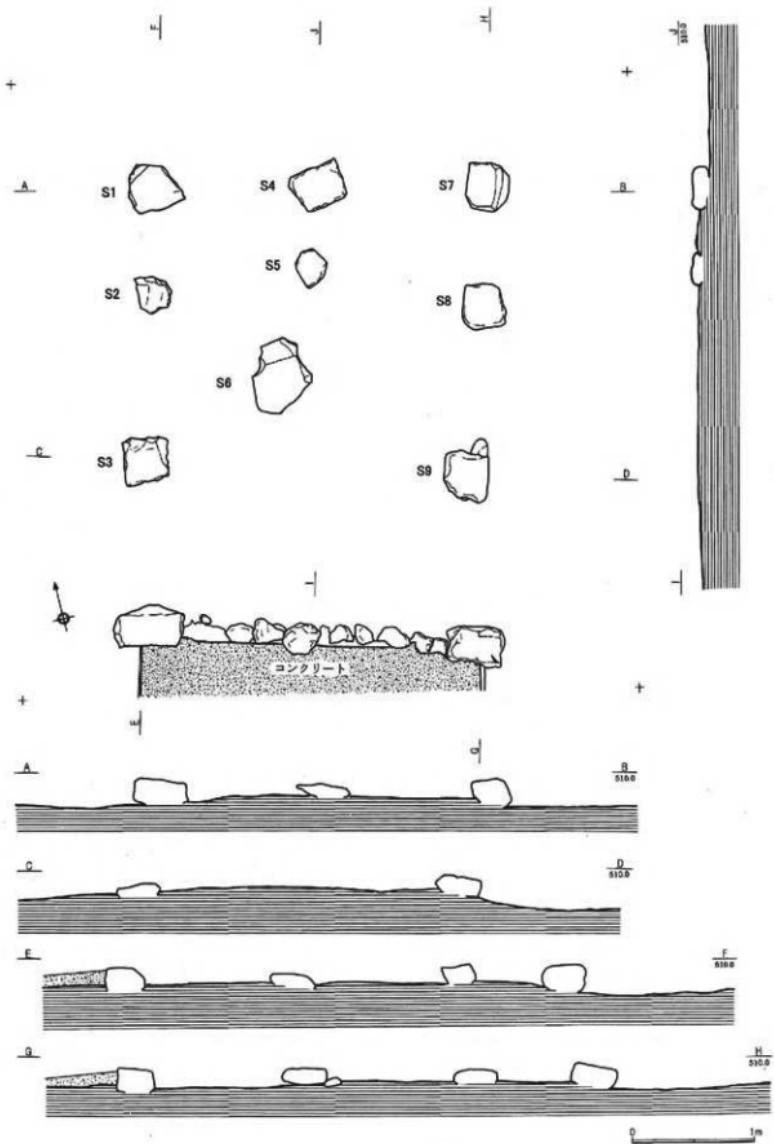


図 39 VII区礎石建物 1 実測図

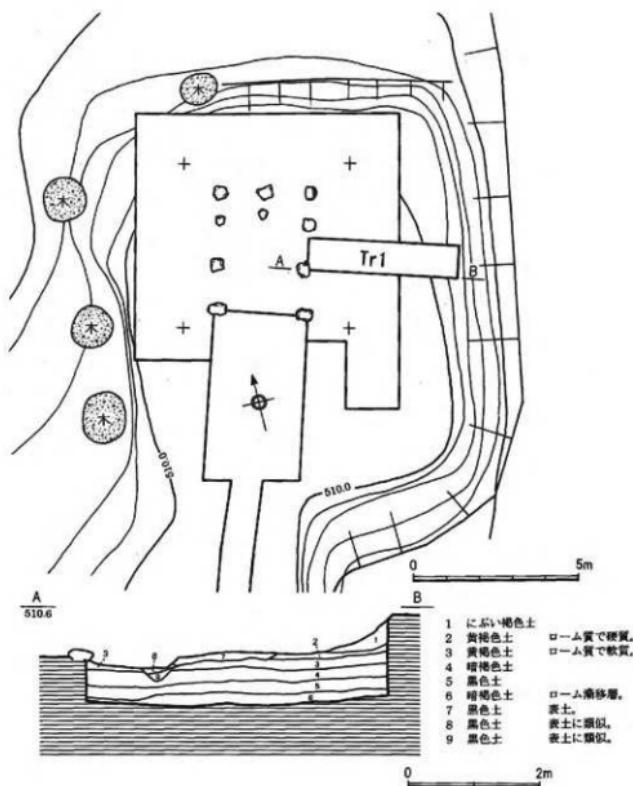


図 40 VII区 Tr 1 実測図

調査区中央に構築面の調査のために設定したトレンチでは、黄褐色ローム土に類似する土層の堆積が観察された。下層では、黒色土、暗褐色土下に、ロームの漸移層が検出されているため、それより以上は自然堆積土と考えられ、礎石建物跡は、地山の上に、礎石を直において構築されたと考えられる。

遺物はまったくなく、礎石建物跡の年代は不明である。

2. 遺物

第1次調査～第3次調査で出土した、I区～VII区の遺物を図示した。

(1). I区出土遺物 (図41～45、表1～6、図版13・14)

I区からは、中世～近現代の遺物が出土した。内訳は、土器・陶磁器30点、石製品1点、金属製品15点、錢貨20点(40枚)、写経石119点が出土した。うち、土器2点、陶磁器8点、石製品1点、金属製品15点、錢貨36枚、写経石24点を図示した。

a. 土器・陶磁器 (図41、表1)

土器は、かわらけが2点出土した。9は、口縁部と底部を欠損している。橙色の緻密な胎土で、内外面にロクロ目がみられる。10は、底部1/2程欠損している。内面に煤が一面に付着しているが、口縁部に特に厚く付着している。外面は、口縁端部に固着して、タール状になっている。胎土は、にぶい黄褐色で密であるが、少量の砂粒を含んでいる。陶磁器は、1～4の灯明皿、5の瓶、6

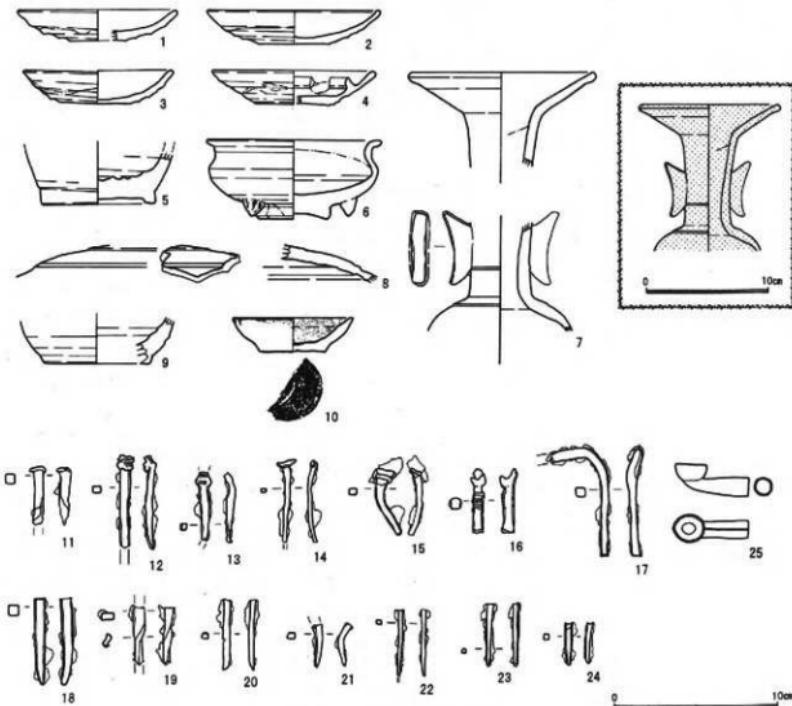


図41 I区出土遺物1

の香炉、7の花瓶、器種不明のもの8を図示した。灯明皿は、1~3が、内面に受けを持たない灯明皿上皿である。4は受けが口縁部より低い灯明皿受皿で、開口部が方形を呈する。いずれも瀬戸・美濃系で、体部下半はヘラ削り調整されている。釉薬は、鉄釉系と灰釉系かと考えられるが、釉薬の区別がわからないものについては、観察表では「釉有」と記載した。年代は、18~19世紀である。2の底部内面には、長さ0.7cm前後で幅0.2cm程度のトチン痕が5ヶ所みられる。また、3の底部内面にも、径4.2cm前後で、0.2cmの幅で輪状に釉薬がはげており、焼成痕と考えられる。3と4は、底部外面の釉薬が拭い取られている。5は、明治時代の瓶で、削り出し高台で高台内にトチン跡を残す。6は、肥前系の青磁香炉で、腰持形である。足は3本で、高台より高い位置にある。年代は18世紀後半~19世紀である。7は、肥前系の青磁花瓶で、口縁部が大きく開き、肩が張る。頸部にはとがった耳状の突起が両端につく。年代は17世紀後半~18世紀である。8は、器種不明の陶器で、器体の肩部にあたると考えられる。釉薬は、灰白色で光沢はあるが透明感はなく、内面には釉薬はかかるない。外面には、器面を削りだして表出させた筋状の装飾がみられる。

b. 石製品（図42、表2）

85の砥石1点である。両面使用され、断面が竹とんぼ状になっており、手持ちで使用された砥石と考えられる。表土中より出土したもの。

c. 金属製品（図41~43、表3~5）

和釘14点、煙管1点を図示した。釘（11~24）は、鉄製で、断面が方形を呈する。いずれも和釘で、完形のものはない。19のみ、体部にねじれを有する。年代は不明である。煙管（25）は、雁首で、全体に青緑色の腐食が広がっており、真鍮製かと考えられる。脂反しの湾曲が小さく、19世紀以降のものと考えられる。

銭貨は、I区が出土数が最も多く、北宋錢22枚、明錢4枚、寛永通寶5枚である。銭種は、北宋錢が11種、至道元寶（初鑄995年、以下同様）、咸平元寶（998）、祥符元寶（1008）、皇宋通寶

（1038）、至和通寶（1054）、熙寧元寶（1068）、元豐通寶（1078）、元祐通寶（1086）、紹聖元寶（1094）、聖宋元寶（1101）、政和通寶（1111）である。明錢は、2種で、洪武通寶（1368）、永樂通寶（1408）である。寛永通寶は、文字がいわゆる「ス寶」となる古寛永と、「ハ寶」となる新寛永がある。新寛永1点（32）以外は、すべて銅錢である。また、複数枚癒着した状態で出土したもの（26~28、29~30、36、40~44、48~50、58~60）もある。56~60は、盛土調査のためのトレンチである、Tr1内で、盛土中から出土したものである。

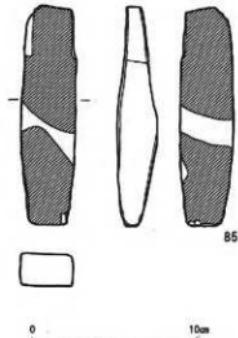


図42 I区出土遺物2

d. 写經石（図45、表6）

文字が見えるものをすべて図示した。文字が判別できないものがほとんどであるが、大きさ3.5cm×2.0cm前後、厚さ

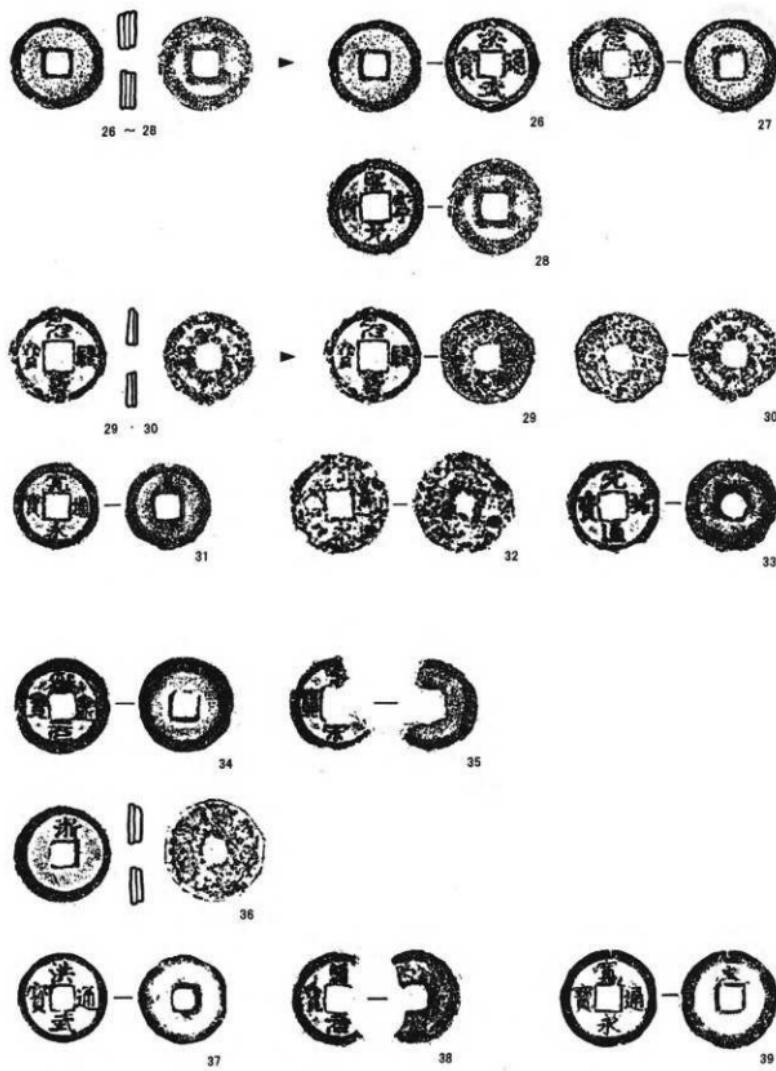
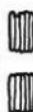
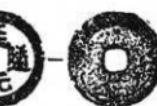


図43 I区出土遺物3



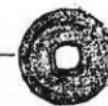
40 ~ 44



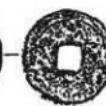
40



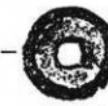
41



42



43



44



45



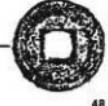
46



47



48 ~ 50



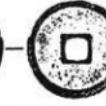
48



49



50



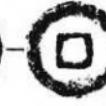
51



52



53



54



55

0 5cm

図 44 I 区出土遺物 4

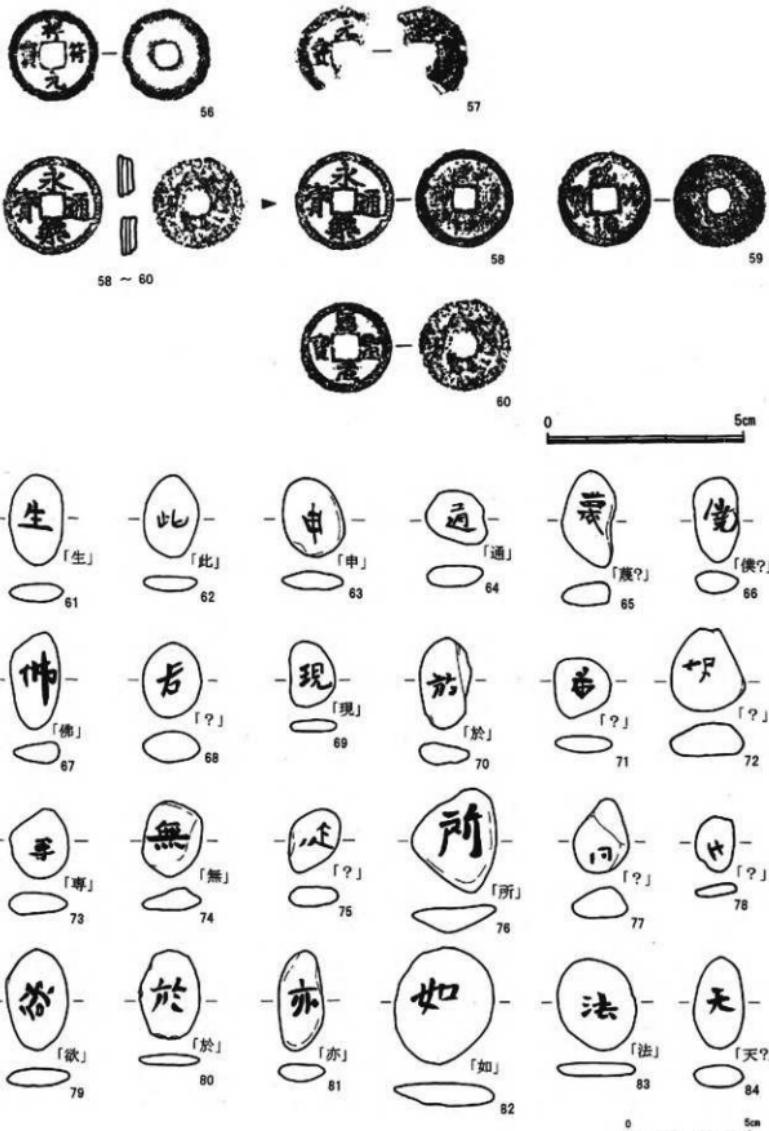


図 45 I 区出土遺物 5

0.8cm 前後の扁平な河原石を中心に、扁平な河原石をすべて写経石として取り扱った。5cm 四方の河原石も含まれる。文字が見えるものはトレンチ内より出土したものが多く、一つの石に一文字づつ確認された。判読できた文字は、「生」、「佛」、「法」、「如」、「於」などで、写された經典名はわからない。石材は、砂岩、泥岩、頁岩である。

(2). II 区出土遺物 (図 46、表 1・3・5、図版 14)

II 区からは、土器・陶磁器 44 点、金属製品 5 点、錢貨 8 点、写経石 21 点が出土した。うち、瓦器を含む土器・陶磁器は 16 点、金属製品 5 点、錢貨 7 点を図示した。土器・陶磁器類で出土点数の 61.4% を占める 27 点が出土したのはかわらけで、また年代的にも中世に遡る資料が出土している。

a. 土器・陶磁器 (図 46、表 1)

中世に遡る資料は、2 の縁釉小皿、4 の壺、16 の瓦器香炉である。2 は、瀬戸・美濃の鉄釉縁釉小皿で、口縁部は断面方形、底部は糸切り痕のある平底である。藤沢編年 (藤沢 1996) 古瀬戸後 III 期である。4 は、常滑の壺で、肩部に押印文が見られる。色調は赤褐色を呈する。中野編年 (中野 1996) 6 a ~ 8 型式であろうか。16 は、外面に連続する三角形のスタンプ文が施されている。3 は、瀬戸・美濃の志野丸皿である。17 世紀前半である。かわらけは、10 点を図示した。

b. 金属製品 (図 46、表 5)

金属製品は、和釘と、錢貨が出土した。17~20 は和釘、材質は鉄と考えられる。断面方形を呈する和釘である。欠損箇所があり、また湾曲し、完形品はない。21 は不明の鉄製品である。厚さは 0.2 cm と薄く、断面 L 字型を呈する。錢貨は 7 点を図示した。北宋錢 2 枚、明錢 3 枚、寛永通寶 1 枚で、錢種は、天聖元寶 (初鑄 1023 年以下同様)、元豐通寶 (1078)、洪武通寶 (1368)、永樂通寶 (1408)、寛永通寶 (1636) である。寛永通寶は、古寛永である。I 区出土の錢貨と、錢種の相違はあまりない。

(3). III 区出土遺物 (図 47・48、表 1~3・5、図版 15・16)

III 区からは、平安時代の土器・陶器が合計で 104 点、石製品 2 点、金属製品 3 点、錢貨 1 点が出土した。

a. 土器・陶器 (図 47、表 1)

土器は、土師器壺、壺 (1~17)、陶器は、縁釉陶器素地稜碗 (18)、灰釉陶器碗・皿、壺 (19~24)、天目茶碗 (25) に分けられる。1~5 は、甲斐型壺で、いずれも底部を欠損しており、器高等は不明である。内面に暗文はみられない。胎土は緻密で、赤色粒子を含む。1、4 は体部下半にヘラ削りがみられる。口縁部は横ナデされ、わずかに玉縁状になる。年代は、甲斐型土器編年 X II 期以降が考えられる。また、4 には体部に墨書が見られ、「朝」という文字かと考えられる (註 1)。6~12 は甲斐型壺で、胎土は長石・石英などの無色鉱物と、雲母、角閃石などの有色鉱物を多量に含む。口縁部は大きく外反し、肥厚し、粘土貼り付け痕が確認できる。10 は、頸部に一条の沈線が

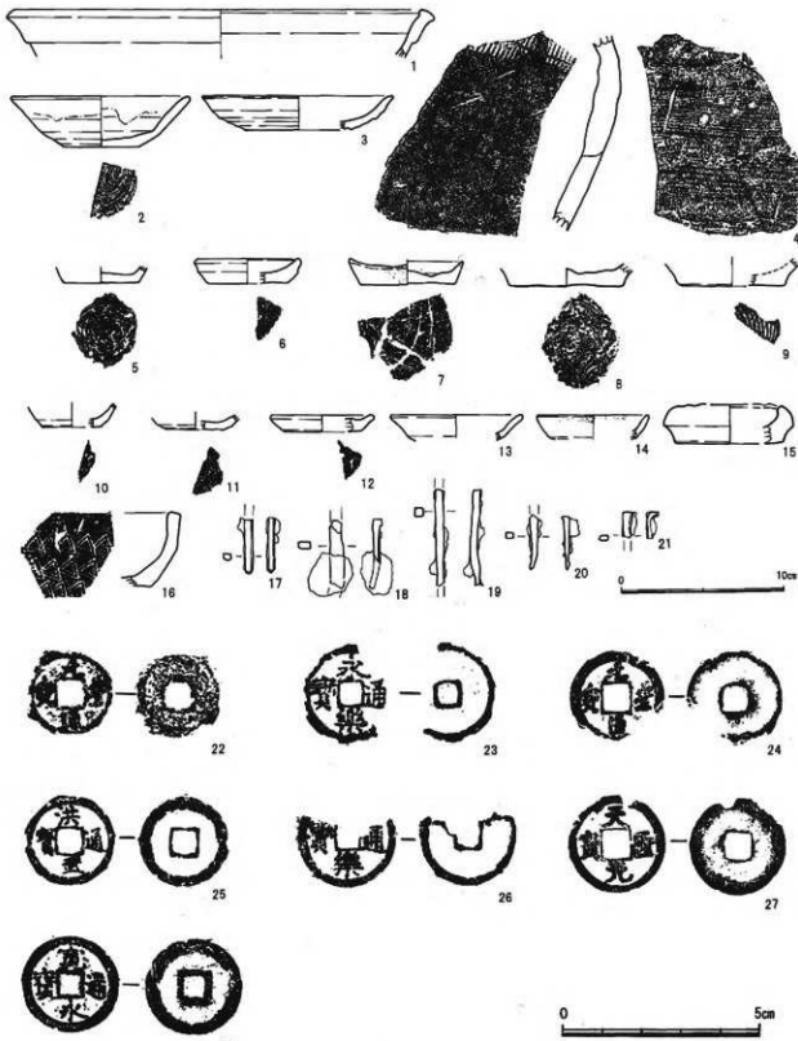


图 46 II 区出土遗物 1

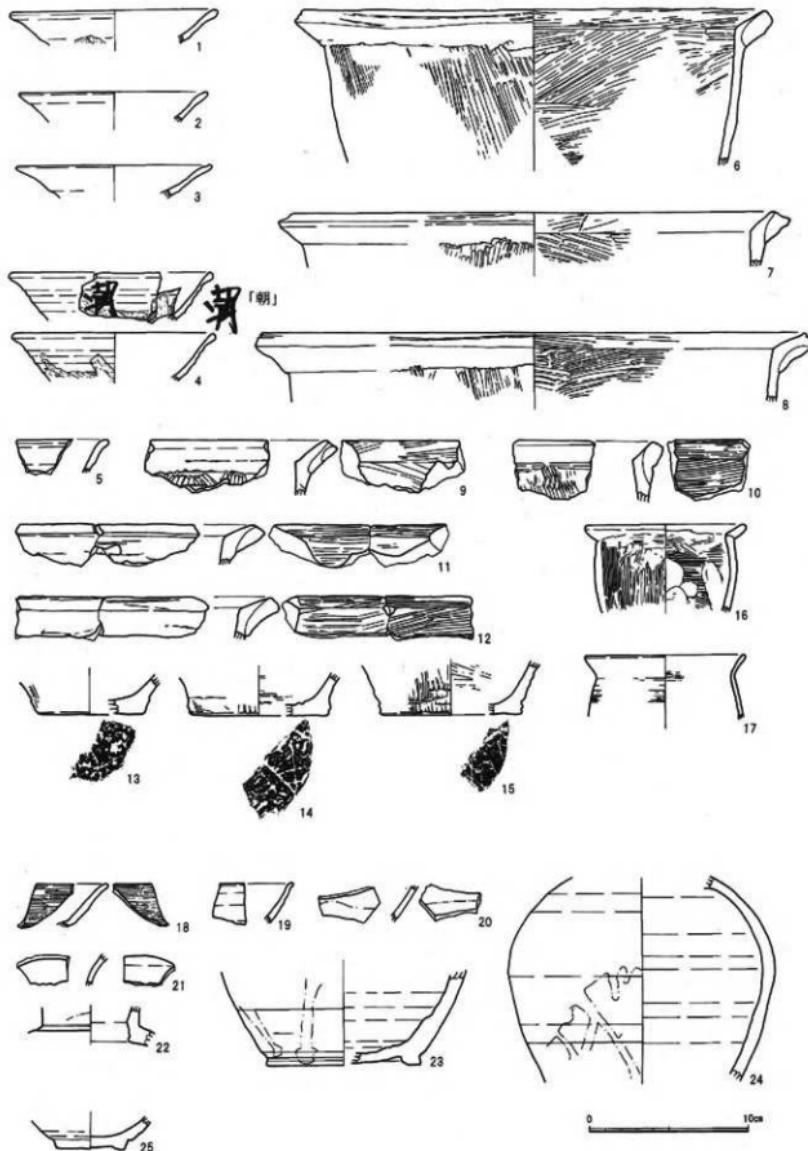


图 47 Ⅲ区出土遗物 1

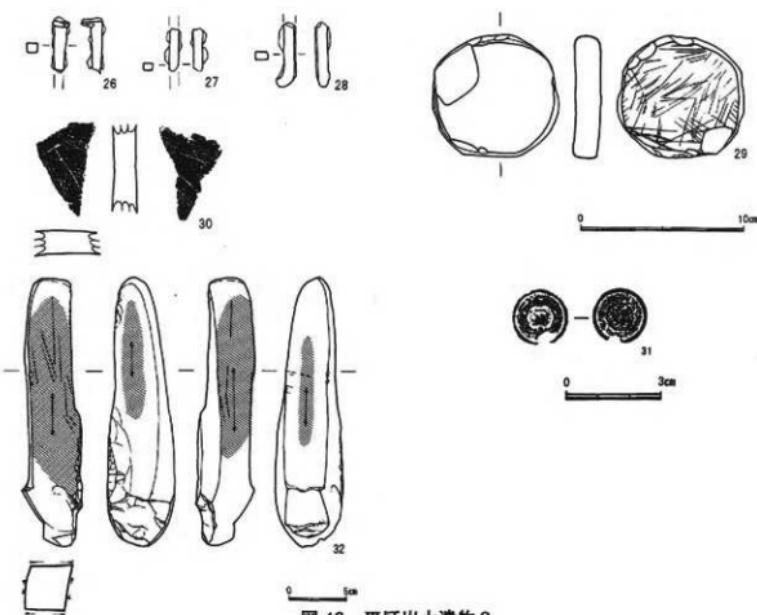


図 48 III区出土遺物 2

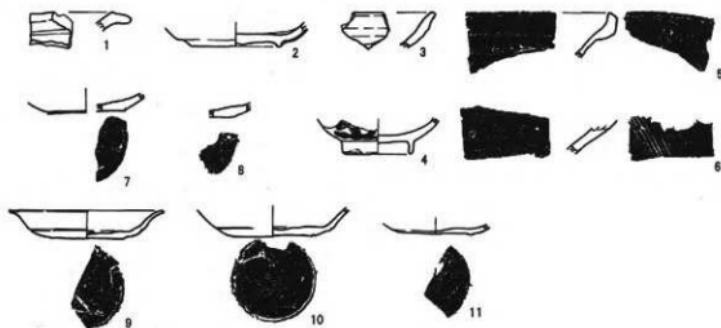


図 49 IV区・V区出土遺物

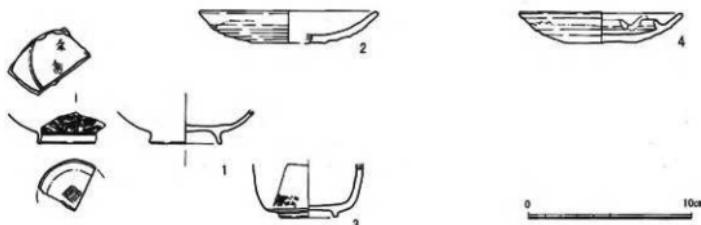


図 50 VI区周辺・VII区出土遺物

型窯の底部と考えられる。17は小形の甕で、胎土は砂粒の混入が目立ち、色調は明るい橙色である。器壁は非常に薄く、もろくなっている。内外面ともに横位の擦痕がみられるが、横ナデ調整かと考えられる。18は、緑釉陶器素地の稜碗で、内外面とも横ミガキされている。二川窯のもので、9世紀後半～10世紀初頭とされる。19～20は灰釉陶器の碗・皿で、22～24は灰釉陶器壺である。19と20、22～24はそれぞれ同一個体の可能性が高い。25は瀬戸・美濃の天目茶碗で、内面には鉄釉が施され、底部は露胎している。古瀬戸後IV期新とされる。これは、III区で唯一の中世陶器である。

(註1) 平川南氏教示による。

b. 金属製品 (図 48、表 3・5)

26～28で、和釘である。断面方形で、完形品はない。銭貨は31の1点で、鳥一錢アルミニウム錢である。鋳造年が判読でき、昭和14年(1939)の戦時貨幣と考えられる。土坑1覆土中から出土した。

c. その他の遺物 (図 48、表 7)

29は、瓦の転用品と考えられる。一面に擦痕がみられる。周囲は磨られて丸く加工されている。30は、瓦片と考えられる。擦痕がみられる。

(4). IV区出土遺物 (図 49、表 1・5、図版 14)

IV区は、平成14年度の調査区であるが、遺物のみ再報告する。出土した遺物は、土器・陶磁器40点、銭貨1点である。うち、土器・陶磁器11点、銭貨1点を図示した。

a. 土器・陶磁器 (図 49、表 1)

1は瀬戸・美濃の灰釉折縁深皿で、年代は、古瀬戸後IV期古とされる。2は、瀬戸・美濃の灰釉丸皿で、大窯2・3段階とされる。底部は露胎し、輪ドチが残存している。5、6は、瀬戸・美濃の擂鉢で、錆釉が施される。5は、口縁部の形状から、擂鉢I類と考えられ、古瀬戸後IV期新段階とされる。6は後IV期段階の範疇とれる。3は、長石釉がかかる志野丸皿で、17世紀後半とされる。4は肥前の磁器染付碗で、19世紀前半のものとされる。7～11は、かわらけで、胎土がにぶい褐色で軟

質のもの（7、8）と、明るい橙色で器壁が薄く、硬質のもの（9～11）がある。

b. 金属製品（図 49、表 5）

錢貨は 1 点、北宋錢の政和通寶（初鑄 1111 年）である。

（5）V 区出土遺物（図 49、表 1）

V 区もまた、IV 区と同じく平成 14 年度の調査区であるが、遺物のみ再報告する。出土した遺物は、土器・陶器 20 点で、うち 4 点を図示した。

a. 土器・陶磁器（図 49、表 1）

13 は、土器で、外面に縦方向のハケ目がみられ、甲斐型土器甕の体部かと考えられる。14 は、瀬戸・美濃の鉄釉丸皿で、全面に鉄釉が施されている。高台は削り出し高台で、大窯 3 の前半段階とされる。16 は瀬戸・美濃の擂鉢で、錫釉が施される。古瀬戸後 IV 期段階～大窯段階とのとされる。15 は、駿東坏かと考えられるもので、軟質で緻密、明るい橙色の胎土で、底部内面に横ミガキが見られる。底部は回転糸切り痕がみられる。

（6）VI 区周辺出土遺物（図 50、表 1）

VI 区では、表土中より擂鉢 1 点が出土した他は、幕末から明治前半にかけての陶磁器（型紙染付、銅版染付他）碗・皿・鉢・瓶が表採されているのみである。平成 14 年度調査中、大日堂の北西隅に不用のブロック塀を埋めるための穴が空けられ、その際に、陶磁器が出土した。図 50 の陶磁器がそれで、VI 区の表採遺物より、やや古い年代観を示すため、参考資料として図示した。

a. 陶磁器（図 50、表 1）

1 は、瀬戸・美濃の磁器染付碗で、底部内面に、右半分は欠損しているため不明であるが、左半分に「年製」の銘、底部には印が見られる。19 世紀前半のものとされる。3 は瀬戸・美濃の磁器染付湯呑碗である。19 世紀後半のものとされる。2 は、京・信楽の灯明皿上皿で、灰釉が内面から口縁部外面に見られる。19 世紀のものとされる。

7. VII 区出土遺物（図 50、表 1、図版 16）

VII 区では、出土遺物はほとんど無かった。調査前に表採したもの 1 点である。

a. 陶器（図 50、表 1）

1 は、瀬戸・美濃の灯明皿上皿である。受けの高さが口縁部より低いもので、開口部は方形である。灰釉は、内面から口縁部外面にかけてみられる。19 世紀のものとされる。

表1 出土遺物観察表1 - 土器・陶器-

No.	出土区	地点	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	产地	釉薬・給付	生産年代	備考
41-1	I 区	I-14	陶器	灯明皿上皿	9.5	3.4	1.9	瀬戸・美濃	無釉、にごい褐色	19 c 後	残存1/4以下
41-2	I 区	表土中	陶器	灯明皿上皿	10.3	4.2	2.1	瀬戸・美濃	灰釉、灰オリーブ色	19 c 後	はり印、トランク用
41-3	I 区	I-14	陶器	灯明皿上皿	9.0	4.2	2.2	瀬戸・美濃	無釉、黄褐色	19 c	灰系、底部内面剥げ
41-4	I 区	-	陶器	灯明皿受皿	9.8	4.5	2.1	瀬戸・美濃	鐵釉、暗赤褐色	18 c ~ 19 c	残存1/2以下
41-5	I 区	I-13	陶器	漆利	-	(5.8)	-	瀬戸・美濃	灰釉、灰オリーブ色	18 c 後 ~ 19 c	口縁3/4欠け
41-6	I 区	I-13~I-14	磁器	香炉	10.8	4.2	4.8	肥前	青磁	17 c 後 ~ 18 c	口縁3/4欠け
41-7	I 区	H-14~H-14	磁器	花瓶	11.3	-	-	肥前	青磁	17 c 後 ~ 18 c	口縁3/4欠け
41-8	I 区	H-14	陶器	不明	-	-	-	-	-	-	小破片
41-9	I 区	表土中	土器	かわらけ	-	6.5	-	-	-	-	残存1/4以下
41-10	I 区	表探	土器	かわらけ	(7.3)	(4.0)	2.1	-	-	-	無釉、白系
46-1	II 区	表探	陶器	擂鉢	24.5	-	-	瀬戸・美濃	18 c 後半	口縁1/4以下	
46-2	II 区	M-7	陶器	縦條小皿	(10.8)	(4.6)	3.1	铁釉	15 c 中	腰引L/古瀬戸直隸	
46-3	II 区	表探	陶器	皿	11.7	6.4	2.1	瀬戸・美濃	長石繩、灰白色	17 c 前	小破片、水野内田
46-4	II 区	M-6	陶器	盤	-	-	-	常滑	13 c 後半 ~ 15 c	無釉、直隸	
46-5	II 区	L-6	土器	かわらけ	-	(4.8)	-	-	-	-	無釉、白系
46-6	II 区	M-8	土器	かわらけ	6.6	4.6	1.5	-	-	-	無釉、白系
46-7	II 区	L-6	土器	かわらけ	(7.0)	(5.8)	1.6	-	-	-	無釉L/古瀬戸直隸
46-8	II 区	表探	土器	かわらけ	-	7.0	-	-	-	-	残存底部1/4
46-9	II 区	表探	土器	かわらけ	-	6.4	-	-	-	-	底部1/4以下
46-10	II 区	L-6	土器	かわらけ	-	3.6	-	-	-	-	底部1/4以下
46-11	II 区	L-6	土器	かわらけ	-	3.6	-	-	-	-	底部1/3
46-12	II 区	表土中	土器	かわらけ	6.3	4.6	1.0	-	-	-	小破片
46-13	II 区	L-8	土器	かわらけ	8.0	-	-	-	-	-	小破片
46-14	II 区	L-6	土器	かわらけ	(6.4)	-	-	-	-	-	D型L/付属、小破片
46-15	II 区	L-6	土器	かわらけ	6.3	2.4	6.6	-	-	-	残存1/4以下
46-16	II 区	表探	瓦器	香炉	-	-	4.5	スタンプ文(三角)	-	-	-
47-1	III 区	満2	土師器	壺	12.5	-	-	-	-	平安	残存1/4以下
47-2	III 区	M-15~M-15	土師器	壺	11.6	-	-	-	-	平安	残存1/4以下
47-3	III 区	窓穴1	土師器	壺	12.0	-	-	-	-	平安	残存1/4以下
47-4	III 区	N-15	土師器	壺	12.3	-	-	-	-	平安	外面墨書き
47-5	III 区	N-15	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
47-6	III 区	窓穴1	土師器	壺	29.0	-	-	-	-	平安	猪口縁部1/4以下
47-7	III 区	表土中~満2	土師器	壺	(31.0)	-	-	-	-	平安	猪口縁部1/4以下
47-8	III 区	窓穴1~M-15	土師器	壺	(33.0)	-	-	-	-	平安	猪口縁部1/4以下
47-9	III 区	表土中	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
47-10	III 区	N-16	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
47-11	III 区	窓穴~ピット	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
47-12	III 区	M-15	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
47-13	III 区	窓穴1	土師器	壺	-	6.6	-	-	-	平安	残存底部1/4以下
47-14	III 区	ピット	土師器	壺	-	8.7	-	-	-	平安	残存底部1/4以下
47-15	III 区	N-15	土師器	壺	-	8.8	-	-	-	平安	残存底部1/4以下
47-16	III 区	窓穴1	土師器	小形壺	9.9	-	-	-	-	平安	残存底部1/4以下
47-17	III 区	窓穴~小~壺	土師器	小形壺	(10.0)	-	-	-	-	平安	残存底部1/4以下
47-18	III 区	N-15	猪口縁鉢	湯碗	-	-	-	二川窯	-	平安	-
47-19	III 区	M-15	灰釉陶器	碗	-	-	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	-
47-20	III 区	M-15	灰釉陶器	碗	-	-	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	-
47-21	III 区	表土中	灰釉陶器	碗	-	-	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	-
47-22	III 区	N-15	灰釉陶器	壺	6.1(腰注)	-	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	-
47-23	III 区	N-16~表土中	灰釉陶器	壺	-	(9.4)	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	残存底部1/4以下
47-24	III 区	窓穴1~N-15	灰釉陶器	壺	桂(腰注)	-	-	二川窯	灰釉、灰オリーブ色	平安	腰注部1/4以下
47-25	III 区	表探	天目茶碗	陶器	-	(2.3)	-	瀬戸・美濃	鐵釉、黒褐色	15 c 後半	無釉直隸1/4以下
49-1	IV 区	表土中	陶器	折縁深皿	-	-	-	瀬戸・美濃	灰釉、灰オリーブ色	15 c 後半	小破片、主に芦原吉右右
49-2	IV 区	P-9	陶器	丸皿	-	(6.0)	-	瀬戸・美濃	灰釉、灰オリーブ色	15 c 中	主に腰注部1/4、腰注1/2
49-3	IV 区	Q-8	陶器	丸皿	-	-	-	瀬戸・美濃	灰釉、灰白色	17 c 後半	志野丸皿
49-4	IV 区	-	磁器	碗	-	(4.3)	-	肥前	染付	19 c 前	残存底部1/3
49-5	IV 区	Q-9	陶器	擂鉢	-	-	-	瀬戸・美濃	鐵釉、黒褐色	15 c 後半	古瀬戸後背IV新
49-6	IV 区	P-9	陶器	擂鉢	-	-	-	瀬戸・美濃	鐵釉、黒褐色	15 c 後半	古瀬戸後背IV
49-7	IV 区	P-10	土器	かわらけ	-	(4.8)	-	-	-	-	腰注部1/4以下 片付
49-8	IV 区	P-10	土器	かわらけ	-	-	-	-	-	-	-
49-9	IV 区	N-10	土器	かわらけ	(9.8)	5.0	1.8	-	-	-	残存1/4
49-10	IV 区	N-10	土器	かわらけ	-	5.0	-	-	-	-	残存底部2/3
49-11	IV 区	P-9	土器	かわらけ	-	(5.3)	-	-	-	-	残存底部1/4
49-13	V 区	Q-13	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	-
49-14	V 区	R-11	陶器	丸皿	-	-	2.7	瀬戸・美濃	鐵釉、暗赤褐色	15 c 後半	残存1/4以下、大皿1枚
49-15	V 区	Q-14	土師器	壺	-	-	-	-	-	平安	残存底部1/3
49-16	V 区	R-11	陶器	擂鉢	-	-	-	瀬戸・美濃	鐵釉、黒褐色	15 c 後半~16 c	主に芦原吉右右
50-1	VI 区	H-10	磁器	碗	-	(4.2)	-	瀬戸・美濃	染付	19 c 前	無釉直隸1/4
50-2	VI 区	表探	陶器	灯明皿	10.7	4.5	2.0	京・信楽	灰釉、灰色	19 c	残存1/4以下
50-3	VI 区	H-10	磁器	湯呑碗	-	(3.6)	-	瀬戸・美濃	染付	19 c 後	残存底部2/3
50-4	VII 区	表探	陶器	灯明皿受皿	9.9	4.3	1.9	瀬戸・美濃	灰釉、青灰色	19 c	元形

表2 出土遺物觀察表2 一石製品

図-No.	出土区	地点	名称	石材	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	年代	備考
42-85	I 区	表土中	砥石	凝灰石	13.3	3.3	2.3	—	
48-32	II 区	堅穴住居1	砥石	綠色凝灰石	28.4	5.9	3.8	平安	

表3 出土遺物觀察表3 一金属製品(釘)一

図-No.	出土区	地点	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	重さ(g)	備考
41-11	I 区	I-13	和釘	鉄	(2.5)	0.6	5.2	先端部欠損
41-12	I 区	表探	和釘	鉄	(5.7)	0.5	7.3	先端部欠損
41-13	I 区	I-13	和釘	鉄	(4.4)	0.4	1.9	両端部欠損
41-14	I 区	I-13	和釘	鉄	(5.0)	0.45	2.1	先端部欠損
41-15	I 区	I-13	和釘	鉄	(4.7)	0.5	3.7	先端部欠損
41-16	I 区	H-14	和釘	鉄	(4.0)	0.7	4.4	両端部欠損
41-17	I 区	H-14	和釘	鉄	(6.6)	0.7	13.1	両端部欠損
41-18	I 区	H-14	和釘	鉄	(5.2)	0.6	6.85	頭部欠損
41-19	I 区	I-13	和釘か	鉄	(3.7)	0.8	3.65	欠損,ねじれ
41-20	I 区	I-13	和釘	鉄	(4.2)	4.5	1.7	両端部欠損
41-21	I 区	I-13	和釘	鉄	(4.0)	0.3	1.1	両端部欠損
41-22	I 区	表探	和釘	鉄	(2.6)	0.5	1.2	頭部欠損
41-23	I 区	I-13	和釘	鉄	(3.8)	0.2	1.35	頭部欠損
41-24	I 区	I-13	和釘	鉄	(3.1)	3.5	1.05	頭部欠損
46-17	II 区	L-6	和釘	鉄	(3.3)	0.5	2.5	頭部欠損
46-18	II 区	M-8	和釘	鉄	(4.0)	0.5	12.0	両端部欠損
46-19	II 区	L-6	和釘	鉄	(5.8)	0.5	4.9	両端部欠損
46-20	II 区	L-6	和釘	鉄	(3.3)	0.5	1.7	頭部欠損
46-21	II 区	L-5	不明	鉄	(1.5)	0.5	0.95	両端部欠損
48-26	III 区	M-15	和釘	鉄	(2.8)	0.7	7.15	先端部欠損
48-27	III 区	N-16	和釘	鉄	(2.6)	0.6	2.7	両端部欠損
48-28	III 区	N-16	和釘	鉄	(3.9)	0.8	7.15	頭部欠損

表4 出土遺物觀察表4 一金属製品(管)一

図-No.	出土区	地点	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	火皿径	重さ(g)	備考
41-25	I 区	I-14	煙管(端子)	銅合金(真鍮か)	4.6	1.0	1.8	5.05	

表5 出土遺物觀察表5 一金属製品(錢貨)一

図-No.	出土区	地点	錢貨名	国名	初鑄年	材質	外径(cm)	穿孔(cm)	重さ(g)	備考
43-26	I 区	I-13	洪武通寶	明	1368	銅	2.37	0.58	3.5	3枚発着
43-27	I 区	I-13	元豐通寶	北宋	1078	銅	2.38	0.68	3.0	3枚発着
43-28	I 区	I-13	熙寧元寶	北宋	1068	銅	2.42	0.67	2.95	3枚発着
43-29	I 区	H-13	元祐通寶	北宋	1086	銅	2.45	0.68	2.8	2枚発着
43-30	I 区	H-13	—	—	—	銅	2.28	0.68	1.2	
43-31	I 区	I-14	寛永通寶	日本	1741	銅	2.21	0.63	1.3	新寛永、背足
43-32	I 区	I-14	(寛永通寶)	日本	1739	銅	2.54	0.54	3.5	新寛永、口承□□
43-33	I 区	表探	元祐通寶	北宋	1086	銅	2.45	0.66	1.8	
43-34	I 区	I-13	熙寧元寶	北宋	1068	銅	2.45	0.63	2.05	
43-35	I 区	I-13	皇宋通寶	北宋	1038	銅	2.39	0.86	(1.4)	皇宋通寶、1/4次
43-36	I 区	I-14	—	—	—	銅	2.45	0.56	4.75	2枚発着
43-37	I 区	I-14	—	—	—	銅	2.26	0.64		一枚背足、一枚腰邊造む
43-38	I 区	I-13	洪武通寶	明	1368	銅	2.30	0.55	2.3	
43-39	I 区	I-13	紹聖元宝	北宋	1094	銅	2.37	0.64	(1.8)	紹聖元宝、1/4次
44-40	I 区	I-13	寛永通寶	日本	1658	銅	2.52	0.61	2.6	新寛永、背文
44-40	I 区	H-13	至道元寶	北宋	995	銅	2.48	0.60	2.3	5枚発着
44-41	I 区	H-13	(至道元寶)	北宋	1068	銅	2.34	0.57	3.25	5枚発着
44-42	I 区	H-13	至道元寶	北宋	995	銅	2.48	0.62	3.1	5枚発着
44-43	I 区	H-13	聖宋元宝	北宋	1101	銅	2.46	0.64	3.65	5枚発着
44-44	I 区	H-13	咸平元寶	北宋	998	銅	2.47	0.57	2.9	5枚発着
44-45	I 区	H-13	皇宋通寶	北宋	1038	銅	2.31	0.69	2.0	
44-46	I 区	H-14	—	—	—	銅	(2.22)	0.64	(0.95)	周囲欠け
44-47	I 区	I-18	政和通寶	北宋	1111	銅	2.31	0.61	2.15	
44-48	I 区	H-13	(至道通寶)	北宋	1054	銅	2.39	0.69	2.25	3枚発着
44-49	I 区	H-13	元豐通寶	北宋	1078	銅	2.47	0.71	3.35	3枚発着
44-50	I 区	H-13	皇宋通寶	北宋	1038	銅	2.40	0.66	1.9	3枚発着
44-51	I 区	I-13	永樂通寶	明	1408	銅	2.49	0.59	2.45	
44-52	I 区	H-13	寛永通寶	日本	1636	銅	2.35	0.57	2.6	古寛永
44-53	I 区	H-13	(皇宋通寶)	北宋	1038	銅	2.24	0.49	(1.3)	皇宋通寶、1/4次
44-54	I 区	表探	寛永通寶	日本	1636	銅	2.26	0.57	2.85	古寛永
44-55	I 区	表探	(祥符通寶)	北宋	1008	銅	2.28	0.67	1.3	祥符通寶、1/4次
45-56	I 区	Tr1 盆土中	祥符元寶	北宋	1008	銅	2.38	0.60	2.2	
45-57	I 区	Tr1 盆土中	—	—	—	銅	(2.34)	(0.59)	(0.95)	元祐通寶、1/2次
45-58	I 区	Tr1 盆土中	永業通寶	明	1408	銅	2.51	0.56	3.65	3枚発着
45-59	I 区	Tr1 盆土中	元祐通寶	北宋	1086	銅	2.43	0.60	3.75	3枚発着

45-60	I 区	Tr1 鹽土中	紹聖通寶 北宋	1094	銅	2.33	0.66	2.45	3枚癡著
46-22	II 区	表採	元豐通寶 北宋	1078	銅	2.19	0.66	1.4	
46-23	II 区	表採	永祐通寶 明	1408	銅	2.51	0.54	1.75	
46-24	II 区	L-6	元祐通寶 北宋	1078	銅	(2.30)	0.67	1.75	
46-25	II 区	L-7	洪武通寶 明	1368	銅	2.28	0.61	2.1	口通寶、1/4枚
46-26	II 区	L-6	永祐通寶 明	1408	銅	2.48(横)	(0.55(裏))	1.2	
46-27	II 区	L-6	天聖元寶 北宋	1023	銅	2.50	0.70	2.1	
46-28	II 区	M-6	寛永通寶 日本	1636	銅	2.46	0.54	2.9	古寛永
48-31	III 区	N-15	鳥居アルミ紐 日本	1939	アルミニウム	1.75(横)	—	0.8	昭和貨幣、昭和1年
49-12	IV 区	N-9	政和通寶 北宋	1111	銅	(2.27)	0.68	1.55	

表6 出土遺物觀察表6 一写経石一

図-No.	出土区	地点	石材	文字	文字数	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
45-61	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	生	1	3.6	2.2	0.7	9.3	
45-62	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	此	1	3.3	2.2	0.6	6.5	
45-63	I 区	Tr2	頁岩	申	1	3.2	2.5	0.7	9.2	
45-64	I 区	Tr2	砂岩	通	1	2.1	2.4	0.9	7.2	
45-65	I 区	Tr2	砂岩	幾(?)	1	3.9	2.1	0.9	10.8	
45-66	I 区	Tr2	頁岩	僕(?)	1	3.5	1.8	0.9	7.9	
45-67	I 区	Tr2	砂岩	佛	1	4.0	1.9	0.9	9.9	
45-68	I 区	Tr2	頁岩	?	1	3.0	2.4	1.3	12.0	
45-69	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	現	1	2.7	1.9	0.5	4.3	
45-70	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	於	1	3.8	2.1	0.8	7.95	
45-71	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	?	1	2.5	2.2	0.7	6.1	
45-72	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	?	1	3.4	3.0	1.5	21.7	
45-73	I 区	Tr2	砂岩or泥岩	?	1	2.8	2.4	0.8	7.7	
45-74	I 区	Tr1	砂岩	無	1	3.1	2.3	1.1(0.8)	10.9	
45-75	I 区	Tr1	頁岩	?	1	2.8	2.0	0.8	6.2	
45-76	I 区	Tr1	砂岩	所	1	4.2	3.5	1.1	20.3	
45-77	I 区	Tr1	砂岩	?	1	3.1	2.3	1.3	9.9	
45-78	I 区	Tr2	頁岩	土(?)	1	2.2	1.7	0.5	2.25	
45-79	I 区	Tr1	頁岩	微	1	4.1	2.5	0.7	12.4	
45-80	I 区	H-13	頁石	於	1	3.6	2.5	0.4	6.2	
45-81	I 区	I-13	砂岩	亦	1	5.1	1.9	0.7	8.45	
45-82	I 区	I-13	砂岩	如	1	4.7	4.0	0.9	24.9	
45-83	I 区	H-14	頁岩	法	1	3.8	3.1	0.6	10.25	
45-84	I 区	集石土坑2	砂岩	天	1	3.6	2.1	0.8	9.8	

表7 出土遺物觀察表7 一その他一

図-No.	出土区	地点	名称	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	備考
48-29	III 区	K-18	転用品	7.5	7.7	1.5	瓦転用品か
48-30	III 区	K-15		5.2	3.7	1.5	瓦片か

第 IV 章 分布調査

1. 分布調査範囲（図 51・52）

村山浅間神社は、富士登山の起点として機能していたと考えられ、周辺には宿坊が点在していたとされる。村山浅間神社周辺の集落は、国道 469 号線の改良工事によって、南端に地形の改変が見られる以外は、大規模な開発は行われておらず、当時の景観をよく残していると考えられた。

そのため、現況の畠地、宅地、道路、谷部といった現状の区画をもとに、下に示した絵図（図 51）などの資料を加味して、村山浅間神社周辺の分布調査を行った。地点は、図 52 に示した。絵図と現況の地図とで、それぞれの地点を関連付けることも可能かと思われる。

2. 調査の方法

調査は、宅地、畠地、丘陵すべてを対象にしたが、現代の造成の著しい地点、牧草地や果樹園として使用され、遺物が表記されなかつ箇所は、地点として記していない。地点の区分は、重複を避けるため、調査員ごとに枝番をつけて整理した。

3. 調査の内容（図 53）

調査地点は、A 地区 36 地点、B 地区 6 地点、D 地区 16 地点、合計 58 地点である。C 地区は、集落外を広範囲で調査した地区で、道祖神や山神社などを確認している。およそ、A 地点は、集落を南北に分ける道路の南側、B 地区は、道路の北側で集落の中央付近、D 地区は、道路の北側で集落の東側である。

図 51 は、天保 3 年（1832）に記された、「山内屋敷分配并略譜蝶」（『大鏡坊文書』）の中の絵図であるが、この文書には、大鏡坊、池西坊、辻之坊といった、村山修驗のなかで中心的な役割を

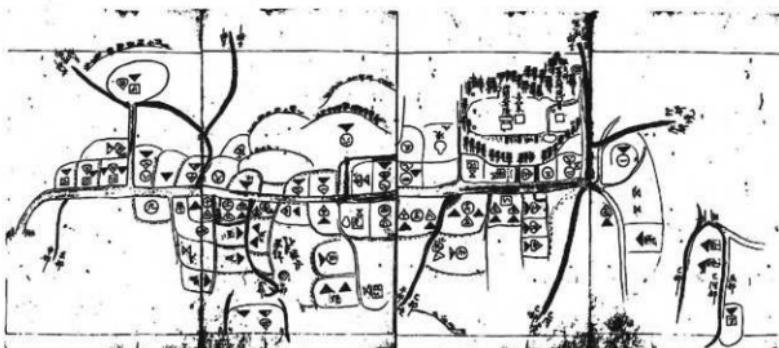


図 51 「山内屋敷分配并略譜蝶」（一部）天保 3 年（1832）



図 52 分布調査周辺地形図

60

0 500m 1000m 1500m 2000m

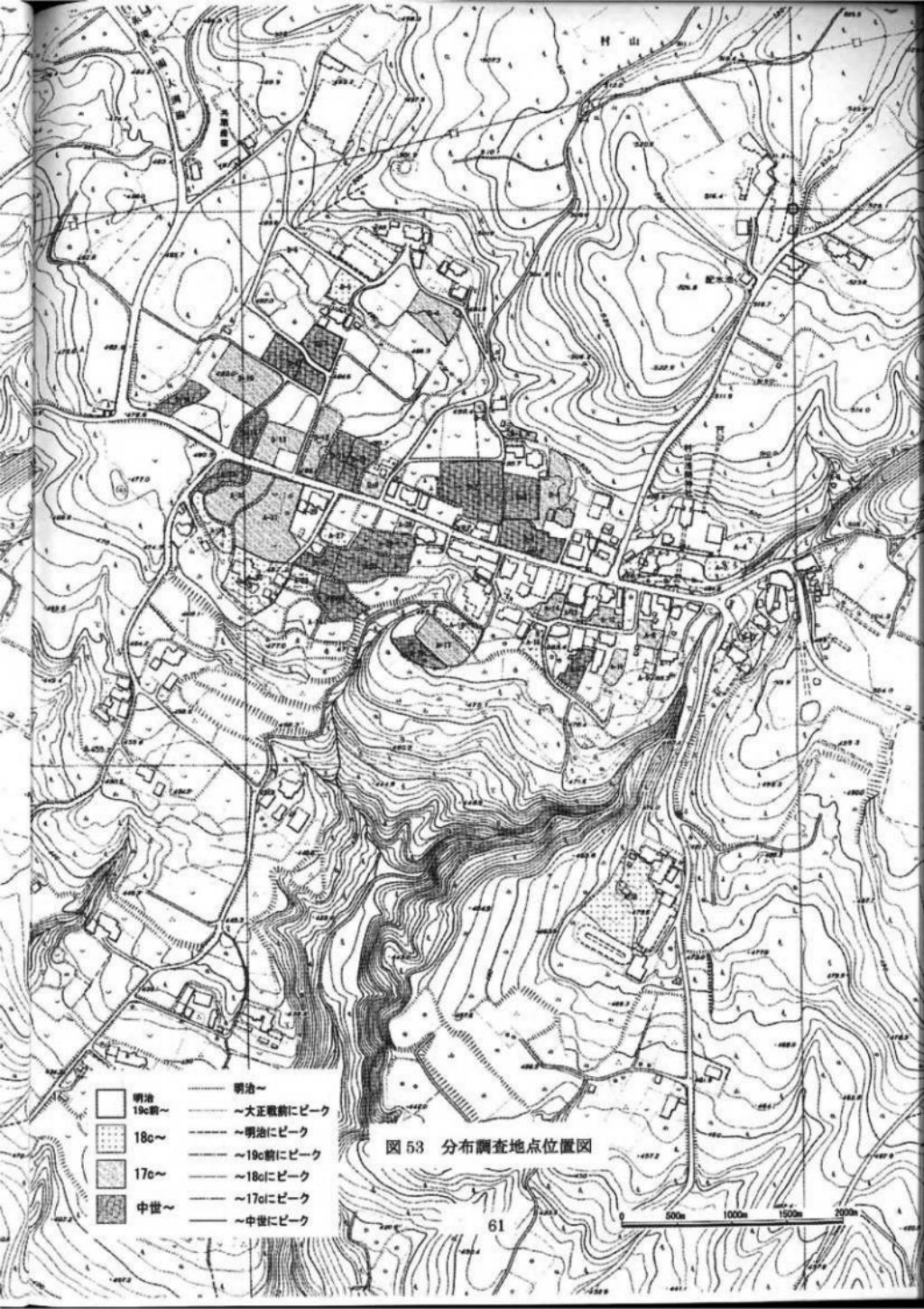


図 53 分布調査地点位置図

果たしたと考えられている三坊のほか、蓮如坊、長坊、三如坊、峯之坊、大貳坊、泉養坊、阿伽井坊、中尾坊、吉原坊、原田坊、清水坊などの坊院と、三坊の家老などの系譜が記されている文書で、山内を、天文年間（1532—1555）と、慶長年間（1596—1615）に分配した際に、どの坊院がどの区画に居住していたか、またその後どのように、居住者が変化していたかを、絵図に記してある。図51中に見える区画の中の印は、その略号である。それを追っていくと、大鏡坊、池西坊、辻之坊といった三坊は、居住を変える回数が少ない傾向があり、そのほかは居住を変える回数が多く、断絶したりすることもあったようである。

4. 分布調査表採遺物（図54～57、表8）

表採遺物は、総数1254点である。そのうち分類可能なものの786点であった。そのほとんどが陶磁器で、中世～近現代までのものである。産地は、瀬戸・美濃、肥前、志戸呂、常滑、肥前、初山、堺・明石、京・信楽といった国産陶磁器の他、かわらけ、輸入陶磁器も含まれる。器種は、碗、皿、鉢、小壺、花瓶、徳利、香炉、播鉢、土瓶、灯明皿などである。（各図右隅は、地点番号）

a. 瀬戸・美濃陶磁器

碗（1～4、30～35） 1は、碗の底部で、高台の内側を削り出し、内傾する内反り高台かと考えられるもので、底部外面は、露胎である。底部中央の器壁が薄くなっている。釉薬は鉄釉で、光沢は強いが透明度が無く、赤褐色である。16世紀後17世紀前葉のものとされる。3は、碗の底部で、高台は、付け高台で露胎である。釉薬は鉄釉で、光沢が強く透明度がある、黒褐色である。17世紀前葉～中葉のものとされる。2は、付け高台の小ぶりの灰釉碗で、露胎である。18世紀のものとされる。4は、高台の外面と内面を面取りして先端を尖らせているもので、高台外面の釉薬を剥ぎ取っているようである。18世紀のものとされる。30は、長石釉のかかる碗で、体部に鉄絵があり、御室茶碗である。18世紀のものとされる。31は、太白手の碗で、見込み文がある。32は、体部下半で折れ曲がり、外面に鉄釉、内面に灰釉がかけられている腰錦茶碗である。18世紀のものとされる。33～35は、磁器の碗で、34には見込みに線刻文があり、35には見込み文、高台内に銘款がある。

皿（5～13、16、36～37） 5は、皿の底部で、削り出し高台かと考えられる。高台の断面は方形、高さは非常に低い。内面には灰釉、外面は露胎である。16世紀のものとされる。6は、皿の口縁部から体部で、体部下半はヘラ削り調整され、体部中ほどから口縁部に向かって斜めに立ち上がる。内面から口縁外面かけて黄褐色の灰釉がかかる。7～13、36～37は、長石釉のかかる志野皿である。全て削り出し高台で、8と12、37は、高台外面にも削りが入る。10の口縁端部はやや外反している。12の底面外面の釉薬は拭い取られている。17世紀前半のものとされる。13は、口縁内面に稜があり、口縁が内湾するもので、長石釉（灰釉？）が内面から口縁外面にかけられている。36～37は、鉄絵の志野皿で、37の口縁は面取りしている。17世紀前半のものとされる。16は、瀬戸・美濃系と考えられる灰釉の皿で、体部下半はヘラ削り調整され、全面に灰釉がかかる。口縁部直下に一条筋が入っている。年代は不明である。

小壺（58） 高台がハの字に開くもので、内外面とも染付などの文様が見られない。

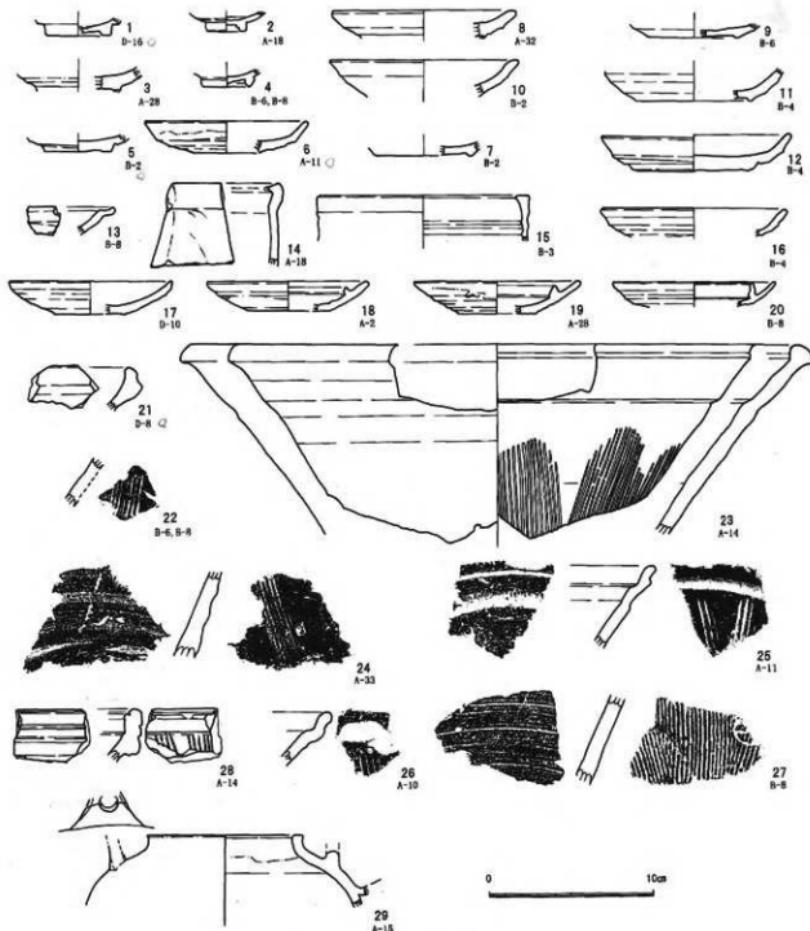


図 54 分布調査採陶磁器 1

香炉（14・15） 14・15とも筒型香炉で、14は、口縁部がやや外側に膨らみながら内側に張り出するもので、そのため外面に稜がみられる。内外面とも一面に灰釉がかかっている。15は、口縁部が内側に張り出し、鉄軸系（船軸？）の釉薬がかかっている。

灯明皿（17～20） 17は、受けを持たない灯明皿上皿で、口縁端部がやや内傾する。底部に重ね焼痕がみられる。18世紀末～19世紀中頃のものとされる。18～20は、受けを持つ灯明皿受け皿で、18は、18世紀末～19世紀のものとされる。19は、19世紀前～中頃のものとされる。20は、18

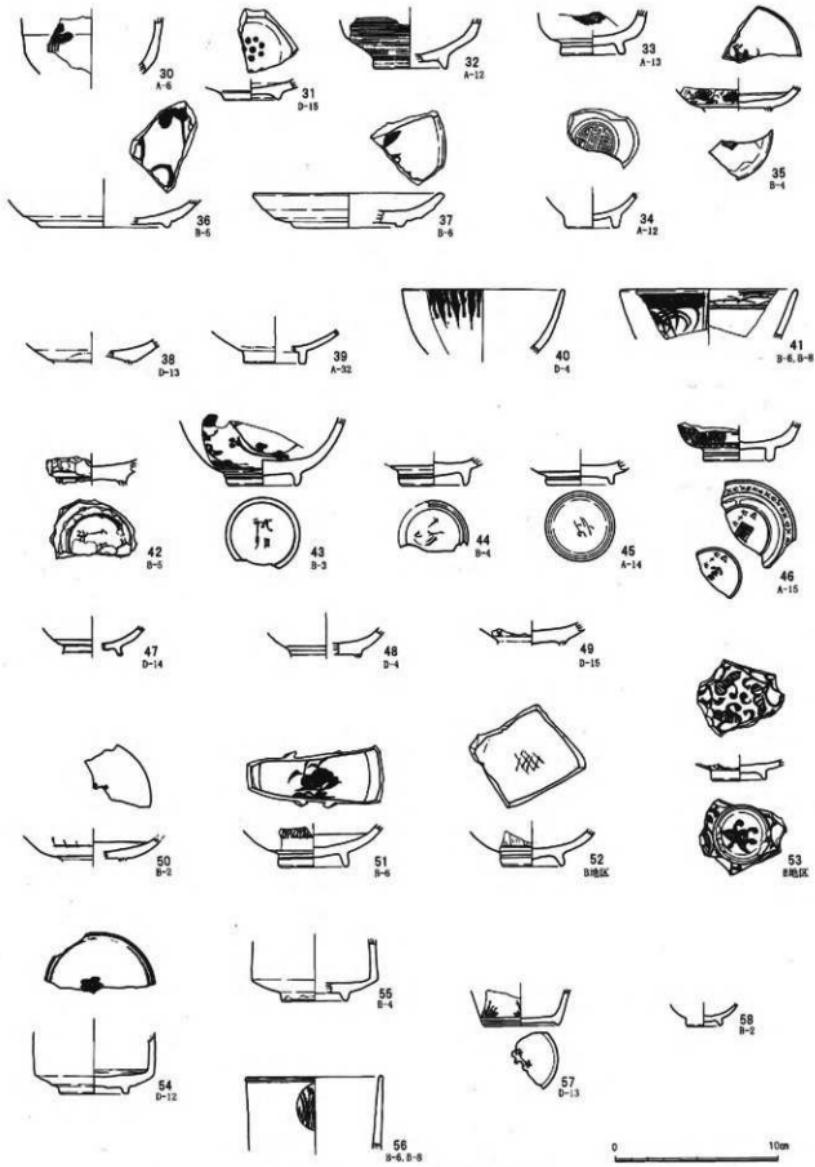


図 55 分布調査表採陶器 2

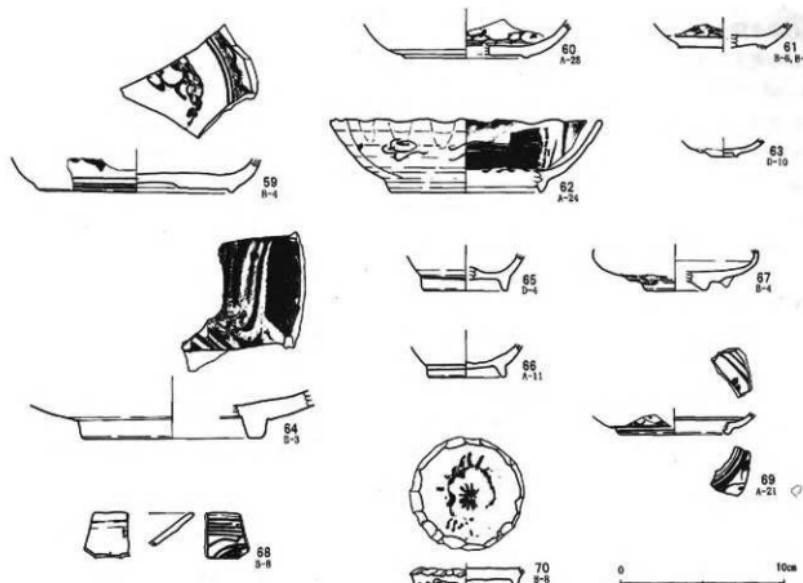


図 56 分布調査表採陶磁器 3

世紀後～19世紀前のものとされる。すべて柿軸がかかる。

擂鉢 (21～27) 21～24は、大窯段階の擂鉢で、21は口縁端部外面がやや抑えられている。鋸軸が施されている。22は、古瀬戸IV期～大窯段階の擂鉢である。鋸軸が施されている。23～25～27は連房式期の擂鉢で、25・26は口縁部内面に稜を持つ擂鉢I類で、25は18世紀前半、26は18世紀のものとされる。23は口縁部が外内両側に張り出すようになるもので18世紀後半、27は内面に刻印があり、18世紀後半とされる。

b. 肥前陶磁器 (38～57、59～67)

碗 (38～57) 39は、京焼風陶器で、高台は断面方形、底部は露胎である。17世紀後半～18世紀前半のものとされる。40は、雨降り文で、18世紀のものとされる。41は草花文が描かれ、18世紀末～19世紀中頃のものとされる。42・43はくらわんか碗で18世紀前～後のものとされる。42は、底部が意図的に破壊されている可能性がある。46は18世紀中～後のものとされ、文様の種類はわからない。42～46は高台内に銘があるが、文字は判読できない。46は、銘に加えて、「七十七」、「△」、「舍」と朱書で上書きされており、焼継ぎ印かと考えられる。表採資料中ではこの1点のみであった。47～52は、底部である。42～49には見込み文、高台内に銘款はない。50～52には見込み文があり、51は草花文、52は幾何学文が描かれている。47～49は18世紀のもの、50は小丸碗で18世紀後葉～19世紀前葉、51・52は19世紀前～中とされる。53は、内外面に唐草文かと考え

られる文様、高台内も、内面の唐草文と同じ意匠かと考えられる文様が上絵付けされている。54・55は筒型碗で、54は見込み文は簡略化された五弁の花かと考えられる。18世紀後半～19世紀初のもの、55は18世紀後半とされる。56は碗で、口縁部は鉄鋸、体部外面に丸文の中に草花文が描かれている。呉須が黒色に近い色調に発色している。18世紀末～19世紀中頃とされる。57は猪口で、高台内に銘があるが、文字は不明である。18世紀のものとされる。

皿(59～62) 59、60は、蛇の目凹形高台で、

19世紀前～中頃のものとされる。59は見込みに松文が見られ、60は、内面に亀甲文が見られる。61は、呉須が黒色に近い色調に発色している。描かれている文様は不明である。62は、口縁が波状になるもので、描かれた文様は不明である。裏文様がある。

鉢(64) 64は、陶器の刷毛目鉢で、高台は逆台形、底部は露胎である。灰釉の地に白泥による刷毛目が描かれる。17世紀末～18世紀前半のものとされる。

瓶(65・66) 65は、高台はやや内傾し、絵付けは赤土上絵付である。66は、高台がハの字に開く。いずれも、17世紀後半のものとされる。

香炉(67) 青磁香炉である。足は退化して高台より上に付けられている。高台は削り出し高台で、内面と底面は露胎している。また、体部内側も無釉で、底部内面には砂目が一面に残存している。18世紀後半～19世紀前半とされる。

紅皿(68) 63は、透明釉がかかり、高台は露胎している。19世紀前～中とされる。紅皿は、63の1点のみである。

その他の産地の陶磁器(28・29、71～74) 28は堺・明石の播鉢で、18世紀後半のものとされる。29は、産地不明の鉄釉のかかる土瓶で、19世紀のものとされる。71・72は、常滑の壺・甕で、16世紀のものと考えられる。73は、初山の皿で16世紀後半、74は、備前の徳利で、体部に七福神の布袋が取り付けられている。18～19世紀のものとされる。

中国陶磁器(68・69) 68は、中国の漳州窯の染付皿で、17世紀前半のものとされる。69は景德鎮窯の皿で、16世紀末～17世紀初めのものとされる。

再調整痕のある陶器(70) 70は、18世紀中～後の摺絵の皿の底部とされるが、周囲を打ち欠いた形跡がみられる。

5. 分布調査の成果

分布調査では、村山浅間神社周辺の集落の広がりが、現在の居住域よりも広く、およそ絵図に描かれた範囲であることが確認された。遺物の年代は、中世から近現代までの幅があり、特に明治時代の遺物は多く採集された（中世1%、16～19世紀前5.2%、19世紀後半～20世紀初頭26.7%、20世紀初頭～20世紀半ば20.4%）。中世の遺物は、器種では、圧倒的に碗類が多く、52%と半分

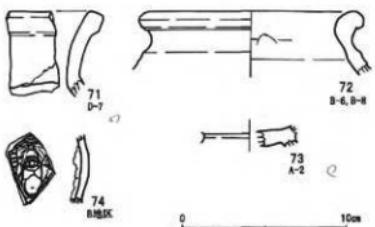


図57 分布調査表採陶磁器4

以上を占める。ついで皿 18.5%、擂鉢 4.4%と続き、日常什器が主要器種を占める。そのほかは、香炉 2.6%、鉢 2.7%と一定量表採される。地点別には、平均 19.3 点のところ、A-28 地点 58 点、A-32 地点 66 点、B-4 地点 60 点、B-3 地点 92 点、B-6 地点 110 点、D-10 地点 121 点と、点数が多く採集される地点がある。絵図との比較では、大鏡坊は、B-2, 3, 4, 6, 8 地点に、池西坊は A-11, 12, 13 地点に、辻之坊は、D-5, 6, 7 地点と考えられるが、池西坊や辻之坊に比定される地点では、現在宅地となっていることに起因する可能性もある。大鏡坊は、居住を移動していないので、B 地点の表採内容は、大鏡坊の内容を示していると考えられる。

図 53 は、表採遺物の年代と、最も多く表採された時期とを組み合わせた図である。表採遺物の時期が、中世で始まり、中世で終わる地点は A-23 地点、近世で終わる地点は、A-6 地点、A-17 地点、A-20 地点、A-21 地点、A-30 地点である。明治までで終わる地点は、A-2 地点、A-5 地点、A-18 地点、A-27 地点、A-34 地点、B-8 地点、D-1 地点、D-8 地点で、他の地点は、大正～戰前までの遺物が表記されている。注目されるのは、集落全体に、中世の遺物が表採されていることである。そして、ほとんどの地点で、17 世紀の遺物が表採されている。村山浅間神社境内での調査では、境内西側の平坦面である II 区、IV 区では、中世の遺物が出土し、中世に構築された平坦面である可能性が高いが、境内と集落とは、やはり中世のある時点からは並存していたと考えられる。

遺物の質でみると、威信財ともいえる輸入陶磁器を保有していたのは、B-8 地点と A-21 地点である。B-8 地点は大鏡坊との関連が想定される地点であるが、A-21 地点は、三坊とは関連が薄く、普賢坊との関連が考えられる地点である。

近世に入ると、村山修驗は衰退の道をたどるようになり、三坊以外は衰えていくと考えられてきた。しかし、碗、皿、擂鉢といった日常什器の表採からは、近世に入ってもなお、活発な生活の痕跡を窺うことができる。また、子供の玩具類や、女性の化粧道具などの点数が少なく（註 1）、この遺跡の性格を物語るものと考えられる。

註 1. 堀内氏教示による。

表8 分布調査収集遺物観察表1

回一No.	地名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	产地	地質・鉱物	生産年代	備考
54-1	D-16	陶器	罐	—	3.8	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c後~17c前後	残存底部1/3
54-2	A-18	陶器	碗	—	2.4	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	18c	
54-3	A-28	陶器	碗	—	—	瀬戸・美濃	鐵鑄、黒褐色	17c前~中	残存底部1/4以下	
54-4	B-6, 8	陶器	碗	—	2.9	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	18c	
54-5	B-2	陶器	皿	—	4.1	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	18c	
54-6	A-11	陶器	縦縞小皿	(10.0)	(4.1)	(2.0)	瀬戸・美濃	灰陶、明黄褐色	16c	
54-7	B-2	陶器	丸皿	—	5.8	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	残存底部1/4以下。小破片。志野皿
54-8	A-32	陶器	丸皿	—	—	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	小破片。志野皿
54-9	B-6	陶器	皿	—	5.4	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	残存底部1/4。志野皿
54-10	B-2	陶器	丸皿	11.4	—	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	
54-11	B-4	陶器	丸皿	—	7.0	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	小破片。志野皿
54-12	B-4	陶器	丸皿	11.5	7.4	2.3	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	小破片。志野皿
54-13	B-3	陶器	丸皿	—	—	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	残存1/4。志野皿
54-14	A-18	陶器	炉	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、深青色	17c	志野皿
54-15	B-3	陶器	炉	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、深青色	17c	
54-16	B-4	陶器	皿	11.2	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	17c後	残存口縁部1/4以下
54-17	D-10	陶器	灯明皿上皿	9.7	4.4	2.0	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c末~19c中	小破片
54-18	A-2	陶器	灯明皿	9.6	5.0	1.8	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c末~19c	残存1/4以下
54-19	A-28	陶器	灯明皿	10.0	4.8	2.0	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	19c前~中	
54-20	B-8	陶器	灯明皿	9.8	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c後~19c前半	残存1/4以下
54-21	D-8	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	16c	
54-22	B-6, 8	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、黒褐色	15c後~16c前	古瀬戸後山窯~大窯
54-23	A-14	陶器	杯	(36.6)	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c後	残存1/4以下
54-24	A-33	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、黒褐色	18c	
54-25	A-11	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c前	
54-26	A-10	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c	
54-27	B-8	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c後半	刻印大
54-28	A-14	陶器	杯	—	—	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗赤褐色	18c後	
54-29	A-15	陶器	土瓶	(9.5)	—	—	不明	灰陶、黑色	19c	残存1/4以下
55-30	A-6	陶器	瓶	—	—	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	18c	小破片。板條、脚窓茶碗
55-31	D-15	陶器	太白手鏡	—	(3.2)	—	瀬戸・美濃	灰陶、淡青色	18c後~19c前	残存底部1/4。見込み文
55-32	A-12	陶器	碗	—	(4.4)	—	瀬戸・美濃	灰陶、暗褐色	18c	底部残存1/4以下。
55-33	A-13	磁器	碗	—	(3.6)	—	瀬戸・美濃	染付	19c中	残存底部1/4以下。見込み文
55-34	A-12	磁器	碗	—	(3.2)	—	瀬戸・美濃	染付	19c中	残存底部1/3
55-35	B-4	磁器	噴反鏡	—	—	—	瀬戸・美濃	染付	19c前~中	残存底部1/4以下
55-36	B-5	磁器	鉄鉢皿	—	(7.8)	—	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	残存底部1/4以下。小破片。見込み文。鉄鉢
55-37	B-	磁器	鉄鉢皿	(11.5)	(6.7)	(2.1)	瀬戸・美濃	長石陶、灰白色	17c前	小破片
55-38	D-13	磁器	碗	—	—	—	肥前	灰陶、淡青色	17c後~18c中	小破片
55-39	A-32	磁器	碗	—	(3.7)	—	肥前	灰陶、淡青色	17c後~18c前半	小破片。東北風呂蓋
55-40	D-4	磁器	碗	(9.8)	—	—	肥前	染付	18c	残存1/4以下
55-41	B-6, 8	磁器	碗	—	—	—	肥前	染付	18c末~19c中	残存底部1/4以下。底部に圓形の破損?
55-42	B-5	磁器	碗	—	—	—	肥前	—	17c後半	残存底部1/2。底盤圓形の破損?
55-43	B-3	磁器	くわんわん柄	—	4.2	—	肥前	—	18c前~後	高台内窓。大口口
55-44	B-4	磁器	くわんわん柄	—	4.2	—	肥前	—	18c前~後	残存底部1/2。高台内窓
55-45	A-14	磁器	瓶	—	(4.0)	—	肥前	—	18c中~後	高台内窓。高足文付
55-46	A-15	磁器	瓶	—	(4.0)	—	肥前	—	19c前~中	残存底部1/2。高足文付。左側面に「吉田家」、右側面に「吉田家」、左側面に「吉田家」、右側面に「吉田家」、左側面に「吉田家」、右側面に「吉田家」
55-47	D-14	磁器	瓶	—	—	—	肥前	—	18c	残存底部1/4以下
55-48	D-4	磁器	瓶	—	—	—	肥前	—	18c	残存底部1/4以下
55-49	D-15	磁器	瓶	—	—	—	肥前	—	18c	残存底部1/4以下
55-50	B-2	磁器	小丸瓶	—	—	—	肥前	—	18c後~19cの裏	残存底部1/4以下
55-51	B-6	磁器	瓶	—	4.2	—	肥前	—	18c前~中	残存底部2/3
55-52	B地区	磁器	瓶	—	3.6	—	肥前	—	19c前~中	高台内窓。高足文付
55-53	B地区	磁器	瓶	—	3.4	—	肥前	赤土附	19c前~中	
55-54	D-12	磁器	筒型腰瓶	—	(4.2)	—	肥前	長石陶	18c後~19c初	残存底部1/2
55-55	B-4	磁器	筒型腰瓶	—	(4.0)	—	肥前	—	18c後半	残存1/4以下
55-56	B-8, 8	磁器	腰瓶	(8.4)	—	—	肥前	—	18c末~19c中	残存底部1/4以下
55-57	D-13	磁器	噴口瓶	—	(4.5)	—	肥前	—	18c	残存底部1/3。高台内窓
55-58	B-2	磁器	小环瓶	—	2.0	—	瀬戸・美濃	19c前~中	残存底部1/2	
55-59	B-4	磁器	瓶	—	(11.6)	—	肥前	—	18c末~19c初	残存1/4以下。蛇口回形高台
55-60	A-24	磁器	瓶	—	(7.4)	—	肥前	染付	19c前~中	小破片。蛇口回形高台
55-61	B-6, 8	磁器	瓶	—	—	—	肥前	染付	18c末~19c中	
55-62	A-24	磁器	瓶	(16.4)	(9.1)	(4.4)	肥前	染付	19c前~中	残存1/4以下
55-63	D-10	磁器	紅皿	—	(1.6)	—	瀬戸・美濃	透明釉	19c前~中	
55-64	B-3	陶器	刷毛目鉢	—	(11.0)	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	17c末~18c前	残存底部1/4以下
55-65	D-4	陶器	鉢	—	(5.2)	—	瀬戸・美濃	赤土附	17c後半	残存底部1/3
55-66	A-11	陶器	鉢	—	(4.6)	—	瀬戸・美濃	赤土附	17c後半	残存底部1/4以下
55-67	B-4	陶器	香炉	—	(3.9)	—	瀬戸・美濃	青斑	18c後~19c前	残存底部1/3。砂目残存。
55-68	B-8	陶器	皿	—	—	—	瀬戸・美濃	赤土附	17c前	瀬戸原
55-69	A-21	陶器	皿	—	(5.6)	—	中國	染付	18c末~17c初	小破片。景徳鎮
55-70	B-6	陶器	繪輪皿	—	5.4	—	瀬戸・美濃	灰陶、灰青~灰色	18c中~後	再調査無
57-71	D-7	陶器	葉・蓋	—	—	—	常滑	18c	10~12式	
57-72	B-6, 8	陶器	葉・蓋	(12.6)	—	—	常滑	18c	10~12式	
57-73	A-2	陶器	皿	—	—	—	初山	鐵鑄、暗赤褐色	18c後半	小破片
57-74	B地区	陶器	拂利	—	—	—	肥前	—	18~19c	布袋彌利

第 V 章 村山浅間神社関連遺跡及び初出資料

1. 中宮八幡堂跡の調査

(1) 調査の概要 (図 58)

中宮八幡堂跡は、富士山西麓の標高 1,280m 付近に位置する。中宮八幡堂跡周辺は、比較的平らで、遠く駿河湾を望むこともできるという。中宮八幡堂とは、村山浅間神社から始まる村山口登山道の施設の一つであり、時代によっては、女人堂を兼ねていたと考えられている。

富士宮市では、富士宮市市制 50 年記念事業として、平成 3・4 年度に「富士山村山登山道跡調査」を行ったところ、建物跡や石造物の存在が確認された。村山口登山道は、明治時代中頃からは、木材の搬出路（木馬道、ゴロ道）や山林の見回りのための通路として使用された箇所もあったと伝えられており、現在登山道としては全く機能しなくなっている。調査当時は荒廃が著しく、調査順路を推定登山道とし、登山道の推定には困難を極めている。村山浅間神社から大宮口新道と合流するまでの区間に、中宮八幡堂跡の他、11 箇所の施設跡を確認している。それぞれ、「鶴王子・牛ヶ王子」、「西河原・地蔵」、「矢立・新小屋」、「瀧本・笹塲離」、「小禅定」、「等覚入」、「室大日堂・木戸



図 58 中宮八幡堂跡位置図

(S = 1 / 50,000)

室・茶屋」、「普淨」、「第一層・等覚門」、「第二層」、「第三層」の施設に対応すると考えられた（富士宮市 1993）。その後、平成 5・6 年度には、地元の有志で組織される「富士山表口村山登山道保存観光資源化推進協議会」が草刈などの保全活動を行い、富士宮市では、平成 6 年 11 月 14 日～17 日にかけて、村山口登山道芝刈り事業として、調査順路（推定登山道）の確保及び、残存状況が比較的良好な中宮八幡堂跡周辺の位置確認を行なっている。中宮八幡堂跡と想定された建物跡周辺の、表土を除去したところ、上下二段にわかれれる平坦面と、石段、石積み、上段には礎石建物跡が検出され、平面確認している。その際、陶磁器、銭貨が出土しており、また、石造物もあり、これらの遺構との関連が考えられる。

なお、現在は、礎石建物跡の確認された上段に、村山浅間神社氏子による新しい祠が建てられている。

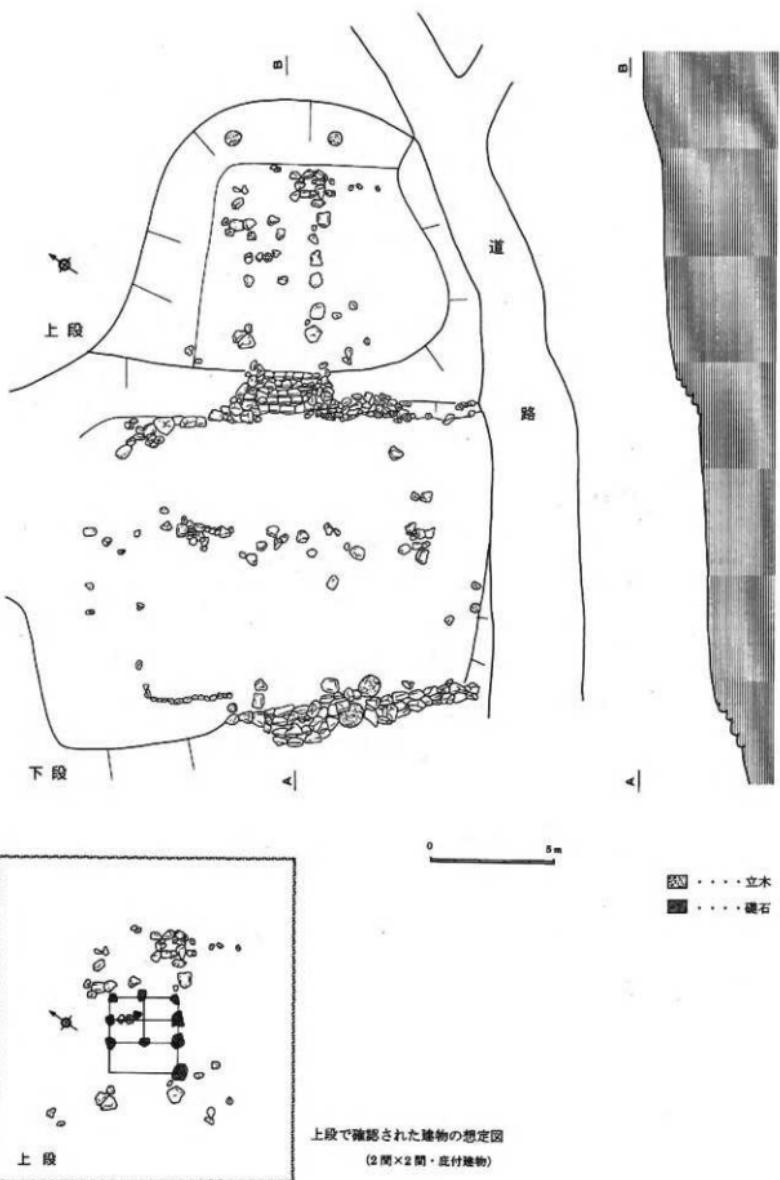


図 59 中宮八幡堂現況概略図

(2). 遺構 (図 59)

施設は、礎石建物跡、石段、石積みで、石造物 3 基が平坦面上に確認されている。この平坦面は、上下 2 段に分かれており、石積みで区され、石段で繋がっている。上段は、長軸約 10m × 短軸約 8.5m の規模であり、下段は長軸約 18m × 短軸約 13m の規模である。下段が上段より広くつくられている。これらの平坦面の東南方向には、幅 2~4m 程の道があり、中宮八幡堂跡前を北方へ進んでいく。この道が、登山道跡と推定されている。石造物の一つには、「太郎坊權現 妙法蓮華経」と刻まれ、天保四年（1833）の銘が確認できる。

下段には、下端に石積みと、平坦面上に石列が確認されたのみである。桁行約 3m × 短軸約 2.7m である。それぞれほぼ等間隔にあるので、1 尺 = 0.303m とすると、桁行 1 間が 3.3 尺、梁間 1 間は 4.5 尺となる。

上段の礎石建物跡と石段及び石積みとは、方向を同じくするが、下段の石段及び石積みはやや西に傾いた方向をとっている。

(3). 遺物 (図 60、表 9・10、図版 17)

出土した陶磁器の器種は、碗、皿、鉢、瓶類（花瓶、徳利、燭台）、小壺、香炉、擂鉢、土瓶、急須、段重、蓋物で、総点数 428 点である。うち、18 点を図示した。遺物は、17 世紀前半～20 世紀前半までの年代幅を持つ。図示はしていないが、最も多くの出土量があるものは、明治時代の陶磁器で、（型紙染付、銅版染付、ゴム版染付他）の碗、皿で、全体の 65.1%（碗 57.0%、皿 8.1%）を占める。なお、遺物調査時に、調査当時、遺物を上段出土分と下段出土分とに分けて整理してあったものを、混ぜて注記してしまったため、調査区一括の資料となってしまっている。

a. 濑戸・美濃陶磁器 (1・3、5~12、16・17)

1 は、鉄釉碗で、17 世紀ものとされる。3 は、外面に鉄釉、内面に灰釉がかけられる碗で、18 世紀後半～19 世紀初めのものとされる。5 は、灰釉碗で、18 世紀後半～19 世紀初めのものとされる。6 は、広東碗で、底部 1/2 程のみを欠損している。19 世紀後半のものとされる。8 は、太白手筒形碗で、18 世紀後半～19 世紀初めのものとされる。9・10 は、鉄絵の筒形碗で、いずれも 18 世紀後半～19 世紀初めのものとされる。7、11・12 は磁器の端反碗で、7 は 19 世紀後半、11 は 19 世紀前～中頃、12 は 19 世紀前半のものとされる。11・12 には、見込み文がある。16 は、擂鉢で、18 世紀のもの、17 は甕で、18 世紀後半～19 世紀中頃のものとされる。

b. 肥前陶磁器 (2、13・14)

2 は、磁器碗で、18 世紀のものとされる。13 は、磁器筒形碗で、18 世紀末～19 世紀初めのものとされる。14 は、磁器小壺で、17 世紀～18 世紀前半のものかと考えられる。

不明の陶磁器 (18)

18 は、産地不明の陶器土瓶の蓋で、内面には一面煤が見られ、内面中央には、「リヨ」と読めるカタカナが墨書きで記されている。

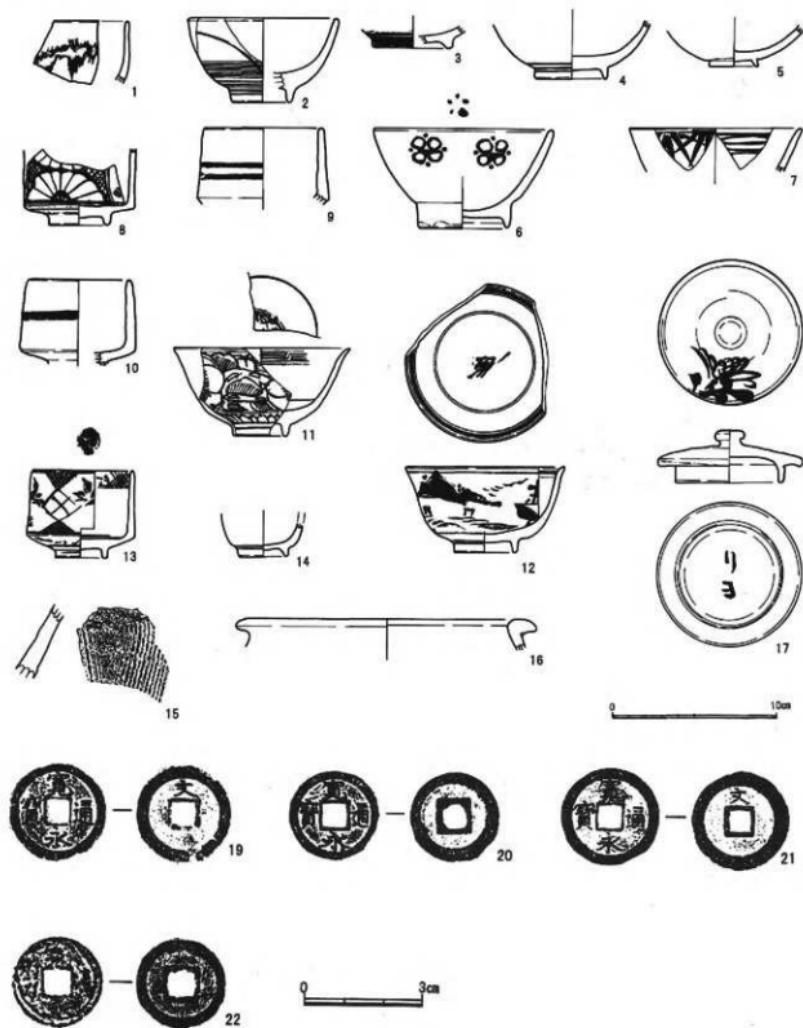


圖 60 中官八幡堂出土遺物

c. 錢貨（図 60）

錢貨は 4 点である。寛永通寶 3 点、錢名不明の銅錢 1 点である。寛永通寶は、いずれも新寛永で、文鏡 2 枚が含まれる。

4. まとめ

検出された礎石建物跡は、2間×2間の一面庇建物と考え得る。出土遺物の器種別割合は、碗 69.2%、皿 8.6%、鉢 0.2%、甕 0.2%、花瓶 0.4%、徳利 3.6%、小壺 3.8%、香炉 0.2%、擂鉢 0.7%、その他（急須、段重、蓋物）4.7%である。時代別割合は、17世紀 0.2%、18世紀 4.5%、19世紀前半（幕末まで）8.9%、明治 80.8%、大正～戦前 5.6%となっている。村山浅間神社遺跡や、村山浅間神社周辺の集落表採資料と比べると、碗の出土量が飛びぬけて高く、明治以降の割合が非常に高くなっている点を特徴としてあげられる。

中宮八幡堂跡は、明治 35（1902）年の登山記念写真には、手前に鳥居と茅葺の建物、小屋、建物奥にさらに何らかの施設が記録されている（富士宮市 1993）。建物配置からすると、検出された遺構との共通点が多く、それらに相当すると考えられている（富士宮市 1995）。礎石建物跡は、最奥の堂宇であると考えられる。

登山道は、中宮八幡堂前で東方へ向かい、富士山の放射谷である日沢を渡り、「釣王子・牛ヶ王子」跡にあたる建物跡から、右岸の尾根上を北上すると推定されている。また、日沢を 30m ほど登った左岸には、水神を祀る祠と、「八大龍王」と刻まれた石造物があつて、深さ 50cm を測る井戸が確認されている。また、中宮八幡堂からは、北西方向にある高鉢山（標高 1649m）への登拝のルートも想定される（富士宮市 1993）ことから、中宮八幡堂は、富士山登拝の行程の中で、重要な地点であったと考えられる。

（佐野）

表9 中宮八幡堂出土遺物観察表 一陶磁器一

図-No.	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	地質・絵付	生産年代	備考
60-1	陶器	碗	—	—	—	瀬戸・美濃	磁器・白磁・青磁 鉄輪・黒褐色	17c	小破片
60-2	磁器	碗	(3. 5)	(8. 8)	(5. 2)	肥前	染付	18c	残存 1/4 以下
60-3	陶器	碗	—	(4. 8)	—	瀬戸・美濃	鉄輪・黒褐色 灰輪・灰白色	18c 後～19c 初	残存底部 1/4 以下
60-4	磁器	碗	—	(4. 2)	—	肥前	染付	18c	残存底部 1/2
60-5	陶器	碗	—	3. 0	—	瀬戸・美濃	鉄輪・灰白色	18c 後～19c 初	
60-6	陶器	碗	10. 8	(5. 4)	(6. 1)	瀬戸・美濃	磁器・白磁・青磁 鉄輪・灰白色	19c	青磁 1/2 瓢、白磁 1/2 瓢、灰白色
60-7	磁器	碗	(10. 6)	—	—	瀬戸・美濃	染付	19c 後	小破片。端反彎
60-8	陶器	碗	—	3. 7	—	瀬戸・美濃	染付	18c 後～19c 初	太白手簡形彫
60-9	陶器	碗	(7. 0)	—	—	瀬戸・美濃	磁器・白磁・青磁 鉄輪・灰白色	18c 後～19c 初	残存底部 1/3。簡形彫
60-10	陶器	碗	6. 0	—	—	瀬戸・美濃	磁器・白磁・青磁 鉄輪・灰白色	18c 後～19c 初	
60-11	磁器	碗	(10. 7)	(3. 2)	(5. 4)	瀬戸・美濃	染付	19c 前～中	残存 1/4 以下
60-12	磁器	碗	9. 6	3. 6	5. 2	瀬戸・美濃	染付	19c 前	残存 2/3。端反彎
60-13	磁器	碗	(6. 0)	(3. 1)	5. 4	肥前	染付	18c 前～19c 初	荷物口縁部 1/3。筒形彫
60-14	磁器	小壺	—	(2. 8)	—	肥前	染付	17c～18c 初？	残存底部 1/2
60-15	陶器	擂鉢	—	—	—	瀬戸・美濃	鉄輪・灰白色	18c	
60-16	陶器	甕	(16. 0)	—	—	瀬戸・美濃	鉄輪・黒褐色	18c 後～19c 中	残存 1/4 以下
60-17	陶器	土瓶・蓋	8. 8	—	3. 1	不明	鉄輪・灰白色	19c 中～後	内面墨書き

表10 中宮八幡堂出土遺物観察表 一鉢一

図-No.	錢貨名	国名	初鋳年	材質	外径(cm)	穿孔徑(cm)	重さ(g)	備考
60-19	寛永通寶	日本	1668	銅	2. 50	0. 60	3. 0	新寛永。背文
60-20	寛永通寶	日本	1668	銅	2. 50	0. 58	3. 5	新寛永。背文
60-21	寛永通寶	日本	1674	銅	2. 30	0. 62	2. 6	新寛永。
60-22	寛永通寶	日本	1674	銅	2. 30	0. 80	2. 1	新寛永。

2・村山浅間神社所蔵の須恵器

村山浅間神社の宝物館に須恵器2点(図61)が所蔵されている。神社の宝物館に納められている特異な状況や資料自体の重要性からここに報告するものである。この資料は、宝物館の中に設置されている棚の上で木箱に入れられて保管されていたものであるが、どのようにして神社に招来されたのか、その来歴が分かる箋書きなどを見ることはできない。

1は、口径10.1cm、器高23.3cm、胴径16.7cmを測るフラスコ形提瓶で口縁の一部が欠損しているが全体の器形の分かれる良品である。偏球形の胴部には縱位に接合した痕が明瞭に残り、片側に回転利用のヘラケズリを施されている。口縁部はラッパ状に開く頸部と端部を面取りする口唇部からなり、口唇部下位に段を作り出している。胴部上半部を主にして自然釉がよく残る。釉以外の箋所は、色調が灰黄色を呈する。2は、口径8.2cm、底径3.2cm、器高5.4cmを測る底部の小さなやや小振りの盤で、2/3ほどが残存している。口縁部は、緩やかに内傾して体部との境に弱い段を形成する。体部は下半部がやや直線的に開き、その上半部で大きく内彎するものである。体部の外面下端にはヘラケズリが施される。色調は黄灰色を示す。

1、2とも湖西産のものと思われるが、1のフラスコ瓶が7世紀後半、2が7世紀初頭の年代が与えられる(鈴木2001)。この年代差や器種の構成からどこかの古墳出土資料と考えることもできるが具体的な遺跡を想定することは難しい。この時期の遺跡が市内において弓沢川下流域や潤井川中流域の集落や古墳に限られており、村山浅間神社周辺の山間まではその分布域とはなっていない点などとも考え合わせると、村山浅間神社が信仰の対象として成立した以後にどこからか込まれたものではないかと想像される。

<文献>

鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器窯の再構築」『須恵器生産の出現から消滅－猿投窯・湖西窯編年の再構築－』第5分冊補遺・論考編

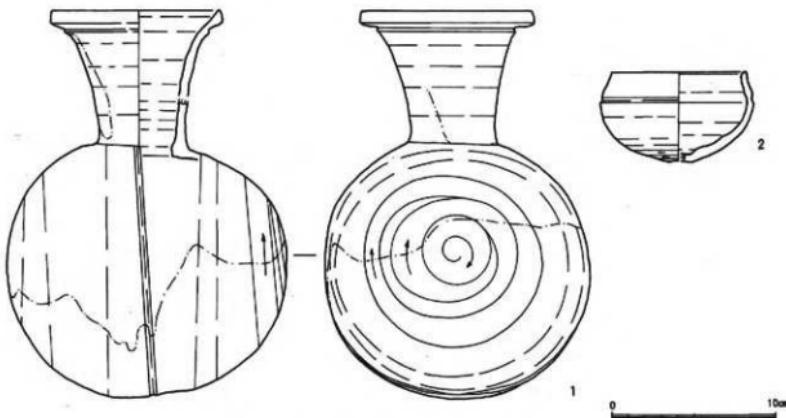


図61 村山浅間神社所蔵の須恵器実測図

第 VI 章 富士地域の関連遺跡

1. はじめに

村山浅間神社遺跡の調査では、10世紀前半の堅穴住居の造営をその始まりとして、途中に時間的な空白期を経て、13世紀以降に継続的に営まれた各施設が発見され、遺跡の大略的な動向が確認されている。それは、平安時代に忽然とこの山間に出現した集落と村山浅間神社に直接関わるものであろう中世以降の信仰の遺跡として捉えることができるものであるが、現在まで残されている貴重な文献に記された内容や地域に根付く伝承とは、まだ、うまく整合する歴史的な動きではないようである。特に、時代が遡ればその傾向は大きくなるようである。

ここでは、古文書や民俗調査の成果との付き合わせを今後の課題として一旦擱上げし、近年調査例が徐々に増えつつある同時代の遺跡調査成果を紹介することで、地域史の中で、村山浅間神社遺跡の歴史的位置づけを考えてみることにする。対象になるのは富士川下流域及び潤井川流域の諸遺跡であり、従来の埋蔵文化財調査になり難かった近世の調査資料の偏在を考慮しながらも、平安時代後半以降の遺跡の動向との関連を検討しようと思う。まずは平安時代の諸遺跡を図1の遺跡分布図に則しながら紹介し、その関連を考えてみることにする。

2. 富士山西南麓の平安時代

村山浅間神社遺跡の調査では、村山浅間神社境内の丘陵上で10世紀前半の堅穴住居1軒と溝1条が発見されている。周辺に同様な堅穴住居などが確認されていないことから、この堅穴住居の構成する集落が非常に狭い範囲で居住空間を完結することが判明している。ここで確認できることは、小規模な集落遺跡が富士山中腹の水田可耕地などの求められない標高500mを測る高所に位置している点である。それもこの時代だけに限られており、非常に限定された期間だけに活動の痕跡を残す遺跡でもある。

ここでは富士宮市域を中心として、同時代の遺跡の分布と動向を考えてみることにする。

(1) 富士宮市内の遺跡

a. 辻遺跡

潤井川左岸の標高400mを測る富士山麓斜面に展開する雑墳状の丘陵のひとつに展開する辻遺跡(7)は、隣接する棟敷遺跡とともに10世紀前半の遺物が採集されている。採集されている遺物は、甲斐型壺、甲斐型甕、灰釉陶器などの小破片(図62-2~5)である。辻遺跡は、富士山麓の北に向かうにつれて標高を増す市内北部の比較的高所に位置している遺跡で、周辺に同時代の遺跡の分布が認められない地域において局地的な分布を示す遺跡として捉えられるものである(富士宮市教育委員会1993)。

この遺跡は、採集されている限定された時間幅の土器類の出土や広がりを持たない遺跡の分布や

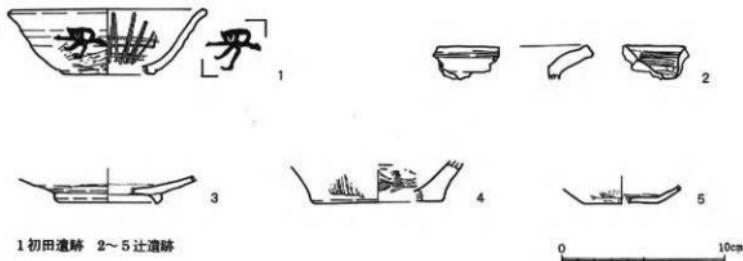


図 62 市内遺跡出土土器実測図

立地など村山浅間神社遺跡とよく似た状況を示していると言える。さらに、村山浅間神社遺跡が大沢川へ弓沢川の源流の傍に展開しているように、この辻遺跡も富士山頂から下る大沢が周辺の湧水の作用により潤井川へと変る変換点である潤井川の水源近くに広がる遺跡である点もよく似ていると言える。

村山浅間神社遺跡と辻遺跡は、弥生時代以来の遺跡がまったく存在しなかった場所に忽然と登場した遺跡であり、その時代が 10 世紀前半に限られている。そして、それらから出土している土器は、搬入品である灰釉陶器は別として、在来系の土器が甲斐のもので占められているのである。

b. 大宮城跡、浅間大社遺跡

中世になるとこの富士地域の中核となる大宮城の周辺では、大宮城跡（11）の発掘調査により折戸 53 号窯式の灰釉陶器が 3 点報告されているが、関連する遺構等は発見されていない。16 世紀まで継続する居館、城としての遺跡の初源を考える上で重要な灰釉陶器であるが、その点数からは活発な遺跡の造営を追うことはできない（富士宮市教育委員会 2000）。

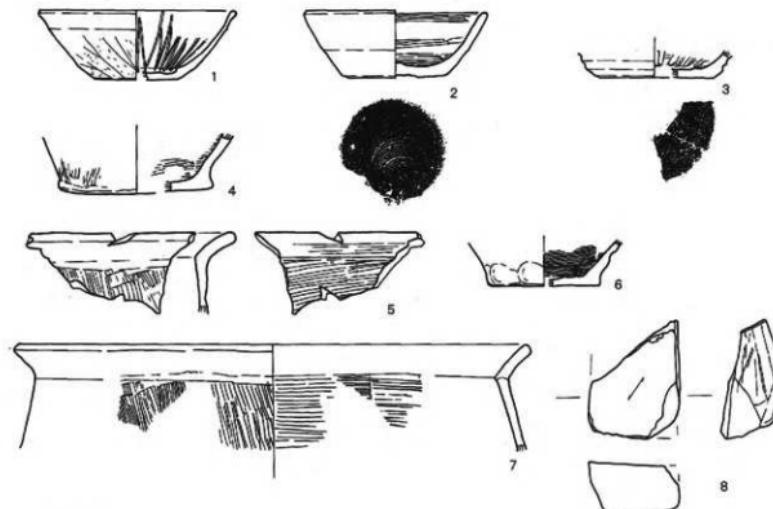
また、大宮城跡に隣接する浅間大社遺跡（10）では、12 世紀以降の土器類や竪穴状造構、掘立柱建物などの発見に伴い 9 世紀後半の駿東型壺の底部破片が 1 点出土している。大宮城同様に出土数は少なく、遺跡の実態はよく分からぬが、神田川の水源（湧玉池）付近に 9 世紀後半～10 世紀前半の遺跡が分布していることは指摘できるようになっている（富士宮市教育委員会 2003）。

c. 泉遺跡

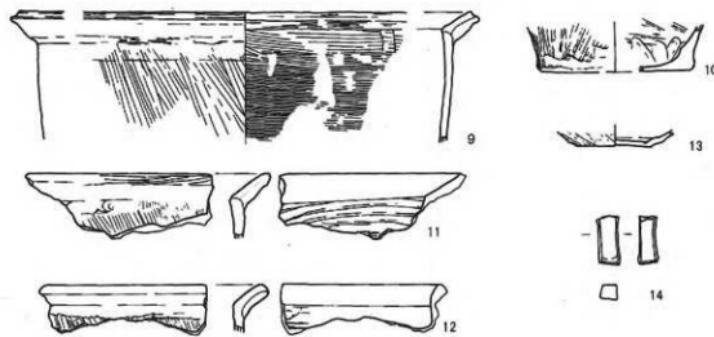
潤井川の左岸に見られる自然堤防が作用して、扇状地堆積物による舌状の微高地が形成される場所をその中流域で認めることが出来るが、その部分に泉遺跡や羽衣町遺跡などが立地している。弓沢川と潤井川によって東西を地形的に大きく遮断されている富士宮市街地の範囲では、最も西側部分に展開する遺跡であると言うこともできる。

泉遺跡（15）は、弥生時代後期中葉、古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代の集落跡が調査されており、濃密に造構が分布する複合遺跡であることが知られている。3 地点における発掘調査で

第1号住居址



第3号住居址



第9号住居址

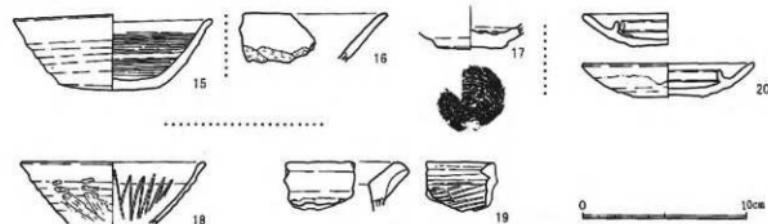


図 63 泉遺跡出土遺物実測図

平安時代の遺構である堅穴住居 5 軒以上が発見されている（富士宮市教育委員会 1993）。

遺構、遺物が数多く発見されている第 2 地点は、泉遺跡北側部分の方辺川に程近い場所であるが、ここで平安時代の堅穴住居を 4 軒以上発見している。第 1 号住居址は、342 cm × 318 cm を測る無柱穴の堅穴住居で、東側にカマドが築かれている。カマド前面にあたる堅穴の南東側にやや偏る状況で、破片化した土器が発見されている。遺物は、甲斐型壺、甲斐型甕、駿東型壺、駿東系の甕、砥石（図 63-1～8）などで 9 世紀後半の年代が考えられるものである。同じ地点の第 3 号住居址は、北側にカマドを持つ無柱穴の堅穴住居で、東西方向に 295 cm の規模を測る。南側の壁が調査区外にあり、全体の形状は分からぬが、第 1 号住居址のように方形を指向する堅穴であると思われる。この堅穴住居からはカマドおよびその北東部分で土器片が多く発見されている。遺物は、甲斐型壺、甲斐型甕、砥石（図 63-9～14）などであり、甲斐型土器で占められ点を大きな特徴としている。年代は 9 世紀後半～10 世紀初頭を考えており、村山浅間神社遺跡の出土資料と時間的には併行している。

その他の出土土器（図 63）では、15 が第 9 号住居址出土の駿東型壺で、9 世紀後半の年代が与えられる。16、17 は大型の堅穴住居である第 2 号住居址覆土から出土の壺類で、外面にヘラケズリが施される 16 が 9 世紀後半、底部全面に糸引き痕の残る 17 が 11 世紀のものであると考えられる。この 17 は、富士宮市においては出土例の数少ない 11 世紀の考古学的な資料である。18 は表土中より発見された甲斐型壺で、9 世紀後半のものである。

泉遺跡の第 1 地点は、この第 2 地点の西側 100m ほどの潤井川左岸部分にあたり、狭小なトレーナーによる発掘調査が行なわれている。発見された遺構は、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期の堅穴住居址であるが、その調査でも平安時代の土器類が少量ではあるものの採集されている。遺物の数や遺構の状況などから、堅穴住居の建てられる集落の主要部分から外れているものと考えることができる。第 1 地点で発見されている 19 は、甲斐型甕の口縁部小破片で、9 世紀後半の年代が考えられる。

第 3 地点は、第 1 地点の南側 130m ほどの地点で、川が蛇行することにより舌状の広がる遺跡のほぼ中央部にある。ここでは、1 辻 3～4 m の規模を測り、北壁にカマドを持つ堅穴住居 1 軒が調査されている。搅乱等が多く、具体的な様子はよく分からぬが、北側にカマドを持つ点や、その規模などから考えると第 2 地点の第 3 号住居址とよく似た形態のものであると言える。ただし、この住居は堅穴内に東側列の柱穴と思われる小ビットが 2 基発見されており、第 3 号住居址とは形態を少し違えている（富士宮市教育委員会 2003）。この堅穴住居出土の遺物は、砥石以外ほとんど認められないため、堅穴住居の詳しい年代は分からぬが、住居の規模などから平安時代のものであると考えている。

このように、泉遺跡では、平安時代の堅穴住居が複数で発見され、一定の広がりを持つことが分かる。各遺跡の発掘調査地点や調査方法の違いなどによる部分も多いと思われるが、富士宮市内でこのような景観を示す平安時代の遺跡はここだけであり、村山浅間神社遺跡とは対照的である。

泉遺跡においては、第 1 号住居址から第 3 号住居址への変遷が追えるものである。それは、堅穴の土器型式の違いとしても認識できることであるが、この型式変化は、後述する富士市の岩倉 B 遺跡と村山浅間神社との違いとしても指摘できるものである。ここに在来系土器の小画期を認めるこ

とができ、潤井川中流域の遺跡に対する甲斐系譜の生活様式の影響が強まる状況を見て取ることができるのである。

d. 初田遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の確認調査の際に、土器類が数点採集されている。初田遺跡(18)は星山丘陵内に開拓された貢戸谷が富士川に開口する谷部分に位置している。確認調査用のトレチの多くは、川の作用により堆積した砂利層や黒色の粘質土層に覆われ、谷特有の地形環境を示していた。遺物は、谷間を意図的に埋めた表土および谷底に周囲より流入した土の中から発見されている。

調査区の最も標高の低い場所で発見された土器器坏(図62-1)は、推定口径11.5cm、底径5.4cm、器高4.0cmの大きさを測り、体部外面に「四万」と書かれた墨書き土器である。これは、外面に左方向へのテケヅリが見られる駿東型坏であるが、内面に放射状の暗文があり、甲斐型坏の型式要素が認められるものである。その年代として、9世紀後半が考えられる。墨書き土器としては、富士宮市ではじめて発見された例であり、その2例目が今回の村山浅間神社遺跡出土例の「朝」と書かれた墨書き土器となる。

この土器を探集した地点は、堆積土が2次的なもので、出土遺物も原位置を保っていないものと考えられる。川の作用などで移動したものとすると、どのような遺跡と関連するのか遺跡分布などの調査成果から想定しなければならない。この貢戸谷の周辺は、茶畠や森林が多く、遺跡の分布がよく分かっていない地域であるが、そこを流れる貢戸川の上流には、貢戸下谷戸遺跡が平坦な台地上に広がっている。現状では、この貢戸下谷戸遺跡との関連を考えることができる。また、初田遺跡から富士川を挟んで対岸には、後述する浅間林遺跡や破魔射場遺跡など平安時代の有力な遺跡が分布しており、平安時代の遺跡の数が希薄な富士山西南麓(潤井川流域)の状況を踏まえると、それらの富士川下流域に展開する遺跡群との関連も想定することができるものであるとも言える。

富士宮市内の平安時代遺跡は、9世紀後半から10世紀前半の時代に限られて登場しており、その前後は空白期となっている。それは、奈良時代を含めても特異な状況として捉えることができる。奈良時代の遺跡は、8世紀の前半の峯石遺跡、上石敷遺跡、石敷遺跡、權現遺跡やその時期の資料が採集されている木ノ行寺遺跡など富士根地区の弓沢川が潤井川に流れ込む下流域の左岸に偏在して分布している。それらはすべて8世紀の前半に終焉を迎えており、大半の集落はその後半までは続かない。その中で、木ノ行寺遺跡に隣接している中沢遺跡で8世紀後半の須恵器が発見されている点は、特筆されるのである(富士宮市教育委員会1993)。また、これらの集落遺跡が終焉を迎えるのに呼応するかのように、これら遺跡群から1.5kmほど南下した潤井川の下流、富士市天間の天間代山遺跡に集落が築かれるようになる。

このように、富士宮市内では8世紀後半から遺跡の動向がはっきりしなくなる。特に9世紀前半の遺跡は、現状で皆無に近い状況にある。それが、いずれも小規模ではあるものの、9世紀後半になると忽然と登場するのである。この時期の集落は、潤井川沿いに一定の広がりを持ち、複数の堅穴住居が発見されている泉遺跡と少量の遺物が局地的な分布しか示さない浅間大社遺跡、辻遺跡、山中に極めて小規模の集落を営む村山浅間神社遺跡などに分けることができる。拠点としての泉遺

跡と周辺の遺跡とに分けて捉えることもできるようであるがその遺跡数は相対的に少ない。これらの遺跡も 10 世紀後半以降継続するものではなく、11 世紀の後半まで新たに出現するものはない。再度、遺跡の分布の空白期を迎える。

律令体制下、富士宮市内の遺跡の動向は特異な状況を示していると言える。元来、火山灰に覆われ、沖積地の未発達な山間地にあって、稻作、畑作による生産性は極めて弱い土地柄であり、さらに、数度の富士山噴火に見舞われた地域に対する開発には、特別の要因が考えられるが、具体的な歴史事象はよく分からない。ただ、9 世紀初頭に浅間大社が大宮の地に創建されたと社伝は伝えている。前述のように、遺跡の空白時期における伝承であり、それらがどのように関連付けられるか興味深い事例ではある。

（2）富士市の遺跡

富士市域は、古墳時代から継続的に地点を替えながらも遺跡が造営され続ける地域である。古墳時代には市域北東側の愛鷹山の丘陵内を主に数多くの古墳の分布が見られ、奈良時代～平安時代には、富士山南麓の扇状地に富士郡衙に関連する有力な遺跡が多く発見されている。特に、奈良時代～平安時代の遺跡としては、その中心に位置する東平遺跡（22）、計画的な集落として 8 世紀に開発される舟久保遺跡や古墳時代から継続的な造営が認められ東平遺跡西側に広く展開する沢東 A 遺跡（20）や中朽遺跡、東側の宇東川遺跡などを取り上げることができる。東平遺跡では、30 回以上の発掘調査が実施されており、多くの堅穴住居や掘立柱建物などが確認されている。その中には、遺跡の南端部分にあたる第 28 地区で 9 間 × 2 間の一面廐付大型建物が発見されたり、その東側の第 16 地区とされた地区では、7 世紀後半の建立が想定される三日市廐寺に関連すると思われる 4 間 × 3 間の二面廐付建物、区画溝と多量の瓦類の発見例などがある。また、東平遺跡の中央部第 27 地区では 8 世紀中葉の堅穴住居から「布自」と墨書きされた須恵器坏が発見されている。このように、まだその政庁域ははっきりしないものの、富士郡衙や三日市廐寺に関連した遺構、遺物の発見が認められるようになっている。東平遺跡の東側に近接する舟久保遺跡では「倉」と記された 9 世紀前半の墨書き器が発見され、正倉院の可能性も指摘されている（富士市教育委員会 2002）。

このように、東平遺跡を中心とした一大拠点が形成されていることが分かるが、この一定の広がりを富士郡の中枢として「富士郡衙関連遺跡」と呼べるものと考えている。政治・経済の中心としてのこの富士郡衙関連遺跡に対して、富士郡域の周辺に展開する集落として、改めて富士宮市内の奈良～平安時代の遺跡を捉えられる。それは、富士宮市内の遺跡の分布が、具体的に富士郡家による山間地の開発の跡を表わしていると考えることもできるのである。

それぞれの遺跡の性格は、遺跡の分布や動向を通して、その社会構造の中での違いとして取り扱うことができる。平安時代の山間地における開発は、この富士郡衙関連遺跡に対して、富士山山中にある富士市大湧の岩倉 B 遺跡がよくその実態を表している。

a. 岩倉 B 遺跡

村山浅間神社遺跡と同じ標高 500m ほどの富士山山中で発見された岩倉 B 遺跡（19）は、東平遺跡の西側を開拓する伝法沢の上部にあたり、谷筋を通して富士郡衙関連遺跡との繋がりが指摘され

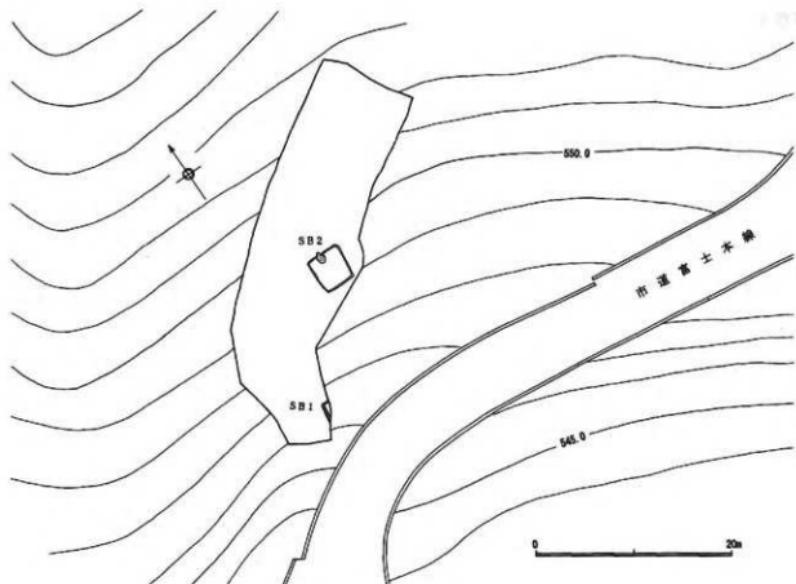


図 64 富士市岩倉B遺跡全体図

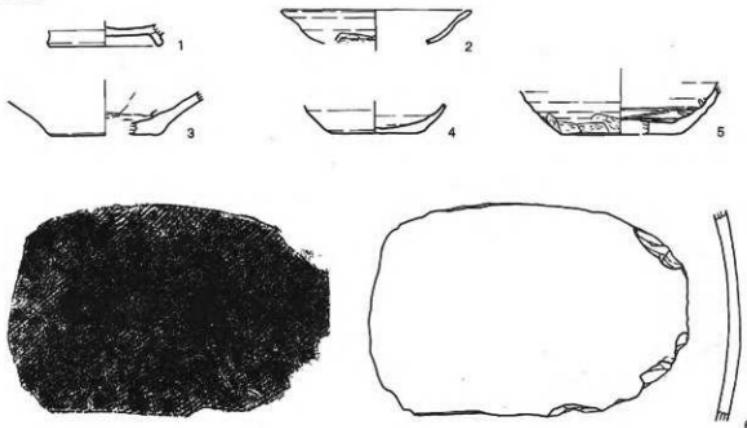
る遺跡である。今では、富士市の法藏寺を経由する大洲街道を通じて両者は繋がるが、具体的な当時の道跡などの確認例はない。しかし、起伏に富む富士山の斜面地において、谷筋やそれに沿う尾根伝いが麓と山を結ぶための直接的な経路として、有機的な関連を指摘できる地形環境を表わすものと考えている。

この遺跡では、道路の敷設に伴う発掘調査で、平安時代の堅穴住居2軒が確認されている(図63)。2つの堅穴住居は、10mほどの間隔を開けて発見されており、あまり濃密ではなく、散在した状況で分布している様子を示している。

全体が調査されているSB2は北壁にカマドが付される無柱穴の堅穴住居であり、その南側で堅穴の北西隅が検出されているSB1は、SB2とほぼ同一の方向を示す堅穴住居址である。位置関係や堅穴の軸方位から両者は同時期に集落を構成した住居群の一部であると考えられる。この遺跡で複数の堅穴住居が確認されていることは、村山浅間神社遺跡を考える際、重要な視点となる。

発掘調査では、堅穴住居などから多数の遺物が出土している(図65、図66)。1~6はSB1出土の土器である。1は灰釉陶器の高台部、2は外面にヘラケヅリが認められる甲斐型の皿と思われるものである。4、5は駿東型壺の破片で、大型壺の5には外面左方向のヘラケヅリ、内面にヨコミガキが認められる。6は須恵器壺の大型破片で、外面にタタキ目、内面に黄土の刷毛塗りが認められる。具体的な用途はよく分からぬが、堅穴の北西隅に設置されて発見されており壺の破片を二次的に転用して使用されたものようである。これらの土器類は、2や5などの型式より9世紀

SB 1



SB 2

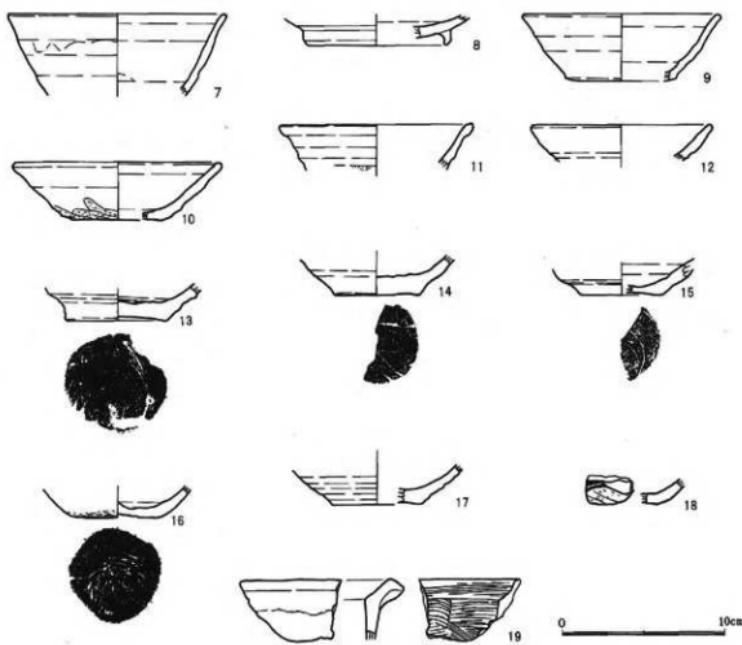


図 65 岩倉 B 遺跡出土土器実測図 1

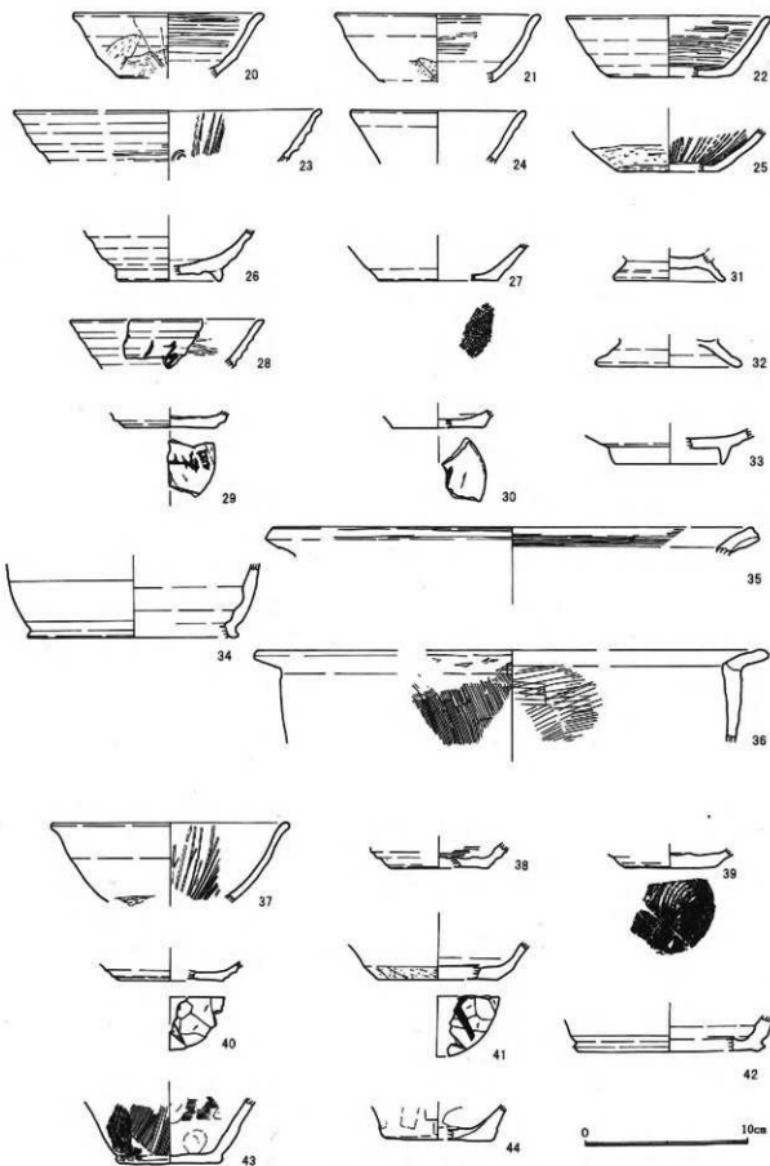


図 66 岩倉 B 遺跡出土土器実測図 2

の後半の年代が考えられる。

7～19は、SB2から出土した土器類である。7、8は灰釉陶器で、7がやや大型の碗となる。9～11、16、18は駿東型坏で、10、11、16、18は外面にヘラケヅリが施される。18には墨書きが認められる。19は甲斐型の甕口縁破片で、口縁を外側に肥厚させている。この8点については、SB1

同様に9世紀後半の年代が考えられるが、12～15、

17については口縁形態や底部全面に回転糸切り痕を残すことなどから11世紀代の年代が想定され、時代を大きく進める。遺物の出土状況や遺構の形態からこの遺跡における集落は9世紀後半に営まれたものであると言えるが、そこには11世紀の資料が含まれており、時代が複合する状況が指摘される。11世紀代の資料については、調査中に採集された20～36、あるいはそれ以前に採集されていた37～44においても確認できることである。9世紀代の土器に混ざって31、32の足高高台坏の破片や底部糸切りが見られる27の坏などが発見されている。なお、これら採集資料の中には、34、42の須恵器壺底部や28、29、30、40、41の墨書き土器が含まれている。墨書き土器は、竪穴住居出土例と合わせて6点確認されており、比較的その数の多さが目立つが、明らかに読めるものはない（富士市教育委員会2002）。

岩倉B遺跡で出土した土器類は、9世紀後半と11世紀のものに分けることができる。9世紀後半のものは、9世紀第3四半期に限定できるような内容で、あまり時間の幅がない。それは、10世紀前半の年代が考えられる村山浅間神社遺跡出土の土器群と明らかな時期差のあることを表わすもので、岩倉B遺跡から村山浅間神社遺跡への時間的な推移として理解することもできる。その時間

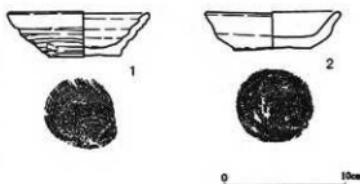


図 67 宇東川遺跡出土土器実測図

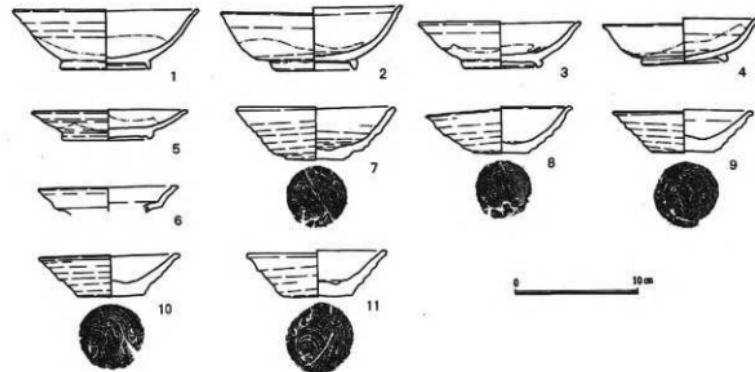


図 68 赫夜姫古墳出土土器実測図

差によって、土器組成における駿東型と甲斐型との共判する岩倉B遺跡と甲斐型だけにより構成される村山浅間神社遺跡の型式差として捉えられるのかもしれないが、ここでは、富士郡衙関連遺跡との関連が想定される岩倉B遺跡とその関係の弱い村山浅間神社遺跡の違いとして考えている。村山浅間神社遺跡の土器型式は、後述する浅間林遺跡など富士川下流域に展開する甲斐型土器の優位な遺跡群との関連の中で成立するものと考えられるのである。岩倉B遺跡のような2時期に亘る遺跡としては、前述した泉遺跡を上げることができる。ただし、泉遺跡については、11世紀代の出土資料が極めて少なくなり、やや状況は異なる。平安時代における2つの時期に亘る営みはよく似ている。

富士山西南麓における10世紀後半から11世紀にかけての遺跡は、確認されている数が少なく、実態はよく分からぬ。中世において地域の中核なる大宮城、浅間大社遺跡では、足高高台壇の出土が知られており、遺跡の出現期がその時期に係る可能性があるものの、周辺の遺跡では岩倉B遺跡、泉遺跡、宇東川遺跡（図67）や赫夜姫古墳主体部出土のロクロ成形の土師器壺（図68）での存在が知られる程度である。

直線距離にして4kmほど離れて、同じ標高に位置している村山浅間神社遺跡と岩倉B遺跡ではあるが、その様相は大きく違っている。富士郡衙と岩倉B遺跡の関係に対して、非常に排他的で、集団による山間地開発とは程遠い村山浅間神社遺跡の特殊性として較べることができる。そして、周辺に湧水地などの水利がまったく認められない岩倉B遺跡と湧水地に依存する村山浅間神社遺跡の周辺環境の大きな違いは、その機能の違いを反映しているのかもしれない。

（3）富士川下流域の遺跡

富士川下流域では、その右岸の富士川町一帯に平安時代の遺跡分布が見られる。ここでは、良好な造構、遺物が出土した次の2遺跡を紹介して、その実態を確認してみることにする。これらは、富士市域の富士郡衙関連遺跡とは異なり9世紀から本格的な開発が始まるもので、郡衙関連遺跡とは異なった消長を示していることを大きな特徴としている。

a. 浅間林遺跡

富士川町松野にある浅間林遺跡（32）は、周辺に中野遺跡や半在家遺跡など中世の有力な遺跡が広がる同一地域に所在している。県道の改良工事に伴い2回の発掘調査が実施され、堅穴住居址34軒や掘立柱建物跡5棟、井戸跡1基などが検出されている（富士川町教育委員会1991）。8世紀中葉から11世紀まで継続する集落のようであるが、主体となる時期は9世紀後半から10世紀前半である。この時期における土器組成の特徴は、黒窯90号窯式～折戸53号窯式段階の灰釉陶器が数多く見られることと在来系の土器型式が駿河系から甲斐の系譜に入れ替わることである。甲斐型は国を越えて広く流通の範囲を求めた壺類以外にも堺類も煮沸形態の主体をなすようになり、ロクロ整形の堀まで登場している。このように、浅間林遺跡におけるこの時期の土器型式は、一部壺類に駿東型壺が残るもの、甲斐一色になったと言えるほどひとつの系譜、型式で構成されるようになる。それは、生活様式自体が甲斐の様式に変化したことによく表しているもので、9世紀後半に甲斐からの人々の移動により新たな展開を示す集落が開発されたことをよく物語っているのである。

b. 破魔射場遺跡

浅間林遺跡の3kmほど下流に富士川を下った富士川町岩淵に位置する破魔射場遺跡(35)では、平安時代の堅穴住居址30軒、掘立柱建物跡1棟などが東名高速道路富士川SA改良工事に伴う発掘調査で発見されている(静岡県埋蔵文化財調査研究所2001)。この遺跡は8世紀後半から11世紀まで続く集落遺跡であるが、集落として本格的な開発が始まるのは10世紀後半から11世紀にかけてであり、大半の堅穴住居はこの時期のもので占められている。ここでは、広久手72号窯式段階の灰釉陶器碗、皿と共に来系のロクロ成形土師器の壺が数多く出土している。土師器壺は大半が底部に糸切り痕を残すもので、時期が下るとこれに足高高台壺が伴うようになる。煮沸形態としては、清郷型甕(佐野1990)の目立った出土が特徴付けられるもので、甲斐型甕や駿東型甕の系譜に乗らない様相を示すようになる。

このように、破魔射場遺跡は10世紀後半以降が集落の盛行期にあたり、土器の構成も前述の浅間林遺跡とはその様相を違えている。土器は、浅間林遺跡の灰釉陶器、甲斐型甕、壺、駿東型壺からなる8世紀以来の型式組成は、この遺跡の灰釉陶器、糸切り痕を残す(糸切り無調整)ロクロ成形壺、清郷型甕の組み合わせへ大きく転換する。ここに大きな画期が想定されるものであるが、それは集落の盛行する時期の違いから10世紀の中頃をあてることができる。

10世紀中頃は、富士市の富士郡衙関連遺跡の各遺跡が消失あるいは縮小する段階で、その勢力が弱まる時期にあたる。富士川下流域から富士市域にかけて、遺跡の動向がよく分からなくなる時期に、集落の積極的な造営が確認できる遺跡として、この破魔射場遺跡は極めて特徴的な変遷を辿るものと言えるのである。破魔射場遺跡の集落が、目立った活動を行なうようになった頃、村山浅間神社遺跡の平安時代住居は、すでに消失しているわけである。村山浅間神社遺跡との時間的な併行関係の中では、浅間林遺跡と終末期の富士郡衙関連遺跡との関係を考えなくてはならないのである。

ここでは富士川右岸に展開する2つの遺跡の様子を述べてみたが、これらの遺跡は、奈良時代に集落が営まれた痕跡を残しながら、その主体となるのは9世紀後半以降であり、平安時代に活動の盛期に向かえる遺跡である。それは、律令体制下に計画的な集落遺跡として7世紀の終わり頃から造営された富士市域の数多い遺跡群とは大きく様相を違えおり、独自の変遷を辿る遺跡として捉えることができる。そして、それは律令体制の崩壊期に登場した集落遺跡としても捉えることもできるものもある。その時代を評価すると、岩倉B遺跡の登場、泉遺跡における集落の再興、そして、村山浅間神社遺跡における平安時代集落の登場などその動きの中で捉えることができるのである。ただし、遺跡の内容や造営時期の違いからは、それが一元的な理由で起こったものと考えることはできない。村山浅間神社遺跡の場合、律令官制の中で発展し続けた国分寺が、9世紀中頃から衰退に向かい、その時期に呼応して密教的な信仰に係る新たな登場を示す集落(須田2002)に対応する可能性を指摘しておきたい。それには宗教施設を構成する建物群の存在が考えられるが、今回の調査では確認していない。これが前代の山林寺院の諸例からも分かるように瓦葺以外の建造物としての仏教関連施設であったとするならば、村山浅間神社の湧水地周辺に展開する掘立柱建物群を考えていく必要がある。それは、今回の調査で平安時代の遺構の発見が第2地区だけに留まった調査成果からすると、調査対象地以外の村山浅間神社周囲の平坦地もその視野に入れて今後検討しなければならない課題なのである(註1)。

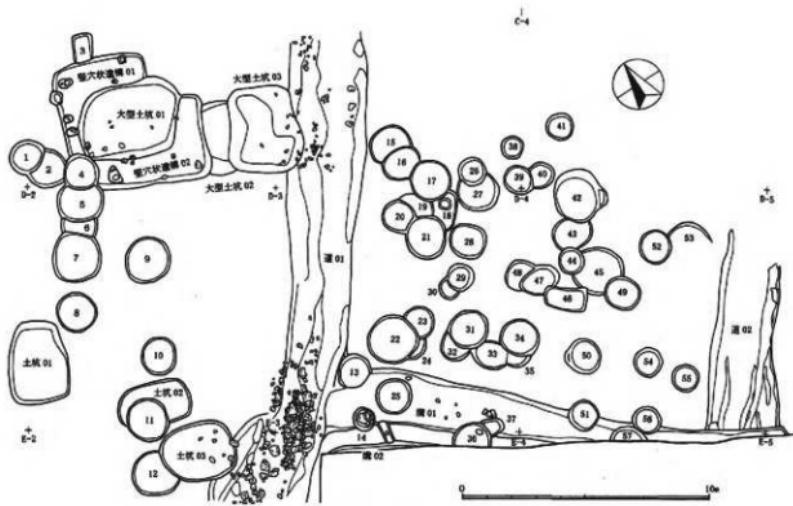


図 69 丸ヶ谷戸遺跡遺構全体図（中世・近世）

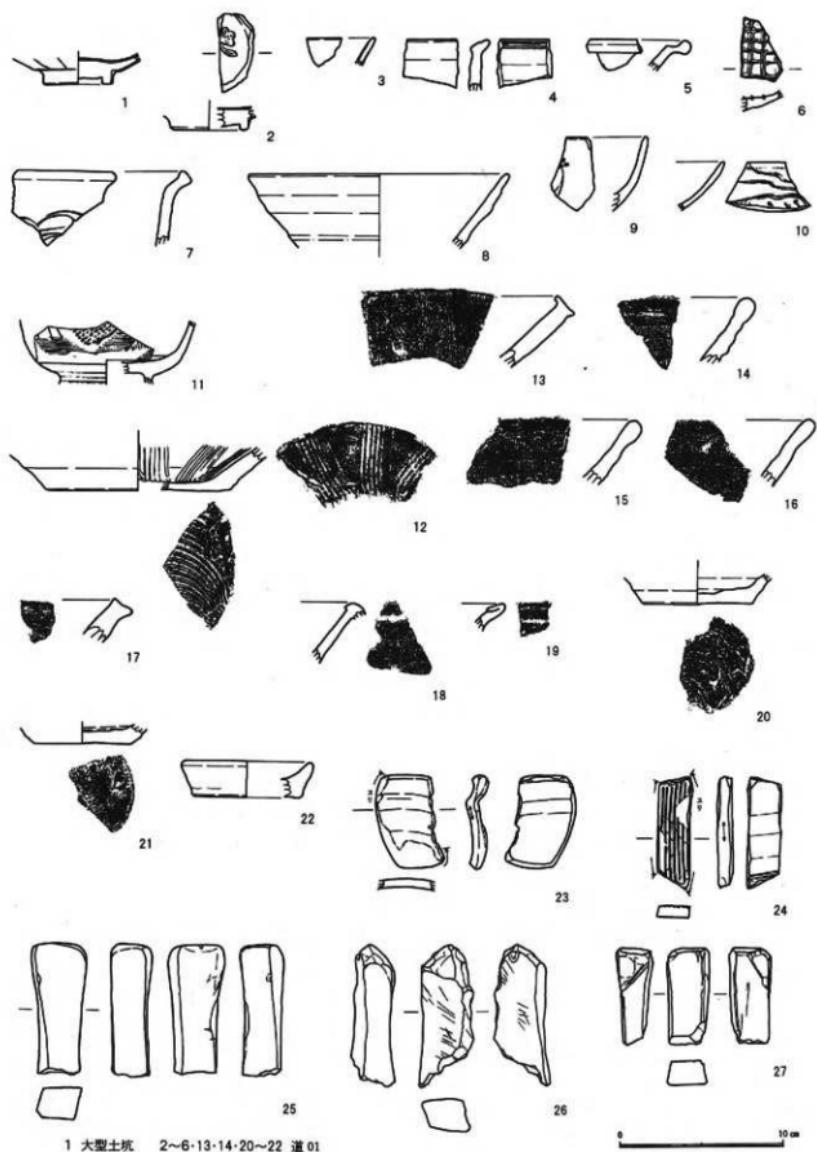
3. 中世の遺跡

富士地域における中世遺跡の調査例は、それほど多くない。それは、遺跡の多くが現在の市街地にあつたり、神社仏閣など現在でもその形を変えながら営まれていていることなどその立地環境や、中世以降が主体的な時代である遺跡の発掘調査例が少なかったことなどに起因しているものである。このような状況であったが、近年、地域史を考える上で、当時の物的資料が提示される考古学的な調査成果の重要性が認識され、発掘調査などが徐々に行なわれるようになっている。ここに主要なものを紹介してみることにする。

(1). 中世の大宮と松野

a. 大宮城跡、浅間大社遺跡

大宮城跡（11）及び浅間大社遺跡（10）は、神田川の水源、湧玉池周辺に展開する中世～近世にかけて地域の中核をなす遺跡で、両者が相互に関連して広範囲な遺跡群を形成する。遺跡群は、新富士火山起源の溶岩流による丘陵が背後にあり、前面には潤井川により形成された狭い山間地特有の沖積地が広がる丘陵裾の微高地にある。大宮城においては、13世紀から屋敷地が作られ、16世紀の魔城まで政治、経済の中心として繁栄していた様子が、4次に亘る発掘調査で確認された濠跡や建物群さらに入土した貿易陶磁器やカワラケなどから判明している（富士宮市教育委員会 2000）。また、浅間大社遺跡においては4次に亘る発掘調査で出土している数多くのカワラケや幅6mほど



1 大型土坑 2~6・13・14・20~22 道 01

15~19 横 01 9~10~12~18 土坑 01

10 cm

図 70 九ヶ谷戸遺跡出土遺物実測図

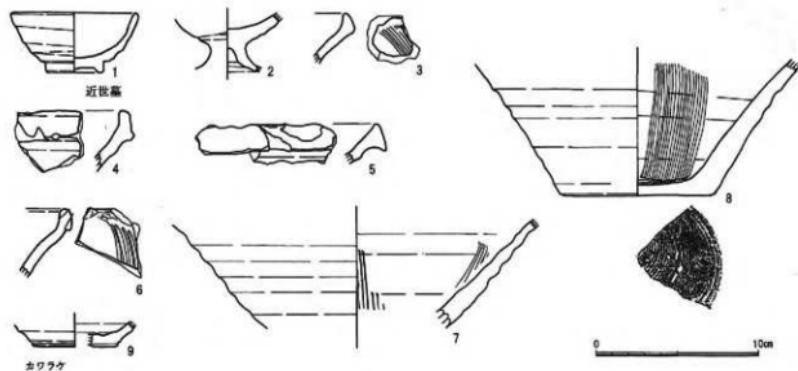


図 71 上石敷遺跡出土遺物実測図

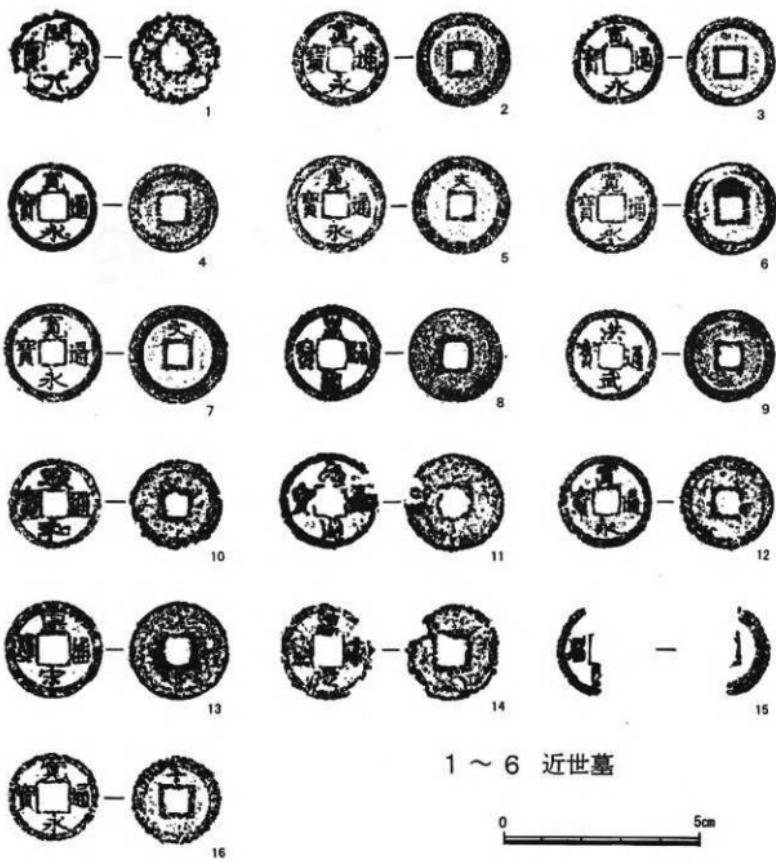
の発見などから、中世以来の活発な人々の社会活動の痕をよく残している。特に、中世に掘削されたと思われる大きな濠跡からは、多量の近世陶磁器の出土が見られ、江戸時代民間信仰として栄えてた富士山信仰の本拠地浅間大社の様子をよく伝えるものとなっている（富士宮市教育委員会 1996・2003）。

中世における富士地域の中核地としての大宮城周辺は、少量ながら 12 世紀前半から遺物の出土が見られ、都市としての景観を現すようになる。ここにその中核を基点として村山浅間神社遺跡、丸ヶ谷戸遺跡、上石敷遺跡、石敷遺跡など中世の諸遺跡が周辺に展開している様子が分かる。それは、各遺跡における出土遺物の構成や数量からその関係を指摘することができる。

b. 丸ヶ谷戸遺跡、上石敷遺跡、石敷遺跡

潤井川の支流である弓沢川右岸に位置する遺跡で、富士山麓の緩斜面に広がる丘陵上にあり、大宮城を中心とする大宮の町の東側縁辺部に展開する遺跡である。

丸ヶ谷戸遺跡 (12) では、墓域を形成していると思われる土坑群や道跡などが発見されている（図 69）。その内訳は、径 125 cm 程度の円形土坑 56 基、長辺 125 cm 程度の方形土坑 6 基、径 290 cm 程度の土坑 3 基、さらに径 300 cm を超える大型の土坑 3 基、500 cm × 350 cm 程度を測る堅穴状遺構 2 基などの土坑群と富士山に向かう幅 300 cm 程度の道跡が 2 条、それに直交する溝などであり、中世～近世にかけて多くの施設の築かれている様子が分かる。その中で土坑の一部は墓としての機能を有していたようで銭貨（北宋銭）が埋納されていたものが見られる（富士宮市教育委員会 2003）。これらの道跡や土坑などからは、少量ながら中世～近世にかけての陶磁器片の出土を確認している（図 68）。それらの年代は、貿易陶磁器の中に 12 世紀まで遡るものも含まれるもの、13 世紀から 14 世紀前半、15 世紀～16 世紀前半、さらに幕末のもので構成されている。このような状況から丸ヶ谷戸遺跡は、中世の時代に尾根筋に富士山へ向かう道とその傍らにある墓跡からなる遺跡であ



1 ~ 6 近世墓

0 5cm

图 72 上石敷遺跡出土錢貨拓影圖

图 74 石峁遗址出土石器实物图

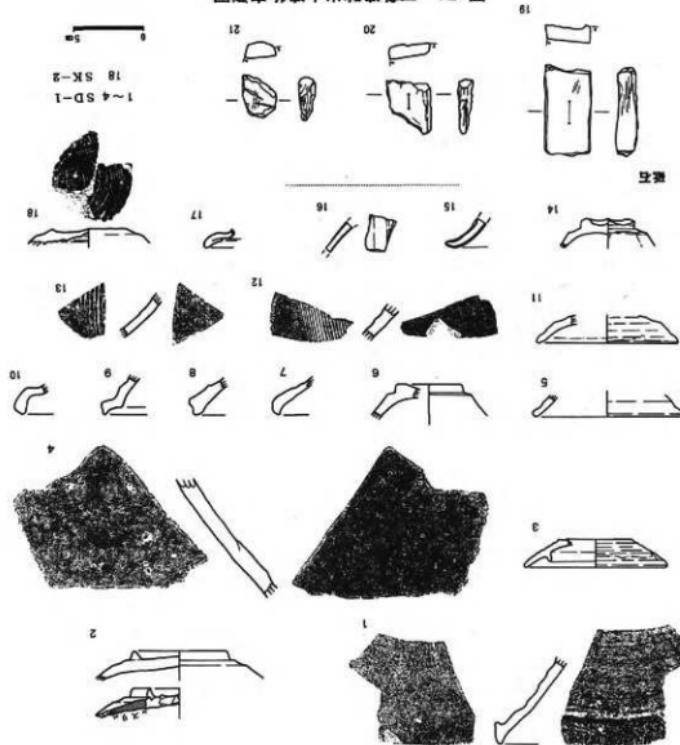
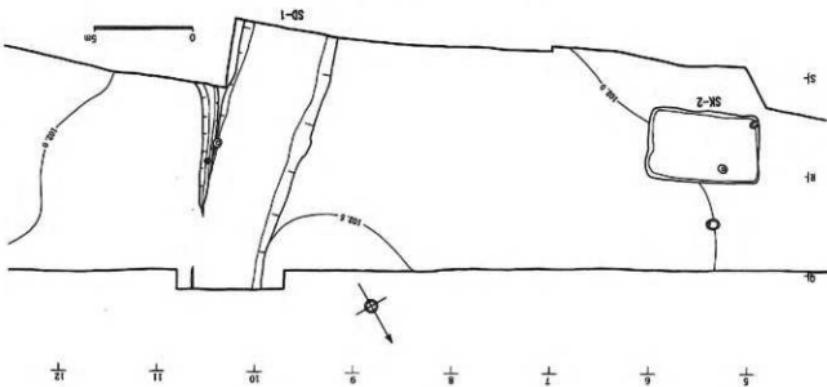


图 73 石峁遗址中世墓葬分布图



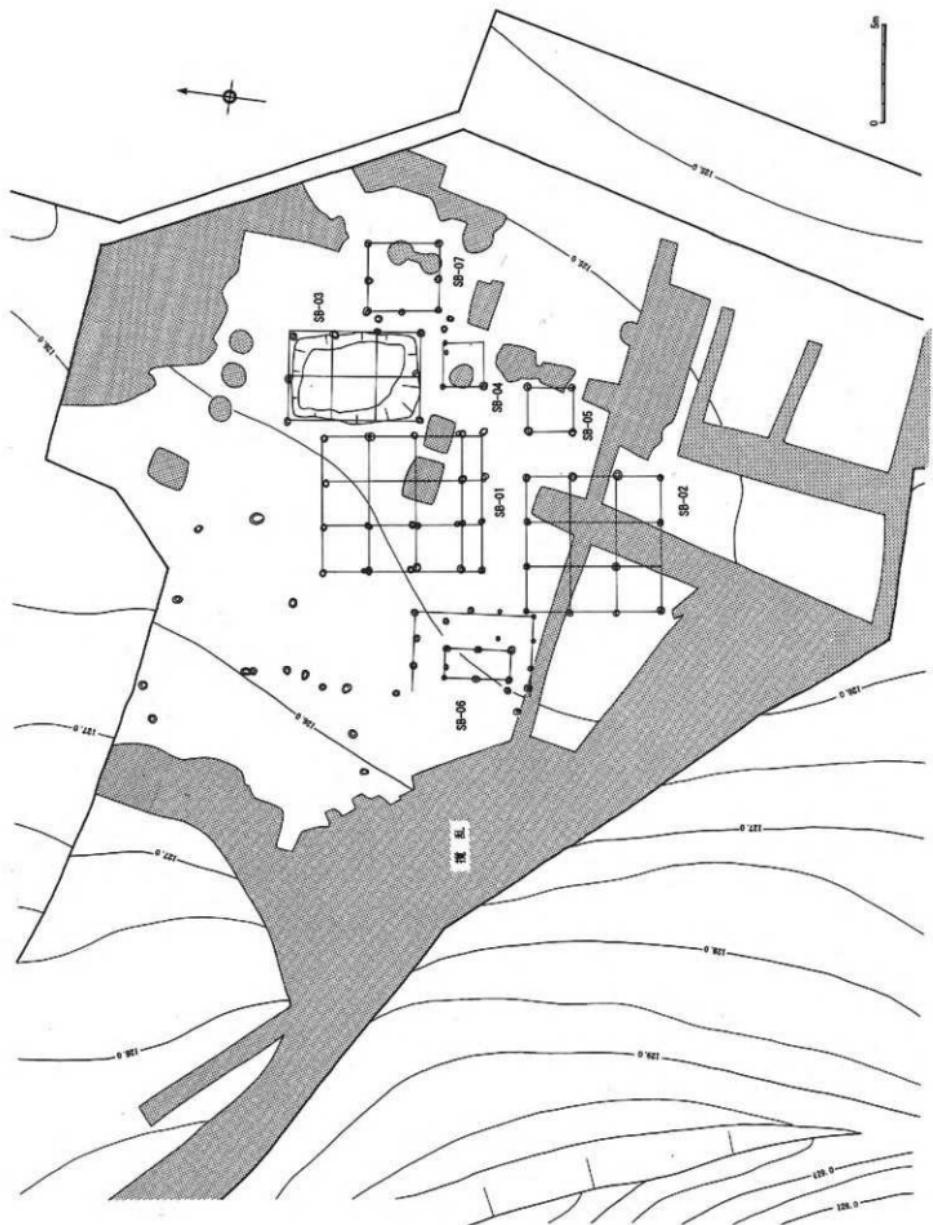


図 75 月の輪上遺跡建物跡実測図

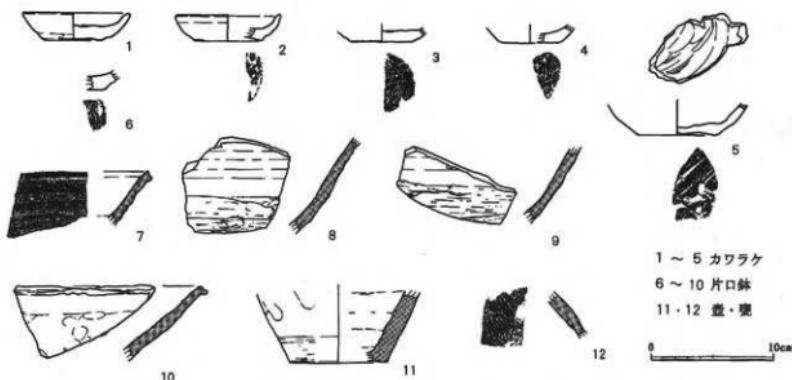


図 76 月の輪上遺跡平地式建物出土遺物実測図

ると言えるのである。

上石敷遺跡（13）では、奈良時代の集落跡の発掘調査に伴い近世墓が発見されている（富士宮市教育委員会 1985）。近世墓では陶器の壺（図 71-1）とともに寛永通宝（六道銭）と火打金、火打石、骨片などの出土を見ている。この発掘調査では、遺構自体の発見は無いものの、15世紀～16世紀の瀬戸・美濃産摺鉢や北宋銭 8枚も採集されている（図 71・図 72）。

石敷遺跡（14）では、富士山を目指す幅 5m ほどの切通し状の道路とその道跡にほぼ併行する、5.5m × 3.5m を測る長方形の堅穴状の遺構などが発見されている（図 73）。道跡は丘陵の縁辺を大きく掘削することにより造られ、しっかりした造成工事の跡が窺えるものである。堅穴状遺構からはカワラケ、道跡からは 12世紀後半の山茶碗や 16世紀代の摺鉢の破片などが出土している（図 74）。さらに、発掘調査区からは、中世～近世陶磁器、15世紀前半の白磁面取壺、青磁端反碗、13

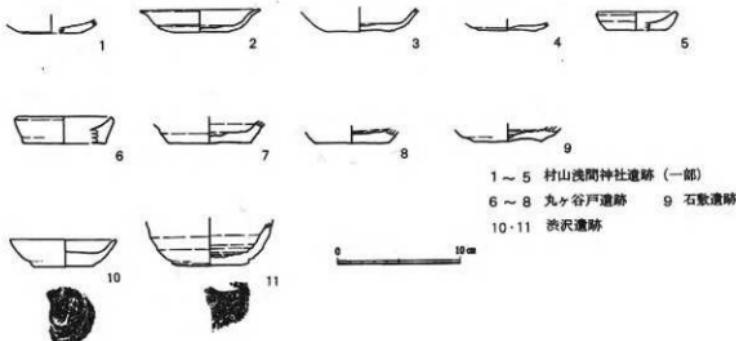


図 77 市内遺跡出土かわらけ実測図

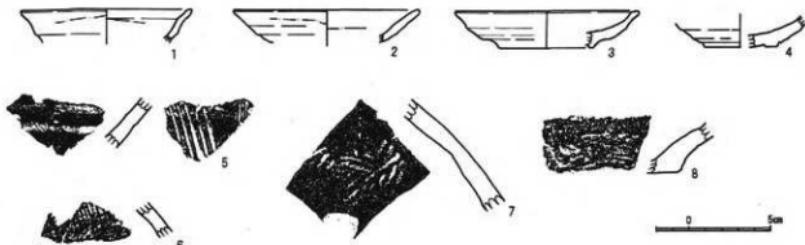


図 78 泉遺跡出土遺物実測図

世紀後半の青磁碗など出土している（富士宮市教育委員会 2000）。

これらの遺跡は、発見された遺構などから一般的な集落や墓の一部であると考えることができる。富士根地区に一定の広がりを持つ中世遺跡として、市内では比較的この段階の遺跡分布の目立つ様子が分かる。近年、中世の領主層の墓ではないかと取りざたされるようになった虚空蔵社古墳は、これらの分布域の中に含まれる遺跡で、疊に覆われた低墳丘を構築していることが確認されている（富士宮市教育委員会 1987）。

c. 月の輪上遺跡

1980 年に実施された発掘調査によって建物跡が発見されている。この遺跡は、星山丘陵上に広がり、標高 125m を測る地点において発掘調査が行なわれ、この地域を代表する弥生時代後期後半の集落跡が発見されている。発掘区は南北に長い丘陵のほぼ中央部にあたり、周囲の谷戸と小高い丘などにより閉鎖的な景観を示す場所である。ただ、南側の谷に対して緩やかな傾斜地となり、そちら側からは広く開放している。この地点においては、弥生時代の集落とともに 13 世紀の建物群が調査されている（図 75）。発掘調査では、3 間 × 3 間の廂付の総柱建物、3 間 × 3 間の総柱建物、3 間 × 2 間の平地式建物、2 間 × 1 間の掘立柱建物 2 棟、1 間 × 1 間の掘立柱建物 2 棟など規則的に並んだ建物跡が発見されている。遺物は平地式建物から発見されており、13 世紀代の陶磁器、カワラケなどが見られる（図 76）。その数があまり多くないので、それから建物跡の性格を判断するまでには至らないが、建物群は屋敷を形成する各種施設であると考えることができ、その中でも、総柱建物や堅穴建物などは特徴的な建物であると言える。堂宇などが想定されれば寺院跡などと考えることもできるが、関連する遺物は確認されていない。ただし、複合する建物群は、比較的大規模な建造物であったことは指摘できるもので、一般的なものとは思われない。これらの建物はそれがやや近接しすぎているような配置を示しており、数回の建物の建替えも行われていたものと考えられる（富士宮市教育委員会 1981）。

この月の輪上遺跡の位置する所は、近世において富士の入山瀬方面より沼久保と大宮へとそれぞれ分岐する地点で交通の要衝であった。それがそのまま 13 世紀の時代に当てはまるかどうかはよ

く分からぬが、この建造物は、周囲が丘や谷に開まれた閉鎖的な場所に建立されているものの、その道の分岐点辺りからはよく見渡すことができる場所に建てられている。東海道から山本、高原経由で大宮に至る街道を評価するならば、その街道沿いに建てられたものであるとも言える。

近年の発掘調査によって登場した富士根地区の遺跡などにより鮮明な状況が認められるように、中核となる大宮城、浅間大社に対して丸ヶ谷戸遺跡、上石敷遺跡、石敷遺跡あるいはカワラケが採集されている渋沢遺跡(9) (図77)、陶磁器が採集されている泉遺跡(15) (図78)、建物跡が調査されている月の輪上遺跡などがそのまわりを衛星のように広がる分布が、相互に性格の異なる遺跡間における相関を表しているものと考えることができるようになってきた。これら一定のまとまりに対して、村山浅間神社遺跡が富士山を目指す山中に築かれたものと想定されるが、富士根地区的遺跡群とは同一河川流域に位置しているものとしても関連付けられるのである。

ここに中世の本拠地としての大宮城あるいは大宮に対して、信仰の領域となる村山浅間神社周辺の位置づけから分かる構造的な関係を遺跡の分布から指摘することができるのである。それは大宮浅間神社(浅間大社)と村山浅間神社との具体的な信仰上の関係と捉えるより屋敷、神社、市場、町屋などから都市を形成した大宮の町との関連で考えるべきものである。面から点への作用は、人的な動きとともに物的な動きを移動という事象として捉えることができるが、地域社会としての括りの中では、極めて特異な動きである。潤井川流域の井出館(6)、南条館(8)などの屋敷地は各地域支配の拠点としての遺跡であり、大宮とも活発な地域間交流が想定されるものであり、一般生活の中では普遍的な環境であると言える。しかし、村山浅間神社の場合は、中世における特殊な性格がその遺跡立地からも類推されるものである。それは、村山浅間神社周辺において実施された遺物分布調査の成果からも言えることで、富士山信仰がまだ一般化していない16世紀以前の遺物がほとんど採集されていない状況からも指摘できる。その周辺が本格的な地域あるいは村を形成する以前、つまり、13~16世紀にかけては、神社城が拠点となり、そこから信仰の場を山中に求めていく様子を思い描くことができる。それが17世紀以降、地域としての村山の活動が本格化し、大宮と村山との交流が一般化することで、様子が一変するようである。それは、山中の村山地区で数多く採集された近世陶磁器が雄弁に物語るものであり、そこに、信仰形態の変化などを伴う村山浅間神社における大きな時代の画期を認めることができる。

大宮城周辺を中核として地域社会を形成する潤井川流域の諸遺跡に対して、富士地域の場合、もうひとつの大きなまとまりを富士川下流域において認めることができる。

d. 松野城跡、荻館

富士川町北松野の中央部、有無瀬川左岸の独立丘陵上に中世の山城である松野城(29)が築かれている。縄張り図などから6箇所の曲輪や土壘、掘切りの存在が指摘されている。この城の北方に200mほどには、駿河国松野郷の領主である松野城主荻氏の居館(30)の所在が、古絵図などの記載から判明しており、L字状に廻る土壘の一部が確認されている(富士川町台山・峰山文化財発掘調査委員会 1976)。居館跡は、南北約130m、東西約100mの規模を測る方形区画の単堀单郭式の形態が想定されている。

松野城の初代城主荻氏ははじめ京都に居り室町幕府3代將軍足利義満に仕えていたが、松野郷

を領有することにより、松野に居住するようになったと言われている。荻氏は、14世紀中頃から200年間に亘って同地を領有することになる。

e. 半在家遺跡、中野遺跡、中野沖田遺跡

松野地区の富士川右岸には中世の遺跡が比較的密集しており、川伝いに分布している。

半在家遺跡（31）は富士川の支流有無瀬川の河口付近にある河岸段丘上の遺跡で、15世紀～16世紀のものと考えられている塗跡や土壘などが発見されている。ここに塗や土壘により区画された方形居館の存在を調査報告書では指摘しているが、具体的な建物跡などはまだ発見されていない（富士川町教育委員会 1986）。遺物は、刀子、釘などの鉄製品、銭貨（北宋錢）、陶磁器などの出土が確認されている。

中野遺跡（33）は、半在家遺跡の下流、富士川右岸の独立丘陵上に展開する遺跡で、縄文時代、弥生時代後期、奈良時代の遺構、遺物などともに発見されている複合遺跡である。2回の発掘調査では、土坑墓、配石墓、竪穴状遺構など墓に係る中世～近世の遺構が数多く広範囲に亘って発見されている。特に、中野遺跡沖田地区で発見された第1配石墓と呼ばれる5.5m四方の規模が想定される大型配石墓は、4.5m×4.35mの方形に粘土が配石を被覆する状態で厚さ20cmに亘り覆われて発見された特異な形態のものである。配石は40cm～50cmの礫を四方の角や各辺に配して作られた方形区画の中を20cm程度の扁平な礫により充填して構築されている。その下部も配石上部同様に皿状に掘り込まれた土坑の底部まで厚さ25cmほどで粘土が敷かれている。この遺構から銭貨8枚（北宋錢7枚、不明1枚）と鉄釘16本が発見されている（富士川町教育委員会 1984）。

中野遺跡の発掘調査が実施された後に、その沖田地区の南側隣接地に対して中野沖田遺跡として発掘調査が実施されている（富士川町教育委員会 1988）。

中野沖田遺跡（34）は、中野遺跡の南側に広がる沖積地内の遺跡で、その北側部分が発掘調査されている。調査では、4間×3間の総柱建物、3間×2間の掘立柱建物、2間×2間の掘立柱建物などの建物群、溝、柱穴などの遺構群、集石を伴う土坑など一部は墓かと思われる土坑群などが発見されている。この調査においては、12世紀後半～15世紀前半の陶磁器が採集されている。この遺跡においては、総柱建物跡の発見が特筆される。

松野地区の遺跡は、すべて東海道より身延山へと向かう身延道沿いに位置しているが、富士川沿いの半在家遺跡、中野遺跡、中野沖田遺跡などそれぞれ様相の異なる遺跡群と南側の尾根上とその裾に広がる松野城、荻館とに遺跡の内容から分けて捉えることができる。領主の屋敷としての後者をその中核として、その周間に前者が展開する景観を考えることができるものである。それらの遺跡は大きくその性格を違えており一括することはできないが、その立地からこれらの遺跡がその生活の多くを富士川に依存していることがよく分かる。

松野では中核となる城館や土坑が密集する墓域などの遺跡が発見されているわけであるが、この中で特に、中野沖田遺跡の特殊性は際立っているものと考えている。この遺跡では、総柱建物跡が発見されており、特別な建物の存在が指摘されている。総柱建物跡は、前述の月の輪上遺跡で発見されているものに類似したもので、特殊な施設の存在を窺わせるものとなっている。

松野城と荻館を中心とする松野地区における中世遺跡の分布は、富士川に直接関わっていること

をよく表している。この松野周辺は、富士川の河川交通を考えた際、最初の船着場（湊）の適所として考えることができる。富士川の作用により形成された左岸の沖積地と聳立する岩本山のある富士市域側では期待されない湊の適所を求めた場合、段丘との比高差などの条件から松野地区を上げることが適切である。太平洋、駿河湾、富士川と渡ってきた物資が最初に陸揚げされた地点として捉えられるのである。その湊周辺に前述の多彩な遺跡が栄え、それを統括したのが松野城、萩館であったものと考えができるのである。松野の場所は甲州に向かう身延道や富士川河川交通など交通の要衝にあり、人や物資の移動にとって重要な場所であったのである。富士川下流域は、これらに遺跡のほか、浅間林遺跡（32）や破魔射場遺跡（35）においても中世の土坑墓など中世の遺構や出土品が報告されており、この地域における活発な人々の活動が窺えるものとなっている。それらは何れも松野城と同じ富士川右岸に立地しているのである。

この物資の集積地を基点として、多くの街道が整備されたのであろう。松野と大宮城を結ぶ道も当然、いくつか存在していたものと思われる。松野の北側から沼久保谷を通って大宮城に抜ける経路、その途中には泉遺跡がある。また、松野の中央付近から星山谷を抜けて大宮に至る道も想定され、その経路上には名刹大悟庵があり鎌倉時代の富士の巻き狩り伝承に現れる王藤内に係る塚などがあるのである。

このように、富士川下流域と潤井川流域では、荻氏の本拠地としての松野城、萩館を中心とした松野と富士大宮司の本拠地としての大宮城を中心とした大宮の2つの中核地が形成されていたことが指摘され、それぞれ、活発な交流のあったものと思われる所以である。そして、2つの地域を中心として、その周囲に集落の展開している様子が想定されるのである。

f. 王藤内の塚

王藤内の塚（16）は星山放水路建設に伴い調査された墓跡である（富士宮市教育委員会 1981）。発掘調査前は、径 4.5m、高さ 20 cm を測る円形の盛土として認識されていた塚あり、その上に墓石と「王藤内之塚」と記された石碑が建てられていた（図 79）。

発掘調査では、盛土とそれに伴う敷石が確認されている（図 80）。敷石は、列石により長方形に区画された内側に並べられた人頭大の円礫によるもののように、2.3m × 1.7m 程度の範囲において確認することができる。ただし、木根や地山の大形礫の作用により、それが存在しない部分が見られ、さらに南側の多くはすでに削平されているよう、本来の状態で残っていなかったものようである。

この敷石の下部および周辺からは 4~5 基の土坑が発見されている。第 2 号土坑と第 3 号土坑からは骨片（頸骨、上下顎骨、四肢骨）および鐵貨（寛永通宝 6 枚）が出土しており、墓に伴う土坑の様子をよく表わしている。この 2 基の土坑は、敷石の下部に位置しており相互に関連付けて考えることができるものである。ただし、土坑自体は単独で 2 基築かれたのではなく、南北方向に長軸を取る長方形土坑を分割して調査している可能性を指摘しておきたい。多分に地山の礫に影響されて 2 基の土坑となってしまったものと思われる。この長方形の土坑は、推定で 1.8m × 0.9m を測るものである。発掘調査では、この土坑以外に 3 基の土坑が確認されているが、それぞれの機能はよく分からぬ。第 4 号土坑、第 5 号土坑については、遺構かどうかかも判断がつきかねる。自然の作

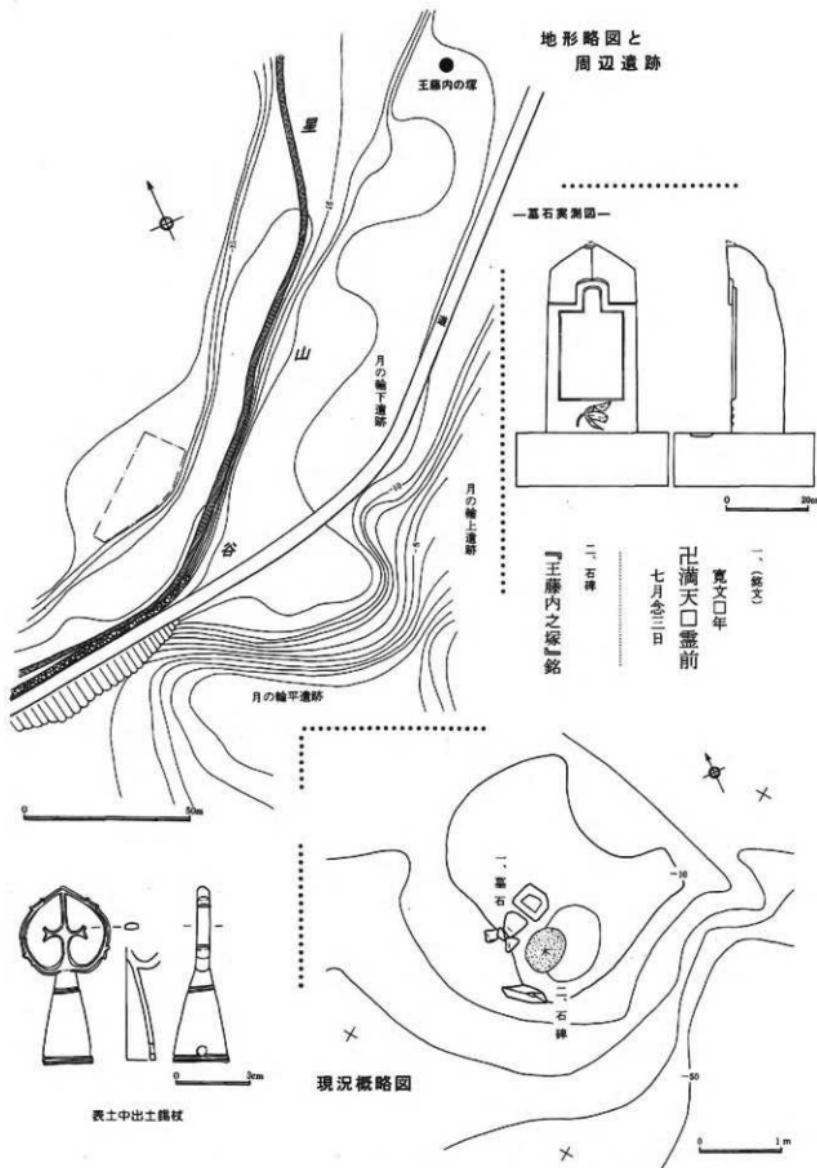


図 79 王藤内の塚現況平面図と出土遺物実測図

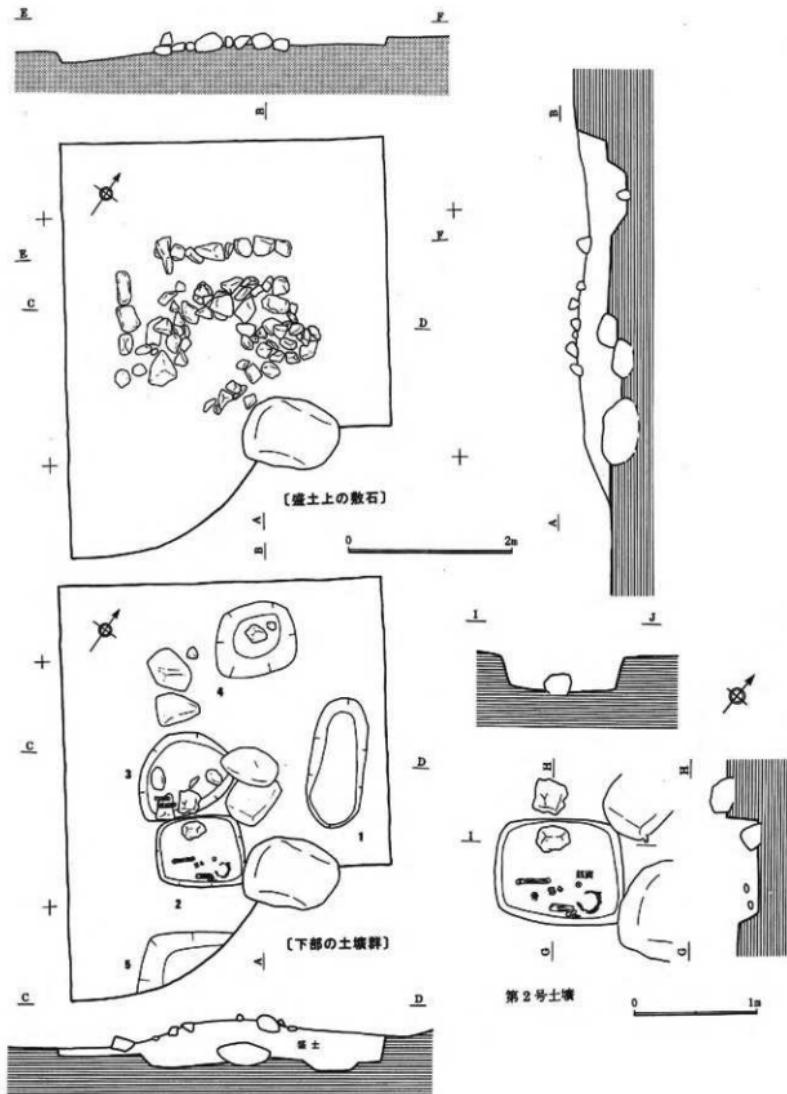


図 80 王藤内の塚実測図

用によりできたもののようにもある。遺物などの出土も見ていない。第1号土坑は、ちょうど、北西側区画の列石部分に認められた土坑で幅70cm、長さ160cmを測る。発掘調査において列石の下部構造は認められないが、区画を伴う敷石の範囲や列石の位置などから北西側区画の列石との関連を指摘することができる。土坑自体の詳細はよく分からぬが、列石との関連を考えると、この敷石を伴う方形区画墓の規模を推定することもできるのである。

下部の土坑の状況も踏まえると、図81のようなN-35°-Wの方向を示す区画墓としての構造が考えられるのである。規模は3m×2.7mを測り、内部に1.8m×0.9mの土坑が埋葬施設として築かれ、その上を盛土と敷石により覆われるものである。この塚の上に建てられていた墓石は、「舟形石塔」型と称される近世のもので、その前面を、ほぼ想定した区画に合わせる向きで設置されていたことになる。墓石に刻まれた銘文には、「寛文年間」が表されており、17世紀に構築された墓であることが分かる。

この墓については、敷石を伴う区画墓としての構造や墓石の銘文などから一般的な墓とは考え難いもので、表土中から出土したとされる錫杖(図79)などから僧侶など仏教関係の人の埋葬が考えられるものであるが、具体的な人物を上げることは難しい。

発掘調査では、王藤内に直接結びつくような遺物などの歴史資料は確認されていない。あくまでも、近世墓のひとつであり、中世に関するものは出土していない。地域の伝承として王藤内に関連する具体的な場所がここではないことは、昭和47年(1972年)に行なわれた発掘調査の成果から十分判断することができる。『王藤内之塚』銘の石碑は、伝承とこの近世墓が特殊で重要なものであったことから、時代性を無視して、ここに後年設置されたものであると言えるのである。

この王藤内の塚と呼ばれている近世墓は、星山谷の中、谷底から5mほどを測る谷間の中段に位置している(図79)。南東側が星山の丘陵で急な崖面となり、やや閉鎖的な地形環境の中にあるが、北東~北側に対しては、徐々に高くなり、前述の街道を考えると、黒田地区に容易に抜けることができる。そして、その街道の脇にこの墓は建立されていたと言えるのである。

松野と大宮を結ぶ交通路は、いくつかの経路を考えることができる。それが中世の頃、どのような道が整備されていたのかは、まだ、よく分かっていない。羽鮨、星山丘陵が比較的急峻な地形である点を考えると、谷筋ごとに道が設けられていたものと考えることは容易である。この星山谷伝いの道もその候補に上げることが、「王藤内の塚」を始めとした近世の考古資料からも想定される

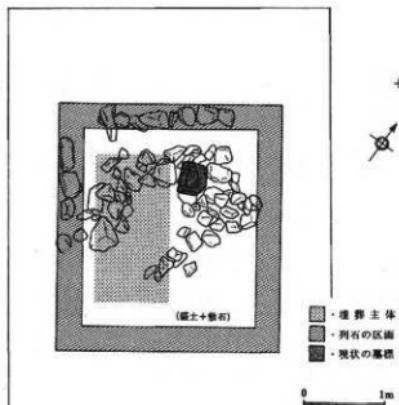


図81 王藤内の塚近世墓構造概念図

ものと考えている。

(2) 中世の富士

富士川から愛鷹山麓の赤渕川までの地域において、城や居館あるいは屋敷などに関連した考古学的に中世を対象とした本格的な発掘調査は、まだ行なわれたことがないようである。そのような状況の中で、東平遺跡など富士郡衙関連遺跡の調査が富士市教育委員会により精力的に進められたことにより、主体となる遺跡の年代ではないものの、中世に関連する資料が蓄積されるようになっている。

この地域では、天文 23 年(1554)今川義元、武田信玄、北条氏康の三将が一同に会して、連合関係を樹立した三将会盟の伝承が伝えられる善得寺城(23)が、富士市今泉付近に所在していたとされている。この伝承の真偽は別として、中世から近世にかけて重要な場所であったことが窺える歴史的な事件である。さらにこの地域は、その経路を変えながらも主要幹道である東海道が古代以来横断し、その東海道の途中には吉原塗が開けていた。このように、陸上、海上交通の要衝で、重要な地域であったわけであり、周辺に数多くの中世遺跡が存在するものと予想される地域である。

a. 東平遺跡、出口遺跡

富士郡衙関連遺跡の主要遺跡である東平遺跡(22)では、第 28 地区においてかわらけの出土がみられる溝、井戸、土坑などが調査されている。この調査地点は、東平遺跡の南端部で溶岩流を基盤とする大渕扇状地の縁辺部にあたり、調査区の南端では富士川の作用による扇状地堆積物が確認されており、南側に広大な富士川扇状地を見渡すことができる場所である(富士市教育委員会 2001)。

発掘調査では、調査区の南側を横断する溝 S D 0 3 と S D 0 4、井戸 S T 0 1、不整形の土坑 S X 0 2 などからロクロ成形のかわらけが出土している。また、同じ調査区の包含層として取り扱われた土層中からも同様なロクロ成形のかわらけが発見されている(図 82)。

東平遺跡ではこの地区以外でも各地区で円形、方形土坑が群単位で確認されているが、その大半は、遺物を持たない構造で、時代の設定ができないものばかりである。中には中世あるいは近世の墓の一部であるものも含まれているようであるが、実態のよく分からぬのが現状である。

広い範囲に広がりを持つ東平遺跡の北側に隣接して出口遺跡(21)が分布している。この遺跡では、富士郡衙に関連する奈良、平安時代の資料の出土は極めて少なくなり、主体的な分布域の範囲外であることが知られるが、中世から近世にかけての構造は、土坑を主体に数多く発見されている。土坑の中には明らかに土坑墓となるものが含まれおり、人骨とともに副葬された品々が発見されている(富士市教育委員会 1981)。

S T 2 1 は、85 cm × 55 cm を測る長方形の土坑墓で、人骨とともに天目茶碗、かわらけ、銭貨(北宋銭 6 枚)小柄などが発見されている(図 83)。また、S T 3 9 と呼ばれる底面で 214 cm × 155 cm を測る大型の袋状土坑は墓かどうか判断できないものの、S T 2 1 出土の小柄とよく似たものが出土している。S T 4 5 は、110 cm × 77 cm を測る長方形の土坑墓で、人骨に伴って銭貨、釘、銅製品などの出土が確認されている。また、115 cm × 90 cm を測る S T 5 8 からは人骨と一緒に永楽通宝を含む銭貨 3 枚、火打金、石英が出土し、125 cm × 95 cm を測り隅丸長方形の S T 7 9 では、人骨とと

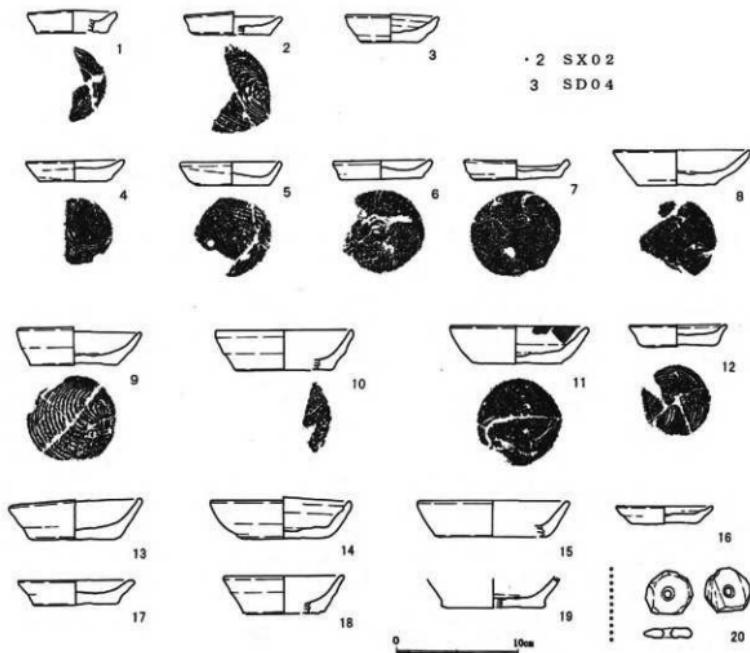


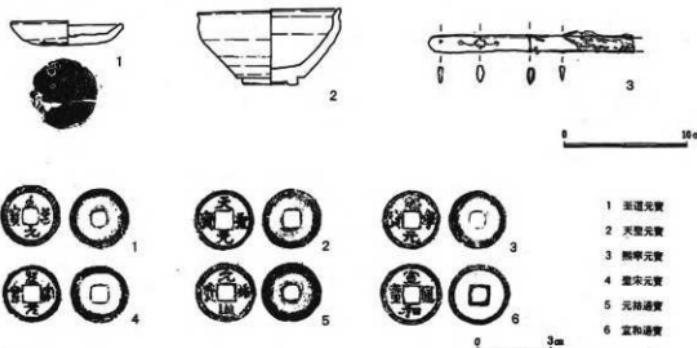
図 82 東平遺跡出土かわらけ実測図

もに永楽通宝を含む錢貨 6 枚が発見されている。これらに他に錢貨を伴うものや人骨がはっきりと残存するもの、配石を伴うものなど明らかに墓としての機能を持つ土坑が 10 基発見されている。いずれも長方形の平面形を指向する点で共通するものであるが、その中には ST 11 のように寛永通宝が埋納される近世の墓も含まれており、中世から継続的に営まれた墓域であることがよく分かる遺跡であると言える。

これらの土坑群の中で発見された ST 78 は、40cm × 35 cm を測る円形のピットで、墓としての土坑とは様相を違えている。ここでは 2 点のロクロ成形のかわらけが発見されている（図 83）。

このように出口遺跡は、中世から近世にかけて墓域として機能していたことが指摘できるわけであるが、遺跡の立地する場所は、前述の善得寺城があったとされる現在の富士市街地から北西側の一段高い丘陵上に位置していることになる。それは大宮と丸ヶ谷戸遺跡の関係によく似ており、善得寺城比定地周辺の状況が解明されると、居館あるいは居住域と墓域の関係をここに指摘することができるものである。

ST 21



ST 78

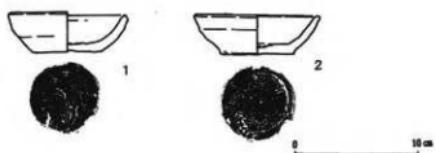
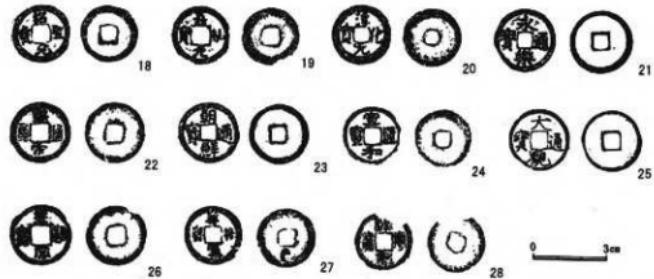
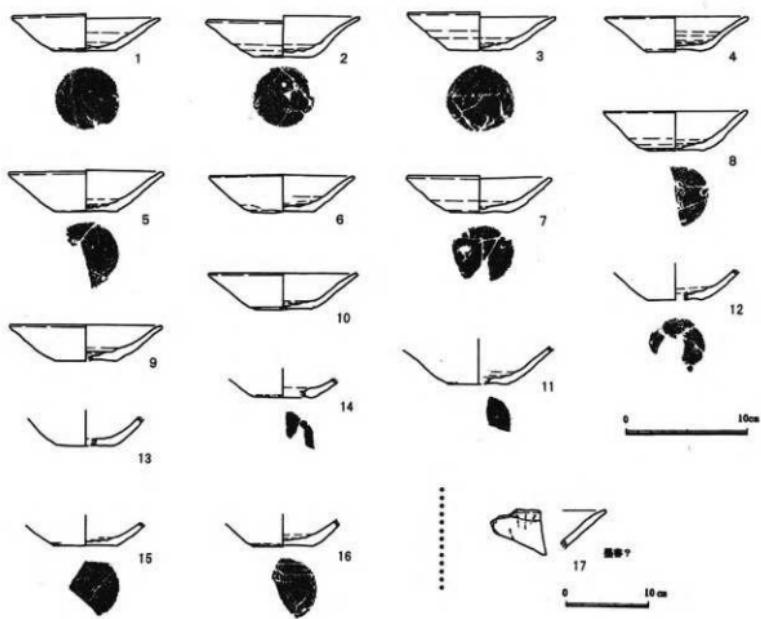


図 83 出口遺跡出土遺物実測図

b. 沢東A遺跡

沢東A遺跡は潤井川左岸の大渕扇状地内に展開する遺跡で、古墳時代前期から継続的に営まれた集落跡が発掘調査されている。遺跡の北側部分における第2次調査では、奈良時代の集落とともに中世～近世の土坑群が発見されている。土坑は35基検出されている。それぞれの形態の違いや遺物を持たないものが多いため、具体的な機能についてはよく分からぬものが多いが、中には、錢貨、礫、常滑の壺破片などを内包しており、土坑墓の様相を示すものがある。墓域を形成していた可能性が指摘できるようである。この土坑の中で、第5号土坑から出土した常滑産の壺破片は、13世紀前半の所産のようであり、この土坑群の開始年代が規定されている（富士市教育委員会1995）。

土坑群の中で第1号土坑と呼ばれる50cm×42cmを測る不整円形の土坑からは、数多くのかわらけと錢貨が発見されている（図84）。発見されたかわらけは、総破片数156点を数えるが、その内、底部は21点を数え、実際の個体数として、その数に近い数量が想定される状況にある。また、遺構に対する発掘調査以前に第1号土坑の周辺で出土しているかわらけがこの156点以外に14点発見されており、その内底部が3点確認されている。これらの内、一部の破片は第1号土坑内出土のものと接合関係にあり、直接関連付けが考えられている。両者と一緒にした点数は170点、内、底部24点を数えることになる。図に掲載したものの中、1～11、13、14、17が第1号土坑で発見されたもの、15、16がそれ以外のもの、12が両者の接合関係にある資料である。いずれもロクロ成形のかわらけで、底部に糸切り痕が残る。口径は底径の2倍以上を測るもので占められ、体部が



18	絶聖元寶
19	嘉祐通寶
20	淳化通寶
21	永興通寶
22	嘉祐通寶
23	明道通寶
24	聖宋通寶
25	大觀通寶
26	皇祐通寶
27	祥符通寶
28	熙寧元寶

図 84 沢東A遺跡第1号土坑出土遺物実測図

直線的に開くものと外反するものが認められるものの、よく似た型式で構成されていることが分かる。

この土坑では、これら数多くのかわらけで覆われ、11枚の銭貨がその下から発見されている。銭貨の中には永楽通宝や朝鮮通宝などが含まれており、一括で出土している遺物の年代の上限を規定することができるものである。因みに、初鑄年代は永楽通宝が1406年、朝鮮通宝が1423年である。

c. 医王寺経塚

富士郡衙関連遺跡やその周辺の発掘調査で確認された中世遺跡の概要を述べてきたが、さらに、この富士市内で採集品として中世の考古資料が知られている。

医王寺経塚は、根方街道沿いの浄土宗の名刹である医王寺の境内にある経塚で、赤渕川右岸の浮島ヶ原を見下ろす丘陵の縁辺で発見されている。発見の経緯は、寺の由来によると、昭和7年（1928年）の台風で医王寺の裏山に茂っていた推の大木の多くが倒され、その後昭和9年（1930年）に倒された大木の根元より経塚に係る遺物が出土したとされている。出土した遺物は、経筒1口、和鏡2面、青白磁合子2組で、経筒の側面には「承安四年歲甲午三月五日僧應」の刻銘を見ることができる（図85）。承安4年（1174年）の刻銘や水草双鳥鏡である和鏡の盛行する年代などから12世紀後半代の建立が窺える経塚の一括資料であると言えるものである（富士市教育委員会1988）。医王寺経塚出土品と同様に重要な出土資料として、昭和39年（1964年）に富士市今井で公園の整備中に発見された2基の五輪塔を取り上げることができる。この五輪塔の1基には文保2年（1318年）の年号が刻まれており、現在では、それらの出土した場所を東海道沿いにあった群集する中世墓「砂山中世墓群」として捉えられるようになっている（富士市教育委員会2001）。この墳墓群の近くには古代以来「吉原湊」として栄えた海運交通上重要な湊が位置している。

（3）富士地域の中世遺跡

この富士地域における考古学的な見地から見た中世の遺跡を取り上げてみたが、これら以外にも富士山山頂で発見された三島ヶ嶽経塚（佐野武勇1930）や富士市天間の横道経塚（佐野武勇1934）などが戦前から注目されていた資料として上げることができる。

富士川下流域や潤井川流域では、前述のように比較的多くの中世遺跡のあることが分かる。その中で、出土遺物の種類あるいは量や遺跡の分布状況などから、大きなまとまりとして、大宮城を中心とする大宮、松野城を中心として松野の2つの地区の存在が大きく浮き彫りにされる。富士市域については、富士郡衙に関連する遺跡の調査で確認されている中世遺跡など遺跡の点在が分かることから東海道筋のまとまりとして拠点となる遺跡の存在が想定される。実際の発掘調査とその成果が今後期待される地域ではある。富士山南麓は、日蓮宗系の寺院を主体として中世以前にその縁起を持つ名刹が数多くある。中世遺跡がその数に呼応するような状況にあるならば、遺跡数は飛躍的に増えるものと思われる。遺跡に対する幅広い見識の中で慎重な対応が必要となるものと考えられるのである。

松野は、富士川の河川交通に係る重要な地点であることを指摘した。太平洋の海上交通（若林1989）に結びつく各河川交通のひとつと考えると東日本を巡る物資の集積場所であるとも言える。

大宮に関連する潤井川や神田川などの中小河川では大量な物資の運搬が期待できない点を考えると、その役割は大きなものであったと考えができる。ただし、直接湊としての機能が分かる遺跡・遺構などはまだ発見されておらず、具体性に欠いている。今後の大きな課題である。

物資の流通を考えると、その集積場所としての松野地区と一大消費地である大宮の関係が成立することは再々述べているが、町が依存する経済活動の違いとしても捉えられる。そこで、大宮城や浅間大社遺跡から出土している貿易陶磁器や国産陶磁器、かわらけ類は他の遺跡をその数量や種類において凌駕しており、その交易の広さや活発な政治、経済活動の痕が窺われる。ここに富士地域における中心として繁栄した大宮の姿を見ることができる。そこには、居館、寺社、市場、町方などからなる町並みの形成と物資の交易から指摘される都市の存在を予想することさえもできるのである（富士宮市教育委員会 2000）。富士地域の中世は、大宮の町を中核的な都市として、物資の供給先として盛んな商業活動の舞台となった松野、東海道など主要幹道を抱える富士とに分けて捉えられる。そのような3つの核となる地域割の中で、各地域領主の屋敷や周辺集落が造営され、中道往還などの街道が整備されていたものと考えられるのである。

村山浅間神社遺跡は、中世においてこのような地域社会の中の取り込まれた信仰遺跡として捉えられる。発見された遺構の形態やその立地環境など、各地域との構造的な違いを比較すると、その特殊性がより鮮明となるのである。

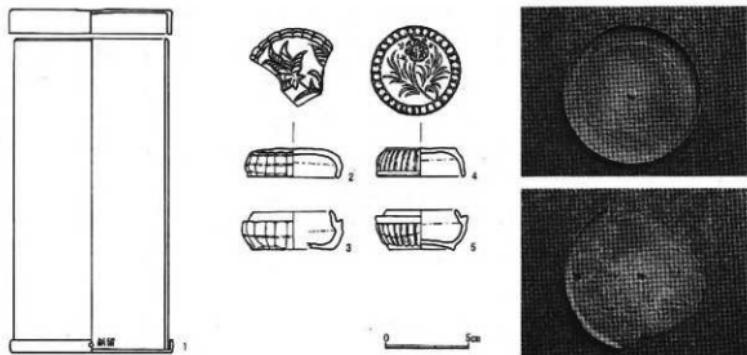


図 85 医王寺經塚出土遺物

4.まとめ

富士川下流域を含めた富士地域の平安時代遺跡及び中世の遺跡の動向について述べてみたが、時代の移り変わりとともにその様相が大きく変化している。中核地としては、3つの地区が抽出されるが、政治、経済の中心となる奈良時代～平安時代の富士郡衙が造営される富士市域から中世の中核都市となる大宮へ時代とともに移り変わる様子がよく分かる。その中で、松野は河川交通の要衝

として甲斐の色濃い影響を受けながら独自の発展を示す。そして、これらの本拠地を中心として周辺に多彩な集落が形成されるのである（図 86）。

奈良時代以後律令体制下では、東平遺跡を始めとして富士市内の有力な遺跡がその大きな存在感を示している。ここに富士郡衙を形成する遺跡群が造営されるものであり、この地域の中核を築いている様子が分かる。その核となる富士郡衙を中心に、直接関連する沢東 A 遺跡や中桁遺跡あるいは宮派遺跡などがその周囲に広がっている。その一大拠点に対して、山間地開発のために造営された権現遺跡や石敷遺跡などの富士宮市内の遺跡や富士市天間代山遺跡などが潤井川中流域に展開するのである。

富士郡衙関連遺跡は、10世紀を迎えるころその勢力が弱くなり、徐々にその動向がはっきりしなくなる。そして、郡衙関連遺跡の終末段階に忽然と富士市大渕の山中に岩倉 B 遺跡や富士宮市村山に村山浅間神社遺跡が登場するのである。さらに、この段階には、富士川町の浅間林遺跡の本格的な造営が始まり、やや遅れて同じ富士川町の破魔射場遺跡がそれに追随するように登場する。それは恰も、中核が富士川の対岸からこの富士川右岸の地域へ移動したような状況となるのである。ここで、注意しなければならないのは、それぞれの保有する土器型式の違いである。富士郡衙関連遺跡は、8世紀前半に駿東型壺を煮沸形態の土器様式を醸成させ、8世紀後半以降に駿東型壺の世界を開花させている。その中に甲斐型壺の影響がまるで人気商品のひとつかのように広がりを見せるのである。ところが9世紀後半から本格化する浅間林遺跡では、その状況は一変する。この遺跡では、主体となるのは、甲斐系の諸型式であり、一般生活に直接係る煮沸形態にその状況は如実に反映されるようになる。ここでの駿河系は壺類に客体化して、富士郡衙関連遺跡における意味合いを失う。それがさらに破魔射場遺跡段階となる在来系土器の系譜は払拭され、新たな土器様式が形成されるようになる。この様式は以後中世のかわらけまで系譜を辿るわけであるが、この時期の遺跡が極めて少なく、まだその具体性には欠く。

この拠点的な集落遺跡の動向に対し村山浅間神社遺跡の位置づけを考えると、浅間林遺跡との関連が大きく評価される。灰釉陶器の保有、甲斐型壺、甲斐型壺の構成などその土器の組成はよく似ているのである。同じような地形環境にある岩倉 B 遺跡は、富士郡衙に関連してその終末段階に山中に進出した遺跡であり、村山浅間神社遺跡とは性格を違えるものと思われる。そして、その違いが両者の相前後する年代の違いとして表れているのかも知れない。

浅間林遺跡の土器様式は、甲斐の型式で構成される。各地方の支配体制がしっかりと機能しているのならば、この遺跡は甲斐の遺跡として捉えるべきであるが、各国の周辺地域などでは政治的な領域と生活領域を違えることも珍しいことではなく、国司、郡司の支配領域が各国を規定するとしても、一般生活がそれをうまく反映するとは限らない場合もある（註2）。このように、浅間林遺跡は甲斐に対する依存が大きい集落であったと考えられ、この時期の駿河における標準的な一般集落として扱うことはできないものなのである。

浅間林遺跡と甲斐との関連は、甲斐による富士川下流域の開発によるもので、律令体制が徐々にその機能を失うようになった段階の甲斐による富士川水運の掌握にあったものと考えることができそうである。海上及び河川交通を通じた物資の流通を整備して、活発な交易を図るために政策としてその開発は重要であったと思われるもので、太平洋側の玄関口としての性格をこの浅間林遺跡に

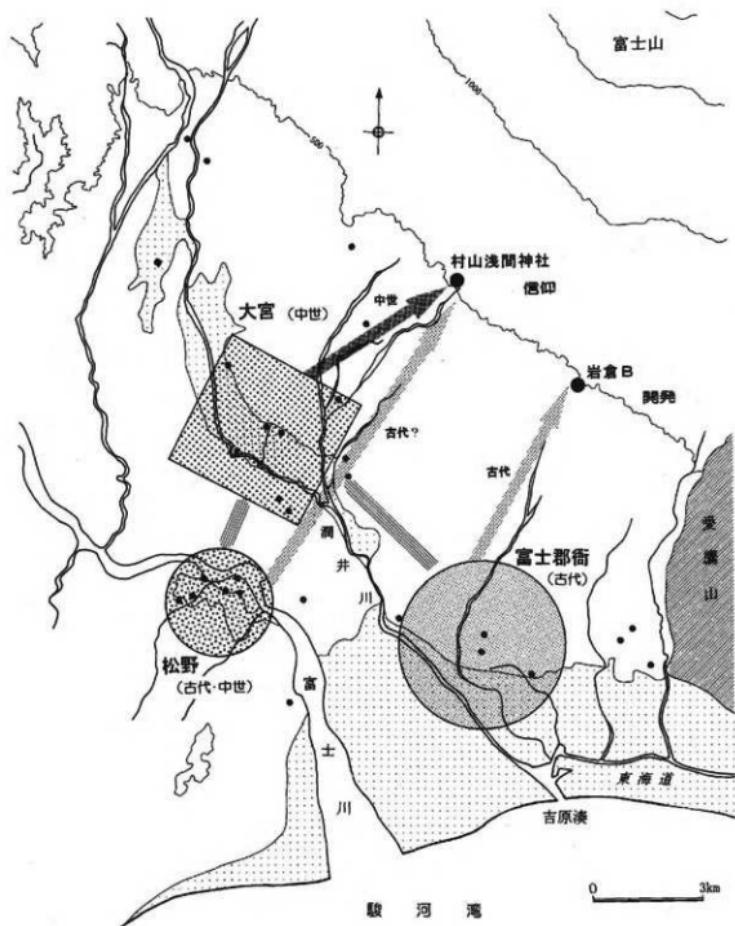


図 86 古代・中世の本拠地想定図

持たせたのではないだろうか。このことは、前述したように一定の空白期を経て中世の遺跡にも当てはまることで、この地で中世には松野城を中心として拠点を形成するようになるのである。

富士川を媒介として河川交通の要衝として浅間林遺跡を評価すると、その土器様式と遺跡の所在がある程度理解できる。そして、村山浅間神社遺跡は、この浅間林遺跡など甲斐の影響の強い富士川下流域の遺跡を拠点とした中核に対する周辺の集落として、富士山山中へ進出した遺跡であることが、その土器様式の類似性から指摘できるのである。村山浅間神社遺跡から出土している灰釉陶器が三河国二川窯の製品であることは、その実態を土器の流通の面から傍証しているものと思われ非常に興味深いのである。

10世紀までに郡司制は衰退してその機能を失い、郡司の国衙雜色人化が進む。この国衙雜色人化的進行により世襲郡司から離れた富士郡の郡司富士氏は、その職と兼務する富士浅間大神祭祀職の職務を重視するようになる。この時点で富士郡の中核は、富士市伝法あたりから富士宮市大宮へ移動し、大宮に大宮城の初源的な屋敷が築かれるようになる（植松 2000）。ただし、大宮城において、10世紀代の遺物が採集されるものの本格的な開発の窓開るのは、12世紀に入ってからのように、富士群山関連遺跡の衰退期にうまく整合してはいない。

中世になると富士地域の中核は大宮となるが、富士氏が律令官制のなかで富士浅間大神祭祀職を重要視して大宮浅間神社（浅間大社）に直接係わることにより、山間地の水田や畑作において生産性のあまり望めないこの地域でも一大拠点を形成することができたのである。富士大宮司の本拠地である大宮城から出土の数多い貿易陶磁器から、富士大宮司が大名クラスであったことも指摘されている（小野 2003）。この拠点としての大宮あるいは大宮浅間神社に対して、村山浅間神社における13世紀の開発が評価されるのである。村山浅間神社が富士山信仰の拠点として独自の発展を示す背景には、このように大宮の係わりを考えなくてはならない。

『富士大宮司系図』によれば、村山浅間神社の中興の祖とされる賴尊は、富士大宮司21代富士直時のいとこであり、「富士正別当、村山三坊等ノ祖」と記されている。賴尊が富士大宮司に関連することは、大宮と村山の関係を具体的に表わす事例として重要である。賴尊は文保年中（1317～1319年）の人であるとされている（註3）。

（渡井）

＜註＞

1. 今回の調査で発見された竪穴住居には、それほど宗教色は強くないが、出土が確認されている綠釉陶器稜碗の素地や「朝」と記された墨書き器などとともにその特異な立地環境を大きく評価して周辺に宗教施設の存在を想定しておきたい。丘陵上に展開する掘立柱建物で構成された遺跡の場合、発掘調査以前に地表面で採集される遺物は限られている。村山浅間神社周辺の丘陵は、ほとんどが山林となっており、さらにその状況を困難なものにしている。山岳信仰に係る施設の発見には、今後の周辺に対する慎重な調査が必要であると痛感するものである。
2. 志太郡衙跡である藤枝市の御子ヶ谷遺跡（藤枝市教育委員会 1981）では、出土している土師器の大半が遠江のもので占められている。志太郡は駿河国に属すが、駿河の土器型式である駿東型壺や駿東型甕の分布範囲からは外れている（向坂 1987）。この場合、宇津谷峠を境に土器型式の

大きな違いが認められるわけであるが、志太郡としての郡単位では遠江の土器型式を保有するひとつのもとまりを持つものである。御子ヶ谷遺跡の土器型式は、富士川下流域の一部地域に登場する甲斐の土器型式とはその分布の実態が異なるものであるが、国境が分布を規制しない点ではよく似ていると言える。

3. 天保年間に成立した新庄道雄の『駿河国新風土記』富士山条に見られる頼尊に関する記事による。

《参考文献》

- 植松章八 2000「特論1 古代・中世の富士氏」「元富士大宮司館跡」富士宮市教育委員会
- 小野正敏 2003「威信財としての貿易陶磁と場」「戦国時代の考古学」高志書院
- 佐野五十三 1990「清郷型壺の研究—煮沸形態からみた古代末の東海地方—」「研究紀要」Ⅲ 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐野武男 1930「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」「考古学雑誌」第28号第10号
- 佐野武男 1935「富士郡鷹岡町天間字横道出土の和鏡」「静岡県郷土研究」第4輯 静岡県郷土研究協会
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001「富士川S.A.開通跡」
- 須田勉 2002「国分寺・山林寺院・村落寺院」「季刊考古学」第80号 雄山閣
- 藤枝市教育委員会 1981「日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—奈良・平安時代編—」
- 富士川町台山・峰山文化財発掘調査委員会 1976「台山城跡」
- 富士川町教育委員会 1981「浅間林道跡発掘調査概報」
- 富士川町教育委員会 1984「中野遺跡」
- 富士川町教育委員会 1986「半在家」
- 富士川町教育委員会 1988「中野川田遺跡発掘調査概報」
- 富士川町教育委員会 1991「浅間林」
- 富士市教育委員会 1981「横沢古墳・中原1号墳・伝法道跡群(伝法A~E地区)・天間地区」
- 富士市教育委員会 1988「富士市の埋蔵文化財(古墳編)」
- 富士市教育委員会 1995「沢東A遺跡第2次調査」
- 富士市教育委員会 2001「東平遺跡 第28地区発掘調査報告書」
- 富士市教育委員会 2001「富士市の文化財」
- 富士市教育委員会 2002「東平遺跡 第16地区(三日市廐跡)、第27地区発掘調査報告書」
- 富士宮市教育委員会 1981「月の輪遺跡群」
- 富士宮市教育委員会 1981「月の輪遺跡群II」
- 富士宮市教育委員会 1987「富士宮市古墳実測調査報告書」
- 富士宮市教育委員会 1993「富士宮市の遺跡」
- 富士宮市教育委員会 1996「浅間大社道路」
- 富士宮市教育委員会 2000「元富士大宮司館跡」
- 富士宮市教育委員会 2003「浅間大社遺跡II」
- 富士宮市教育委員会 2003「富士宮市の遺跡II」
- 向坂鋼二 1987「考古学的方法による静岡県の地域区分」「静岡県史研究」第3号 静岡県

第 VII 章 まとめ

第1次～第3次調査で、村山浅間神社遺跡は、遺跡の時期が、大きく2段階に分かれるようである。平安時代中ごろの9世紀後半～10世紀前半には、堅穴住居と溝が、中世以降、現在に至るまでは、造成面と礎石建物などが、構築されている。

平安時代の遺構は、丘陵最頂部の標高510m付近にあり、富士山西南麓の集落としては、最高所となった。共伴遺物は、綠釉陶器素地稜碗、灰釉陶器碗・皿、灰釉陶器壺、土師器壺・甕、鉢で、土師器が甲斐型土器で占められるという点、また、富士宮市では初となる綠釉陶器の出土があった点、また、溝出土の壪体部外面に、「朝」の墨書が確認された点など、特異な内容を持っている。堅穴住居に関しても、北壁に竈を構築しているにも関わらず、堅穴住居中央やや東よりに、炉跡がみられる点は、低地でのありかたとは、異なっている。

中世については、土の移動の激しい丘陵地であり、また神社域であったためか、遺物の出土は決して豊富ではなく、時期の比定には慎重を要すると考えられる。しかしながら、境内に、丘陵斜面を削平して、人工的な平坦面を少なくとも3箇所作り出していることが確認されたのは、富士修験の中枢と考えられる村山浅間神社のありかたを探る上では、重要であると考えられる。造成面は、境内の東端と西端に確認され、東端のI区では、15世紀の造成が想定できる平坦面が確認された。盛土中には、写経石と錢貨が混入されており、地鎮・鎮壇行為に伴う埋納の可能性があると考えられる。出土状況は、錢貨がやや上層に、写経石がやや下層に出土する傾向がある。錢貨はすべて永樂通寶以前の渡来錢で、寛永通寶を含まない点から、それ以前の造成が想定でき、15世紀後半には、行なわれた可能性がある。西端のII区A地区は、造成面上の遺物が、中世においては15世紀後半の古瀬戸縁釉小皿を上限として、かわらけ、錢貨、和釘が出土し、造成最下部と考えられるTr1では、常滑の甕が出土し、造成が2時期にわたる可能性が考えられる。また、II区B地区では、やや方向の異なるもう一つの区画が想定されるが、II区A地区の2時期にわたる造成面と、II区B地区の造成面との関係がどのようなものであったのかは、両地区の間の樹齢数百年と推定される大スギ保護の為未調査であり、不明のままである。また、II区北の丘陵頂部にIV区があるが、IV区からも、15世紀後半の古瀬戸丸皿、折縁深皿、擂鉢が出土しており、II区と間に共通時期があった可能性がある。なお、このII区は、西側を現在の道路によって著しく削平されており、遺物の分布からは、平坦面の中心は削平部分にあったと考えられり不明のままである。また、造成方法は、I区、II区とともに、地山を削平して平坦面を構築し、盛土中に写経石を混入している。

近世については、各調査区に陶磁器が含まれる。I区では、平坦面上に構築された礎石建物跡と、集石土坑が近世の遺構と考えられる。礎石建物は、地山削平部分の平坦面に、集石土坑は、盛土を掘り下げて構築されており、両者には違いがみられる。礎石建物は、2間×1間の規模であり、正面と考えられる南面側の桁行きが20cmほど短い構造となっている。各遺構に伴う遺物ではなく、造成面上で検出された土器・陶磁器類の年代を充てると、17世紀後半～19世紀後半と、幅を持つことになる。

村山浅間神社遺跡は、平安時代中頃に一時期居住がされたが、その後は認められなくなり、遺構を伴って、明確に神社域を形成したと考えられるのは、中世に至ってからようである。遺物の状

況からは、中でも 15 世紀に一つの周期があるようである。

富士山修験に関わる村山浅間神社遺跡の成立を考える上で、今回確認された、9 世紀後半～10 世紀前半の堅穴住居と溝の位置づけは重要である。富士修験は、聖徳太子・役小角を伝承に持ち、以後、12 世紀中頃の末代上人によって完成したと考えられている（若林 2002）。9 世紀後半～10 世紀前半という時期は、200 年程以前の時期となり、末代上人との関連は極めて薄いと考えられる。

近世以降には、修験道は、明治初年の神仏分離令によって、解体させられたとされ、村山修験も、次第に縮小傾向をたどると考えられている（富士宮市 1971）。調査区内では、近代以降に構築された遺構はⅦ区の高根層鎮守社以外ではなく、主たる造成面は、現在村山浅間神社社殿、大日堂、護摩壇が構築される平坦面となるようである。

しかし、発掘調査に伴って行われた、村山浅間神社周辺分布調査では、現在の村山地区の住宅地部分を越えて、広範囲に中世から近世、近代の土器・陶磁器の分布が確認された。数量的には、明治以降の資料が最も多く表採されたが、次いで近世の資料も表採された。村山の集落の、近世以降の活発な生活の様子が窺える。表採資料からは、17 世紀前半の資料が一定量含まれることが注目でき、また、表採品に子供が使用したと考えられる玩具類や、女性の化粧道具などの割合が、一般集落に比べて少ないという指摘（註 1）がある。これらは、室町末期の戦国時代が収束した後の村山修験のありかた、また、信仰に携わる集落としての性格を反映しているとも考えられる。

富士山信仰の成立に深く関わっているもののひとつに富士山の火山活動がある。現在は、約 11,000 年前から現在まで新富士火山活動期とされており、そのなかでも、約 2,200 年前から現代までは、一つの活動期に括られているが、この活動期は、富士山の山腹から噴火する側噴火を繰り返す時期とされる。有史以来の噴火活動については、天応元（781）年以来 10 回以上の噴火が記録されており、そのうち大規模であったと推定される噴火については、延暦 19～21 年（800～802）（『日本紀略』、貞觀 6～7 年（864～865）（『日本紀略』、『日本三代実録』）があげられている（土 2002）。中でも、天応元年から永保三年（1083）までは、時期的に集中して噴火活動が起つたらしい。最も近い年代では、富士山の東南山腹に標高 2,693m の宝永山（御殿場市）を誕生させた、宝永 4 年（1707）の宝永大噴火があげられる。本遺跡の平安時代遺構は、まさに富士山の噴火活動の盛んな時期にあたると考えられる。

（佐野）

（註 1） 堀内秀樹氏（東京大学文化財調査室）より近世陶磁器の鑑定にともないその用途についてご教授していただいた。

《 参考文献 》

- 大高 康正 2003 「中世後期富士登山信仰の一覧点－妻口村山修験を中心に－」『帝塚山大学 大学院人文科学研究科紀要』第 4 号
- 宮家 準 1990 「富士村山修験の成立と展開」『山岳修験』第 6 号
- 若林 敬之 2002 「II 部 富士山と人々の暮らし 1. 富士山…神の山・眺める山から登る山へ」

- 「Ⅱ部 富士山と人々の暮らし 2. 富士曼荼羅の世界』『富士山の自然と社会』
- 「Ⅲ部 富士山の自然灾害 1-2 富士山噴火とその灾害のさまざま』『富士山の自然と社会』
- 土 隆一 2002 「I 部 1. 富士山の形成』『富士山の自然と社会』
- 小山 真人 2002 「I 部 2. 富士山の火山としての特性』『富士山の自然と社会』
- 富士宮市 1971 『富士宮市史』
- 富士吉田市教育委員会 2001 『富士山吉田口登山道関連遺跡』
- 富士吉田市教育委員会 2003 『富士吉田口登山道関連遺跡Ⅱ』
- 富士吉田市歴史民俗資料館 2000 『富士山登山案内図』
- 富士宮市郷土資料館 1993 『富士山村山口登山道跡調査報告書』
- 富士宮市 1988 『富士宮市の自然』
- 山梨県考古学協会 1992 『甲斐型土器—その編年と年代—』甲斐型土器研究グループ第1回研究集会資料
- 瀬戸市教育委員会 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1992 『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』

報告書抄録

ふりがな	むらやませんげんじんじやちょうさほうこくしょ						
書名	村山浅間神社調査報告書						
副題名	遺跡範囲確認調査編						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	渡井英蕃、佐野恵里、武田英俊（株式会社東日）						
機関	富士宮市教育委員会						
所在地	〒418-8601	静岡県富士宮市弓沢町150番地 TEL 0544-22-1187 mail:e-bunka@city.fujinomiya.ne.jp					
発行年月日	西暦2005年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
村山浅間神社 遺跡	富士宮市 村山字水神 1151番地	市 184	35° 15' 30"	138° 40' 10"	20040609 20041008	約1,000	村山浅間 神社学術 調査に伴 う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
村山浅間神社 遺跡	社寺	縄文		土器	富士修験の中核である村山浅間神社遺跡の調査中世文書に記される富士山奥法寺跡である可能性。		
		平安	堅穴住居 溝	土師器 綠釉陶器素地 灰釉陶器			
		中世	造成面	国産陶器 かわらけ、釘、 錢貨、写經石			
		近世	礎石建物	国産陶磁器			
		近代	礎石建物	国産陶磁器			

写 真 図 版

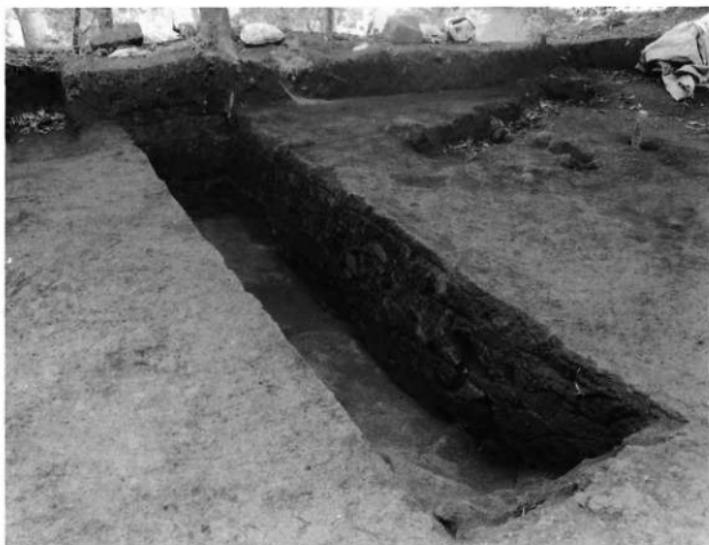


A. I 区 碇石建物1全景



B. I 区 西壁

図版 2



A. I区 Tr 1



B. I区 集石土抗1検出状況



A. I区 集石土抗2検出状況



B. I区 集石土抗2

図版 4



A. II区 A地区全景



B. II区 A地区西壁（南側）



A. II区 Tr1



B. II区 Tr3

図版 6



A. II区 Tr2西壁 (北側)



B. II区 Tr2西壁 (南側)



A. II区 Tr6北壁



B. II区 B地区全景

图版 8



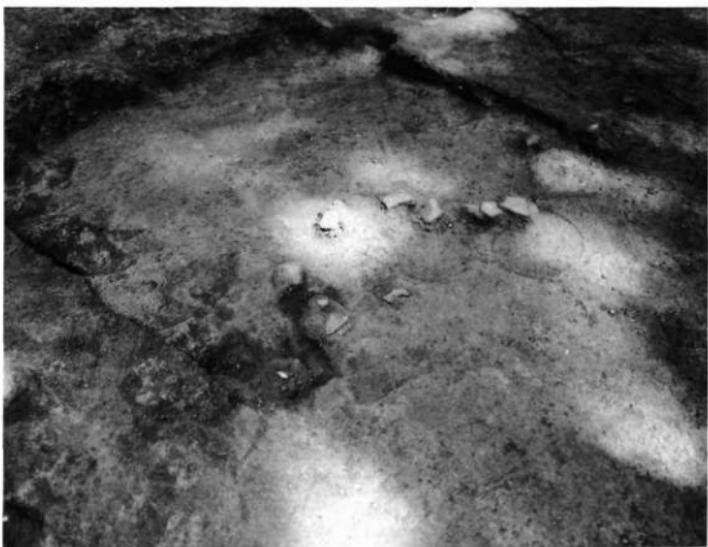
A. II区 Tr5西壁



B. III区 全景



A. III区 竪穴住居1

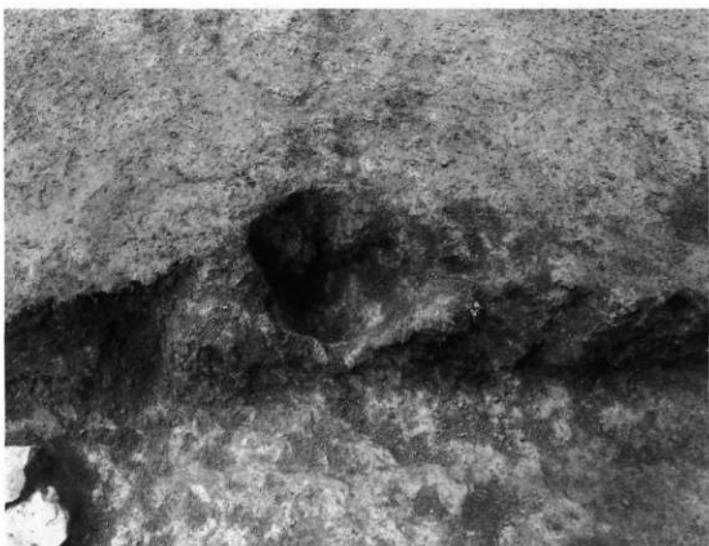


B. III区 竪穴住居1完堀

図版 10



A. III区 竪穴住居1竪



B. III区 竪穴住居1竪完堀



A. III区 溝1



B. III区 土坑2

图版 12



A. VI区 北壁



B. VII区 碣石建物1

図版 13



A. I 区 灯明皿上皿 (図 41-2)



B. I 区 灯明沢上皿 (図 41-3)

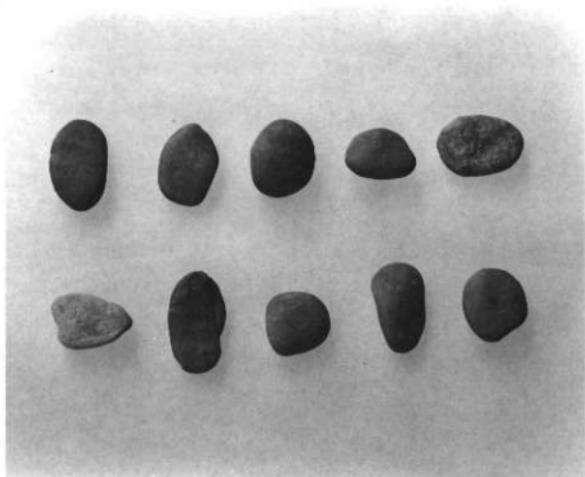


D. I 区 花瓶 (図 41-7)



C. I 区 香炉 (図 41-6)

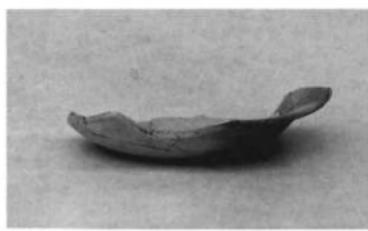
図版 14



A. I区 写経石 (図 45)

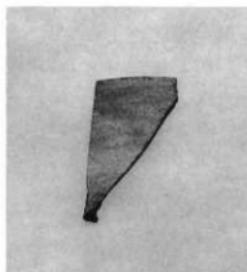


B. II区 かわらけ (図 46-7)

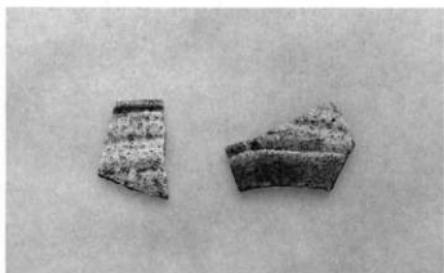


C. IV区 かわらけ (図 49-9)

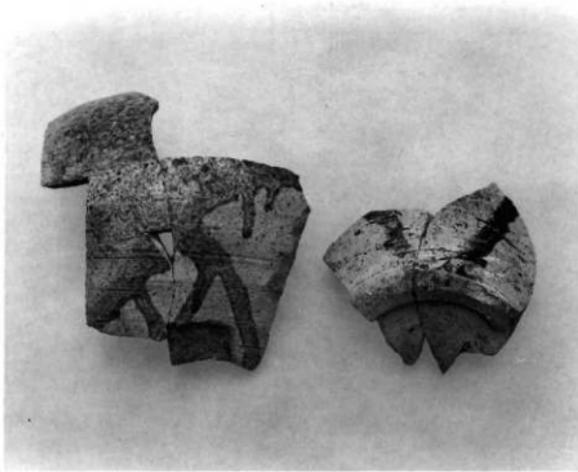
図版 15



A. III区 緑釉陶器素地稜碗 (図 47-18)



B. III区 灰釉陶器碗・皿 (図 47-19・20)

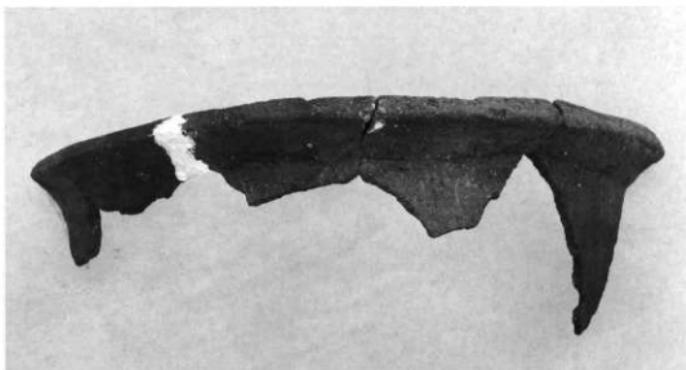


C. III区 灰釉陶器壺 (図 47-23・24)

図版 16



A. III区 甲斐型土器壺（墨書「朝」）（図 47-4）



B. III区 甲斐型土器壺（図 47-6）



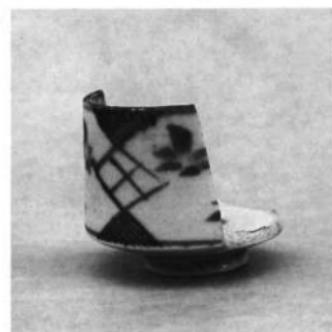
C. VII区 灯明皿下皿（図 50-1）



A. 中宮八幡堂跡
太白手碗
(図 60-6)



B. 中宮八幡堂跡
端反碗
(図 60-12)



C. 中宮八幡堂跡
筒型碗 (図 60-13)



D. 中宮八幡堂跡 土瓶蓋
(図 69-18)

村山浅間神社調査報告書

－遺跡範囲確認調査編－

平成 17 年 3 月 31 日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町 150 番地

(0544) 22-1111 (代)

印刷 株式会社マグナプロセス

〒418-0044

静岡県富士宮市大中里 76

(0544) 28-0500